

令和2年度 筑波大学附属学校研究報告

## 附属学校群の新たな試み

～コロナ禍のなかで～



(附属視覚特別支援学校高等部と  
タイ視覚障害者支援クリスチャン財団とのオンライン交流)

令和3年3月

筑波大学附属学校教育局



## はじめに

筑波大学附属学校教育局教育長 茂呂 雄二

毎年 2 月下旬に開催していた恒例の「附属学校研究発表会」は、COVID-19 感染拡大の影響を考慮して中止とし、附属学校教育局 HP 及び紙面で報告することにしました。

今年度はコロナ禍により一斉休業および緊急事態宣言下で始まり、オンラインによる遠隔授業や制限された時差通学と分散登校の中で教育活動を再開しました。通常の授業ばかりでなく、筑波大学附属学校群の特色である 3 拠点構想（先導的教育，国際教育，教師教育）での教育活動も中止，延期，オンラインでの実施を余儀なくされ，苦悩の一年でした。しかし，状況を嘆くばかりでは何も生まれない。窮地に追い込まれた時の創意工夫を報告することは，今後の実験校としての教育活動の在り方を前進させるとの思いから，附属学校教育局 HP 及び紙面での報告に踏み切ることにしました。



昨今，普通附属 6 校と特別支援 5 校を有する筑波大学附属学校群は、『境界を乗り越える（バウンダリー・クロス）』を合言葉に教育活動を進めてきました。この言葉は，最近の学習科学や学習心理学で耳にする言葉です。従来の学習のとらえ方が，外部から設定された枠や，与えられた条件に適応することが中心で，学びの本質を捉え損ねていたのではないかと，むしろ学びは今の限界を突破して，新しい見方，新しい感じ方，いままでにないパフォーマンスを作り上げることにある，現代の学習心理学はそう考えています。

そもそも本学のスローガンは，開かれた大学でありボーダーレスな学びの環境を作るということにあり，境界を乗り越えることは，本学の建学の理念に通じる大目標です。その目標の中で附属学校群が果たすべき役割は，インクルーシブな社会の実現のための実験教育と人材育成にあります。そして，COVID-19 感染拡大という難局に遭遇し，その役割は益々重要性を増してきました。

以上の思いから本報告を作成しました。I ではコロナ禍での各附属学校の創意工夫を紹介し，安全安心を念頭に置いた学習保障と環境の整備，オンラインによる境界を乗り越えた HR（学級）活動・学校行事・国際交流での新企画，幼児・児童・生徒の年齢や多様な障害を念頭に置いた個性と能力を伸長させる遠隔授業の開発等を発信し共有することを目指しました。II では 11 附属が協働して実践した取組みを紹介し，コロナ禍でのボーダーレスな学びを通してのインクルーシブ及びグローバル教育の実践例を発信し共有することを目指しました。どれもダイバーシティ社会実現のためのショーケースであり，国の東西を問わない喫緊の課題への挑戦であると考えています。

長い間続けてきた附属学校研究発表会は，2019 年度に分科会形式を導入し（2020 年 2 月に開催），高い評価を受けました。それを発展させる矢先に COVID-19 感染拡大に見舞われ，対面での研究発表会開催を凍結することとなりました。再開時には，コロナ禍を乗り越えた実践を通して成長した本学附属学校の姿を披露できるよう，『境界を乗り越える（バウンダリー・クロス）』の精神の下，今後の教育活動に邁進するつもりです。

# 目 次

## I 附属学校研究報告「附属学校群の新たな試み ～コロナ禍のなかで～」

1. 小学校	2 頁	2. 中学校	5 頁
3. 高等学校	12 頁	4. 駒場中・高等学校	13 頁
5. 坂戸高等学校	16 頁	6. 視覚特別支援学校	18 頁
7. 聴覚特別支援学校	21 頁	8. 大塚特別支援学校	24 頁
9. 桐が丘特別支援学校	26 頁	10. 久里浜特別支援学校	38 頁

## II 附属学校群・附属学校教育局としての取組み

1. 共生社会を目指す芸術・文化交流の集い	42 頁
2. 朝永振一郎記念「科学の芽」賞	44 頁
3. WWL コンソーシアム構築支援事業	46 頁
4. 附属学校教育局プロジェクト研究概要	51 頁

## III 附属学校の研究概要

1. 小学校	56 頁	2. 中学校	58 頁
3. 高等学校	60 頁	4. 駒場中・高等学校	62 頁
5. 坂戸高等学校	64 頁	6. 視覚特別支援学校	66 頁
7. 聴覚特別支援学校	69 頁	8. 大塚特別支援学校	72 頁
9. 桐が丘特別支援学校	74 頁	10. 久里浜特別支援学校	78 頁

## IV 附属学校教育局・附属学校について

1. 附属学校教育局	82 頁
2. 附属学校の主要な沿革	83 頁

# I 附属学校研究報告

## 「附属学校群の新たな試み ～コロナ禍のなかで～」

1. 小学校	.....	2 頁
2. 中学校	.....	5 頁
3. 高等学校	.....	12 頁
4. 駒場中・高等学校	.....	13 頁
5. 坂戸高等学校	.....	16 頁
6. 視覚特別支援学校	.....	18 頁
7. 聴覚特別支援学校	.....	21 頁
8. 大塚特別支援学校	.....	24 頁
9. 桐が丘特別支援学校	.....	26 頁
10. 久里浜特別支援学校	.....	38 頁

# 附属小学校 新型コロナウイルス感染症拡大への対応概略

## 1. 対応の内容

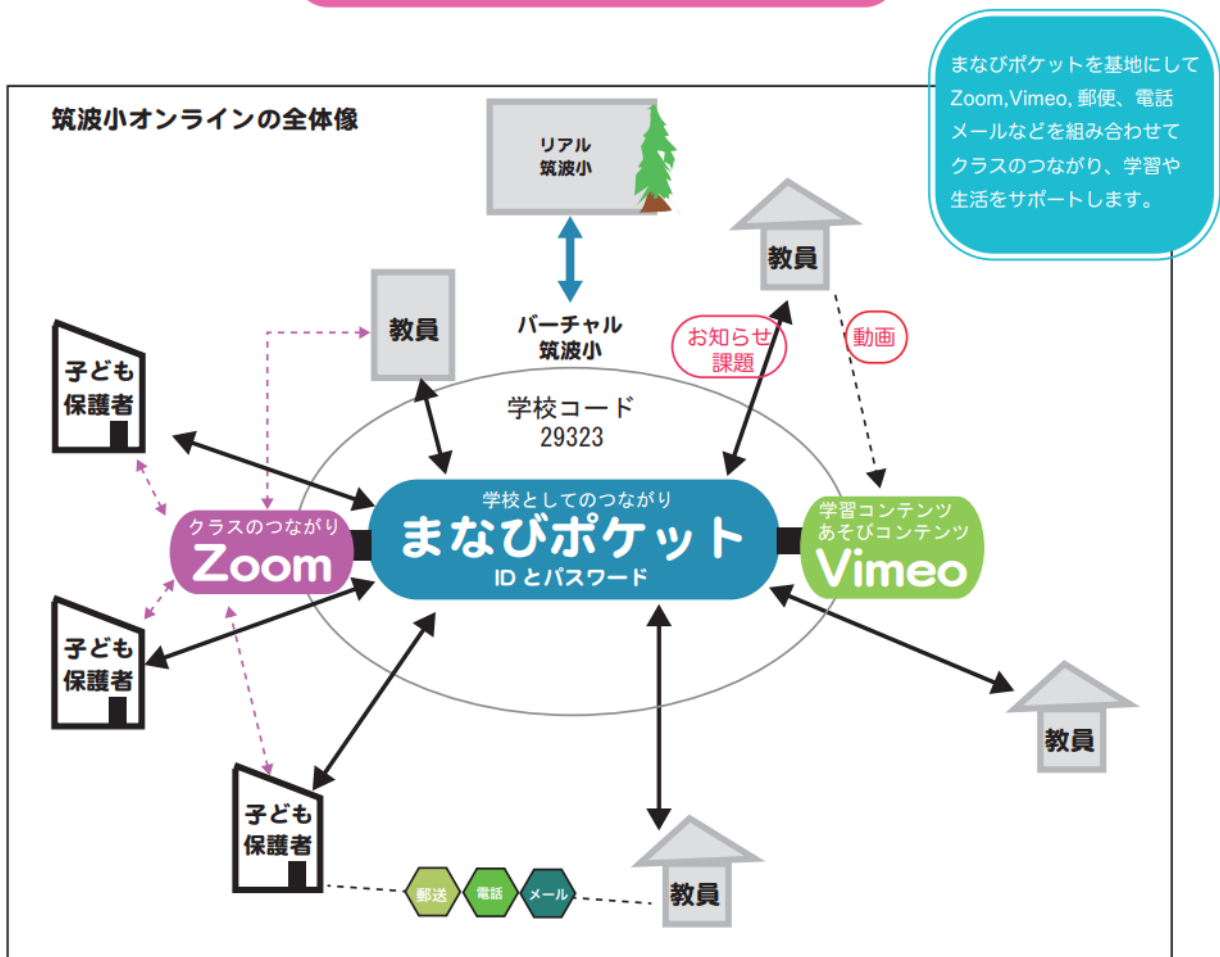
### (1) 校内校務に関して

- ・ 4月上旬 コロナ対策班の設立，対策本部とする

### (2) 児童の学習保障に関して

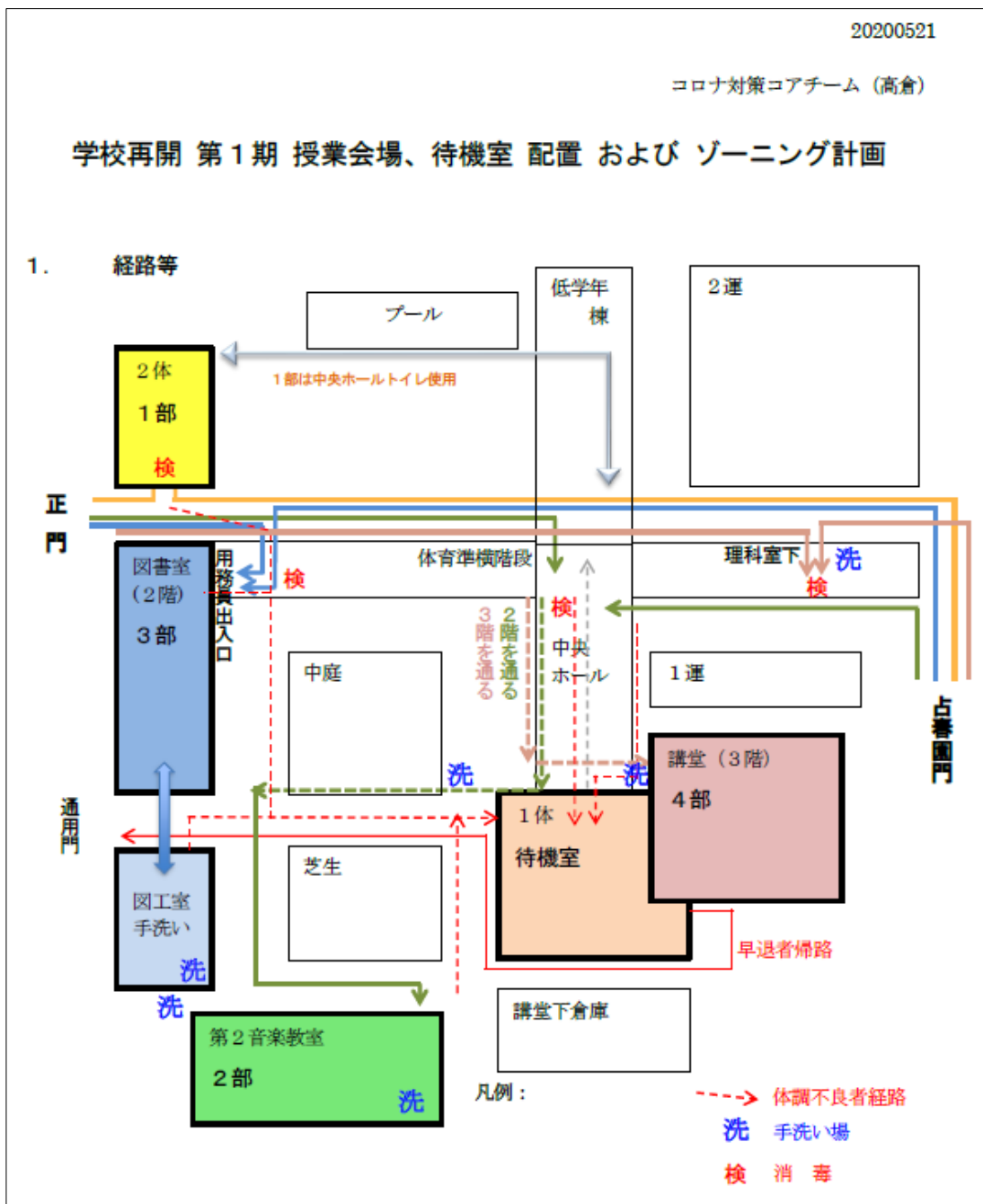
- ・ 4月よりオンライン学習システム（まなびポケット）の構築
- ・ オンライン学習の計画，運営
- ・ 5月中旬よりオンライン学習開始，6月よりオンライン，リアル授業の併用
- ・ 欠席児童へのオンライン授業配信の準備

## 1、まなびポケットを中心にした全体像



(3) 児童の登校に関して

- ・ **ステップ1** 6月1日より1/6の児童の登校，短縮4時間授業（オンライン学習併用），校内ゾーニングの計画，実施



- ・ **ステップ2** 6月15日より1/2の児童の登校，短縮4時間授業（オンライン学習併用），給食なし
- ・ **ステップ3** 7月13日より，ステップ2に加え，6学年毎日登校  
1学期期間を7月31日まで延長，2学期始業を8月24日に前倒し，授業時数の確保に努める
- ・ **ステップ4** 8月24日より全児童の一斉登校，6時間授業（7時間目はカット），給食あり（ステップ4は，年度末まで継続）

#### (4) 学校行事に関して

- ・入学式の中止
- ・春の遠足，きょうだいタイム（秋の遠足）の中止
- ・宿泊を伴う行事（3，4，5，6学年清里合宿，6学年富浦遠泳合宿，5学年雪の生活合宿，6学年修学旅行）の中止。（修学旅行は校内および周辺で代替行事開催）
- ・運動会の中止（→大幅に縮小したスポーツイベントを児童の企画により実現）
- ・若桐祭（PTA 行事）のオンライン開催
- ・1年生を迎える子ども会，卒業生を送る子ども会のオンライン開催
- ・卒業証書授業式の縮小開催，およびオンライン配信

#### (5) 研究推進に関して

- ・**6月の学習公開・研究発表会**→8月9日に延期（オンライン開催）。本来2日間開催のところ半日の開催。学習公開は行わず，研究発表，各教科等分科会のみ開催。招待者のみZoomで参加いただく。約150名の参加。
- ・**2月の初等教育研修会**→本来2日間開催のところ1日の開催（オンライン開催）。学習公開は行わず，各教科等分科会のみ開催。一般参加も受け付ける。約1800名の参加。

#### (6) 入試に関して

- ・例年より約1か月前倒ししての実施とした。冬季に新型コロナウイルス感染症再拡大の懸念による措置。
- ・願書配付，1次受付，2次受付について，保護者の来校を行わずに実施できるよう，オンラインによる手続きシステムを導入。
- ・密を避けるため2次考査の受験者数を例年の70%弱に抑える。それに対応した1次抽選，2次考査の準備，実施。
- ・1か月前倒ししたことによることか，あるいは続いているコロナ禍によることかは不明であるが，入学予定者の中から辞退者が例年よりかなり多く出ることとなった。

## 2. 考 察

- ◇図らずも授業や家庭学習のオンライン化が一気に進み，今後のGIGAスクール構想への対応がスムーズになることを予感させる結果となった。
- ◇入試の時期やシステムについて一考する機会を得た。

（文責 高倉弘光）



## 附属中学校 コロナ禍での学級活動の実践例

筑波大学附属中学校では、道徳と特別活動(学級活動)を統合し、HRH という2時間の活動を行っている。学年担任団の指導のもと、学級や学年での活動や実践を通して生徒の意識と行動の有機的な関連を図り、民主的な社会の一員としての資質を育成している。本報告は、第2学年が5月の休校中に、Zoomを用いて行った取り組みの紹介である。

### 「立場をこえて、広がる輪」 2年生バージョン (中村学年 HRH 報告)

#### 1. はじめに

昨年度のHRH「シリーズもの学習」で、「立場をこえて、広がる輪」というテーマを設定し、「障がいについて知る」→「考える」→「体験する」→「共有し、より深く考える」という流れの中で、学びを得てきた。そして、3月からの突然の長期の休校となり、誰一人として経験をしたことのないこの状況下で、「新型コロナ報道について」や、「この状況下でこそこできること」をテーマに、ロイロノート(学習支援クラウド)を活用し、204人で意見交換を行うという活動を行った。「新型コロナウイルスに関して、常に世界各国と日本の感染者数を確認したり、対応策を比較したりしている」「この瞬間、世界で何が起きているのかを知り、積極的に関わることが大切」、また、報道に関しては、「報道だけに頼らず自分で調べる」「1つの報道を鵜呑みにするのではなく、いろいろな情報を得る」「報道自体を多面的に見ることが必要」など、さまざまな意見が出され、オンライン上ではあったが活発なやり取りができた。

そんな中、新型コロナウイルスの問題に関して、アメリカやイタリア、フランス、中国...こうした国々についての報道はたくさんされているが、支援を必要としている国々や元々閉鎖的な地域はどのような状況なのだろうか、という疑問が出された。それを受け、「こんな時だからこそ、世界の人々と繋がり、リアルに声を聴いてみてはどうだろうか?」「この危機的な状況下でも活動している日本人や組織があるということも、ぜひ知って欲しい」「さまざまな立場の方々から直接話を聞いて、私たちから「輪」をどんどん広げていきたい」このような思いから、JICA(国際協力機構)のザンビア事務所、そしてパレスチナ事務所の方々に協力していただけることとなり、この学びがスタートした。閉鎖された時期にこそ、自分自身の視野をさらに広げてほしい、世界に目を向けることで、日本という国に住む自分自身を振り返る機会としてもらいたい、という強い願いが込められた活動となった。そうすることで、学年目標である“Respect”を再認識し、なりたい自分の「ありかた」も考えるきっかけとなった。

#### 2. インタビューに協力して下さった方々

【パレスチナ事務所】ラスランさん(Raslan YASIN パレスチナ ラマツラ事務所)、  
モハメドくん(13歳・ラスランさんの長男)、坂元律子さん(JICAパレスチナ事務所次長)

【ザンビア事務所】マラマさん(Mukupa Malama ザンビア事務所)、  
ムワバさん(Mwaba Mumba ザンビア事務所)、松村元博さん(JICAザンビア事務所 次長)

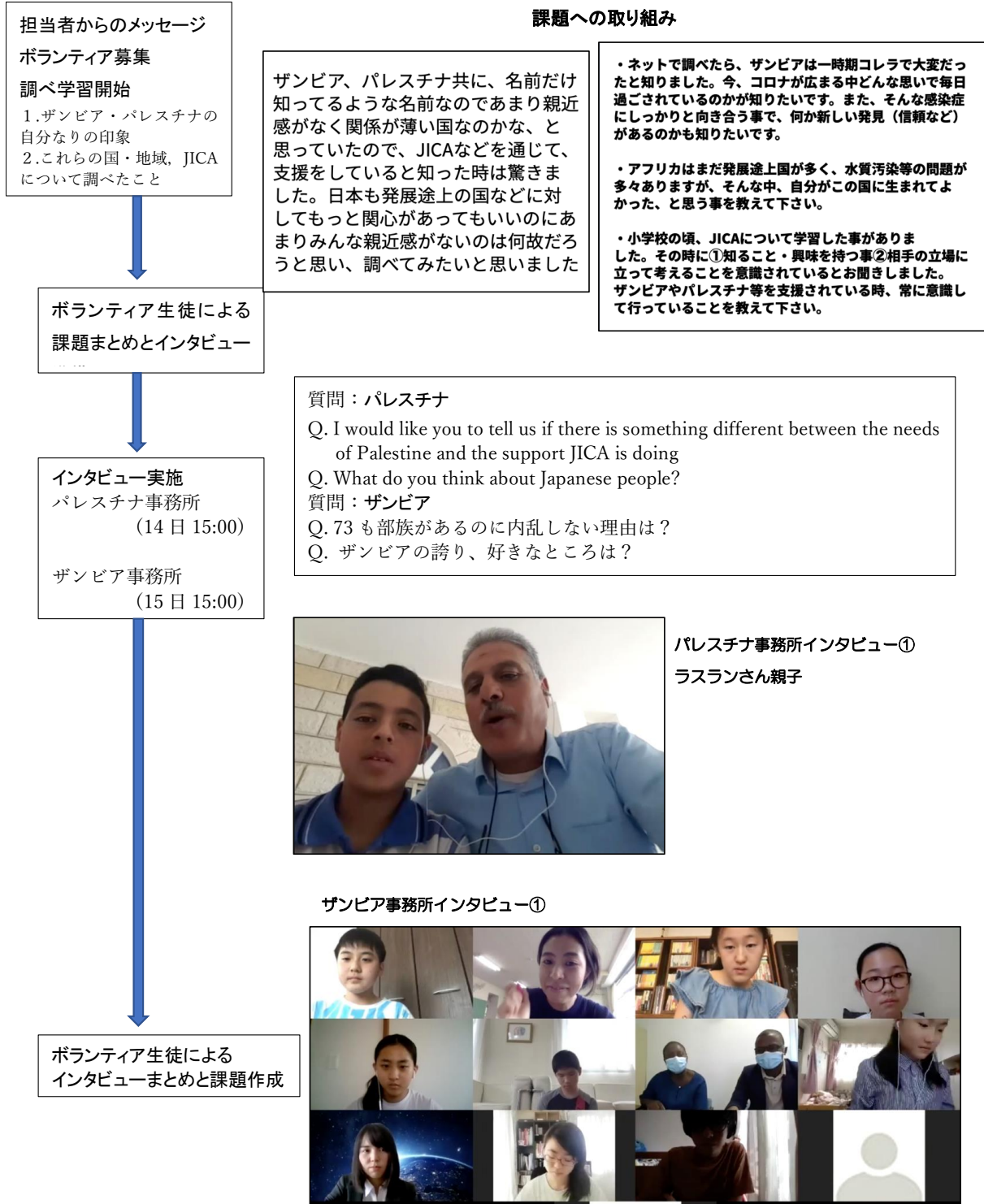
【JICA 東京】古賀聡子さん：パレスチナ事務所、ザンビア事務所とつないでいただいた

【ボランティア生徒】パレスチナ 6名，ザンビア 8名

### 3. 3週間の学びの流れ

※ 課題や取組み，質問は全て，活動の一部を掲載

【5月3週（11日～）】



【5月4週（18日～）】

ボランティア生徒より配信  
 ・インタビューまとめ  
 ・課題  
 ・インタビューの様子

パレスチナチームまとめ

パレスチナのニーズとJICAの支援に  
すれ違いはあるのか

今回インタビューしたラスランさんによると、JICAはパレスチナのことを十分に下調べをして、どのような支援が必要かを把握しているとのことでした。また支援に優先順位をつけて支援に確信を持ってやっているとのことでした。なので**支援とニーズの間にすれ違いはない**とのことでした。JICAの素晴らしさを改めて実感しました!!



ザンビアチームまとめ

1週目 ザンビア インタビュー  
 Q.「国旗に込められた意味や由来は何か。」

(ザンビアの国旗)



A.  
 それぞれの色が表していること。  
 緑:豊かな自然  
 黒:ザンビアン  
 オレンジ:鉱物資源  
 赤:血の色(独立のためには血を流さざるおえなかったから)  
 イーグル:愛国心や自由、困難に負けず突き進む国民の力  
 そして...  
 ザンビアも含め、世界の国旗を見てみると、色鮮やかなものがたくさんある。  
 そこでぜひ、世界中の国旗を調べて、どんな色やものが使われているかやその色やものが表現していることなどを学ぶのも良いだろう。

パレスチナチームからの課題

課題 (パレスチナ)

JICA現地職員であるラスランさんの息子さんであるムハンマドくんが以下のことを知りたがっていました。どれか1つに答えて、提出箱に提出してください。

- ①パレスチナの印象、知っていること
- ②フットボール (サッカー) について  
 ※ムハンマドくんはキャプテン翼が大好きなのですが、知っていますか?  
 ※日本の人気のあるサッカー選手チームのことを知りたいそうです。
- ③自肅中、どんな生活を送っているか
- ④中東地域で起きている戦争について知っていること

ザンビアチームからの課題

ザンビアPart3～アフリカの旗に込められた願いとは?～

この質問はJICAの松村さんが「アフリカはなぜカラフルな国旗が多いのか、調べてみると面白いかもね」と言ってくださったのをヒントにこの課題にしました。アフリカ54か国このうちどれか1か国以上調べてください!



課題への取り組み  
→共有

パレスチナ課題への取り組み

- ①パレスチナについて知っていること  
 残念ながら、私がパレスチナについて知っていることは本当に少ないですが、  
 ・有名なバンクシーの絵がたくさんあること  
 ・イエス=キリスト生誕地、ベツレヘムがあること  
 ・ある日イスラエルが建国され、多くのその土地に住んでいたパレスチナの人々が難民となったこと  
 ・水タバコというものがあること  
 ・アラビアのロレンスという映画でパレスチナ問題の発端が描かれていること (祖母と母から聞いただけで映画を見たことがなくて残念です)

印象

古代、ユダヤの人々も住んでいる場所を奪われたのかもしれないがパレスチナの人々はごく最近、住んでいる場所をイスラエルに奪われている。また、パレスチナに住む人々はイスラム教の人々が多いが、聖地エルサレムはイスラエル側にある。エルサレムはイスラム教だけでなく、ユダヤ教、キリスト教の聖地でもあり、複雑な関係にありそう。住んでいる場所を、心の拠り所を返して欲しくて戦っているという印象がある。  
 いくつもの宗教の聖地だから、地理的に押さえておきたい場所だからなのか、かなり昔からローマがきたり、十字軍が遠征にきたり争いが勃発する回数が多いようだ。古代から栄えているので色々魅力的な遺跡があるはずだ (壊れられていなければ)。

ザンビア課題への取り組み

アフリカの旗に込められた願いとは?

- スーダン共和国
- 国旗の意味
- 赤:革命の犠牲者の血
- 白:平和、未来への希望
- 黒:アフリカ大陸、革命のシンボルの黒い旗、国名
- 緑:農業、イスラム教



南アフリカ共和国

アパルトヘイトの終わりと人種差別主義からの脱却を示すため1994年4月27日に制定された。公募案が多かったため決まらず暫定的に南アフリカと関係の深いアフリカ民族会議の旗とイギリス、オランダの国旗を組み合わせた旗であったが、その後使われ続けている。  
 正式な国旗の色は決まっていないが、



- 赤:過去の対立の中で流された血、
  - 青:空と二つの海、
  - 緑:産物と自然、
  - 黄:天然資源(この色は金を)
  - 黒:黒人の国民、他のアフリカ諸国とのつながり
  - 白:白人の国民、平和
- をそれぞれ表しているとされる。

インタビュー実施  
 パレスチナ事務所  
 (21日 15:00)

ザンビア事務所  
 (22日 15:00)

質問: パレスチナ

- Q. What do you think is interesting about Palestine?
- Q. Is there something traditional about culture or food in Palestine?

質問: ザンビア

- Q. 経済力が上がっている中、下がらないようにする対策は?
- Q. ザンビア政府、JICAのコロナ対策は?

パレスチナ事務所インタビュー②でのプレゼン

**Football**

◎Captain Tsubasa

- Some students have read the comic series.
- Some students have watched the anime series.
- Many of my junior high school students know the comic series.
- A student recommended "Boku wa Misakitaru."

◎Popular team and players

- \* Popular team
- F.C.Tokyo
- Urawa Red Diamonds
- Kasima Antlers
- \* Popular players
- Keisuke Honda
- Shinji Kagawa
- Kazuyoshi Miura

ザンビア事務所インタビュー②



ボランティア生徒による  
 インタビューのまとめと  
 課題準備

【5月5週（25日～）】

パレスチナチームまとめ

ボランティア生徒より配信

- ・インタビューまとめ
- ・課題
- ・インタビューの様子

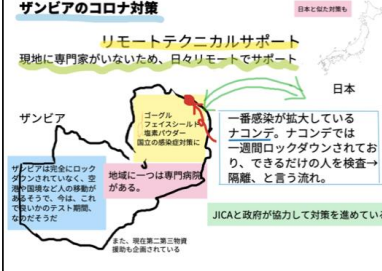
**Q.パレスチナの伝統的な文化は何ですか？**  
 A.パレスチナでは、ウエディングのときにそのときに着るウエディングドレスが伝統的に受け継がれているものです。  
 また、伝統的な課題は、農業の問題というものはあるけれども、問題は数少ないです。



ザンビアチームまとめ

**ザンビアのコロナ対策**

リモートテクニカルサポート  
 現地に専門家がいないため、日々リモートでサポート



一番感染が拡大しているナコンデ。ナコンデでは一週間ロックダウンされており、できるだけの人を検査→隔離、と言う流れ。  
 JICAと政府が協力して対策を進めている

パレスチナチームからの課題

- 2、オプション課題  
 次の6個の課題から一つ以上の課題に答えてください。  
 それぞれの説明のカードが後ろにあります！
- ①エルサレムの宗教の聖地について
  - ②中東戦争について
  - ③コロナウイルスについて
  - ④世界と日本
  - ⑤ガザ地区について
  - ⑥インタビューで気になったこと、知りたかったこと

ザンビアチームからの課題

**第5週ザンビア課題Part2-2～今回のインタビューの考察、質問～**

今回のインタビューの考察や質問は、「インタビューの事後報告」というファイルをよんで、カードに書いてください。  
 できる人は新たに調べたことなども入れてください。  
 提出箱は、  
**ザンビア課題Part2-2～今回のインタビューの考察、質問～**  
 です。間違えないよう、注意してください。

※今回は、課題の答えの見本をのせません。どうやって書くか見たい場合は、前回の課題説明をみてください。

課題への取り組み  
 →共有

パレスチナ課題への取り組み

**コロナウイルスについての課題**

もし私がJICAの職員だったら、石鹸、消毒液、マスクを作って寄付したいです。なぜなら、石鹸で手を洗うことで感染リスクをととても減らせ、消毒で除菌できるから。  
 みなで最大限の感染予防ができるよう、そのサポートをしたいと思った。

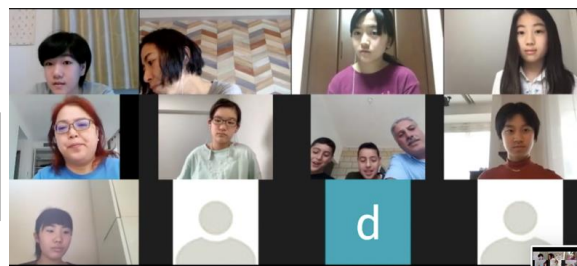
ザンビア課題への取り組み

私は、ザンビアの経済の農業の活性化させることについて考えました。確かに農家の方に補助金を与えて農家の方が自由に使用したほうが確かに改善しやすいと思いました。貧困解消のために、農家と農家が協力すれば良いのかなと思いました。そうすれば、昔の日本みたいに機械を貸し合ったり、情報を共有できたり、作業も人数が多くなることで効率よく進むなどと考えました。そこで新しい質問です。農家の方たちが良い仲間じゃなければ協力してできないと思ったため、農家の方たちは仲が良いのですか？

インタビュー実施  
 パレスチナ事務所 (28日 15:00)  
 ザンビア事務所 (29日 15:00)

質問：パレスチナ  
 Q. What is the most joyful experience at JICA?  
 質問：ザンビア  
 Q. 具体的にどんな対策のおかげでアフリカの中でも学校に行くことができている人が多い国になっているのか？

パレスチナ事務所インタビュー③



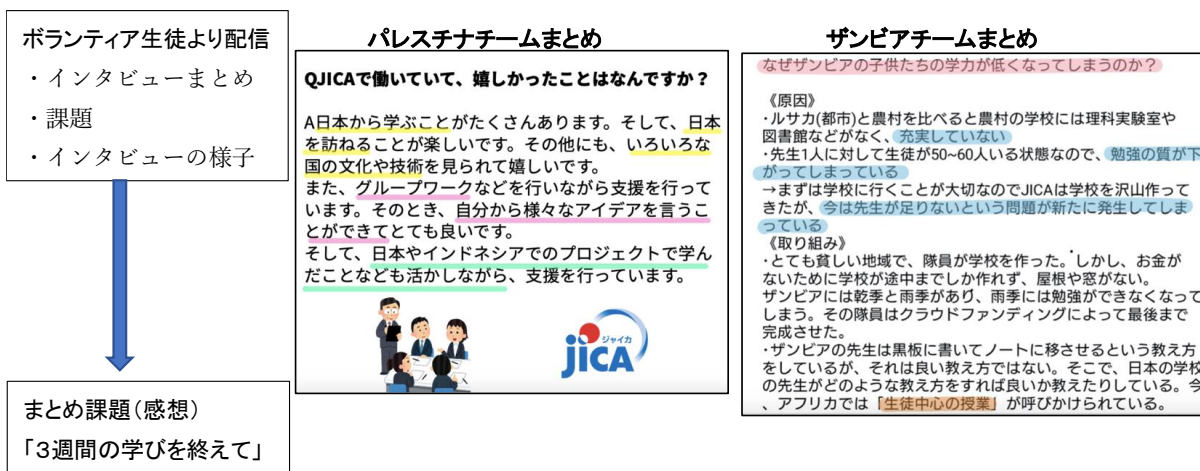
ザンビア事務所インタビュー③

ムワバさん・松村さん・マラムさん



ボランティア生徒による  
 インタビューのまとめと  
 課題準備

#### 4. 学びのまとめ



今回のインタビューで、世界には様々な状況におかれた国がたくさんあるということを改めて知りました。貴重なお話を伺うことができたので嬉しく思います。私は、パレスチナとイスラエルの関係について興味を持ちました。今までニュースで見たことは何度かあったのですが、実際にそこに住んでいる方々のお話を聞くのは初めてだったので、「遠くの国」という認識から親近感のようなものがわきました。今回私が感じたのは、戦争の解決は一筋縄でいかないということです。イスラエルもパレスチナも色々な歴史や情報などによってこのような事態になってしまったのだと思います。なかなか解決するのは難しいと思います。しかし、私としては今こそ団結すべきときなのではないかと思いました。コロナウイルスが猛威を奮っている現在、諸外国との助け合いはとても重要だと感じます。人間というのは共通の敵をつくると団結するという習性があると私は思います。お互いに争うのではなく、民族、国境に関係なく広がっていくウイルスを敵にすることで仲が少しでも解決するのではないかと。でも、現実には米中対立が深まったりと難しいです。私たち日本人はそれを黙って見ているのではなく、JICAの取り組みを理解し、自分たちでも考えていくことが大切だと思います。これからも、国際情勢に目を向けていきたいと思っています。

この三週間で私が一番学んだことは何事も自分のイメージで決めつけないことだ。ザンビアとパレスチナという国は最初は全く知らなかった。名前を少し聞いたことがある程度で、なんでそんな国のことについて調べたりするのか、と思っていた。実際インタビューのこととかを読んでみて、それぞれ問題があるけど、自然が美しかったり、とても平和だったり見えなかった部分もたくさん見えてきた。そんな素敵な国が、困っていることを少しでも自分たちが助けられるようになりたい。世界中の国について理解して、深く知り、助け合うこと。それがとても大切だと気づくことができた。

ザンビアやパレスチナに住んでいる人々は貧しくても今の世の中に住んでいる僕たちより豊かな心を持っていると思う。ムハンマド君やパレスチナの方々のインタビューを見

てみて僕はそう思った。それは彼らがまだ子供にもかかわらず戦争や平和とは何かについての思想、伝統を引き継ぐためにはどうすれば良いのかや、世界の他国への具体的興味など大人さながらの考えを持っていたからだ。また、ムハンマド君は将来 JICA に入って自分の祖国の戦争を止めて平和にしたい、という話を聞いていて僕たちは気付いていないだけで平和で幸せな世の中に住んでいるのだなあと思った。これからは今回の HRH の学習で学んだことを生かして日々自分は幸せな世の中に生きている、という事を自覚しながら他国への興味なども持ってみたい。

僕たちの中から代表して言ってくれているインタビューをしてくれた人達は本当に凄いなと思った。それはこの時期なので zoom でのインタビューという事でいつもよりやりづらいう状況ながらもスライドを作り、英語でちゃんとインタビューをしたり、うなずいたりしながらコミュニケーションを上手にとっていたからだ。

最初は、ザンビア・パレスチナに対して、どのような国か、どのような内情をかかえているのかすらはっきりとしたイメージが無かった。しかし、少しずつ質問を突き詰めていき、積極的な交流をしていくうちに、2つの国の事情や現地の人々の活動の様子を知ることができ、細かい「なぜ」ということにも丁寧に返答してもらったことで、産業や自然と宗教等の関わり合いを深めていくことができた。おかげで、今でははっきりとしたイメージを持つことができるようになり、自分にできることとはなんだろう、と考えることができるようになった。また、この活動を通して交流の大切さを実感することができた。今後も、この活動を忘れずに、世界に少しずつ目を向けていきたい。

私はパレスチナについての感想を書きたいと思う。

私はパレスチナのインタビューの事後報告を見ていて、今の自由があることは当たり前なことじゃないんだ、そうじゃない人たちもいるのだなと思った。パレスチナのインタビューに対して、ラスランさん達は平和で豊かで自由のある国にしたいということをおっしゃっていた。今のパレスチナはイスラエルに占領されていて、パレスチナの人たちはあまり自由に動けない。正直私は他の国の方たちの生活をあまり考えたことがなく、今の日本のような自由でみんなが満足できるような暮らしが当たり前のような気がしていた。けれど、今回のラスランさんたちの意見を聞いて申し訳ない気持ちになった。私たちのような自由な生活ができることは決して当たり前なことではなく、本当に恵まれている。世界には自由に生活できない人が何人もいるのだと思った。またそれと同時に、自由な生活を送っていない人たちに対して、私たちができる支援は何だろうと考えてみた。募金や物の寄付、現地では学べないようなことを日本が教える...などなど。本当にいろいろなことがあると思う。たとえ小さな支援だとしてもそれを積み重ねていけば大きな支援に繋がるから、やっていくべきだ。私はこのようなことを率先してやっていけるような人になりたいと、この HRH を通して思った。

インタビューの事後報告などを見て、感じたことは、私達がカードで提出したものをしっかりまとめて、そしてインタビューを始める前にちゃんとどんな回答が返ってくるかを予想していて、本当にすごいと思いました。

ザンビアもパレスチナも今まであまり深くは知らなかったが、このシリーズもの学習で、担当の人たちがインタビューなどをしてくれて、興味も湧きザンビアのこともパレスチナのことも沢山知ることができて今ではかなり色々な知識ができました。歴史や今の生活など、他の国の人の私生活や考え方などにも学ぶことが沢山ありました。これからどんどん他の国と関わっていくことが多くなってくると思うのでその時はこのシリーズもの学習で学んだり発見出来たりしたことを生かしていきたいと思います。

今回 JICA で働く方々について学んだが、改めて素晴らしい活動だなと思った。自分の地元というわけではない人もいて、大変な仕事だとわかっていて自らその仕事をしようと思った JICA の方々は大変勇気があると思った。このような方々の話を聞くというのはそれだけで大変価値があるものだと思うので、立候補しなかった自分が改めて悔やまれる。衛生面に問題がある場所が多い発展途上国ではクラスターが起こる確率も高いだろう。この時期、発展途上国にいるのは危険だがそれでもその国を発展させたいという意思はとても強いものなのだと思う。自分の健康に気をつけて活動を頑張してほしい。

(文責：中島 真紀子)

# 附属高等学校 休校時の生徒の学習保障に向けた実践

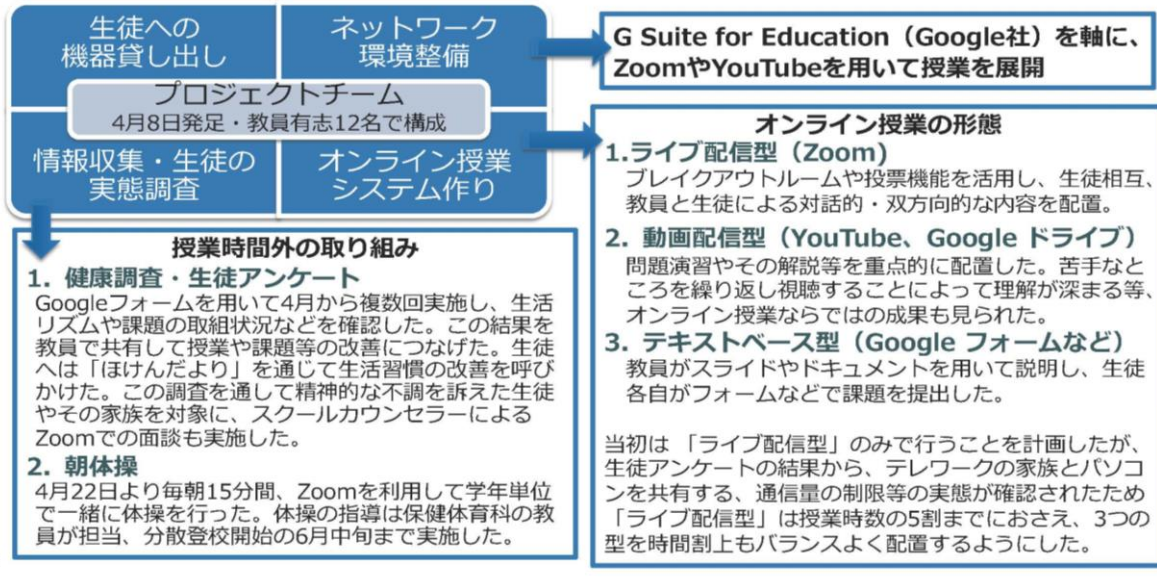
## 休校時の生徒の学習保障に向けた取り組み



筑波大学附属高等学校  
Senior High School at Tsukuba, University of Tsukuba

学校としての基本方針設定（2020年4月8日）

「生徒の教育を受ける権利を保障するために、すべての生徒がひとしく、質の高い学習・教育活動を行うことができるよう最大限の努力をする」



## 休校時の生徒の学習保障に向けた取り組み



筑波大学附属高等学校  
Senior High School at Tsukuba, University of Tsukuba

**【物理】 動画配信授業とリアルタイム授業(Zoom)の組み合わせ**

週に YouTube による授業を2回、Zoom によるリアルタイム授業を1回のペースで行っている。Zoom は2学年の選択者約200人に対し一斉に行っている。

(動画) 自作の実験動画やKeyNoteのスライドに、編集ソフト「Ink2Go」で音声や書き込みを加え1つの動画にする。上は実演の温度測定に解説を加えている様子。

(Zoom) 動画授業で学んだ知識を活用して、実験結果を予想する課題に取り組む。生徒が誤解しがちな概念に焦点を合わせて、予想分布が分かればやすい設定をねらう。課題を提示し、まず個人で予想をさせ、投票機能で予想分布を集計して共有。その後ブレイクアウトルームを利用して、4～5人のグループで予想について話し合う。その後、もう一度投票機能で予想分布をとる。

**【国語】 PowerPoint とペンタブを活用した動画の配信**

1. 3年漢文では YouTube 限定公開による動画配信を中心とした授業を実施。PowerPoint のスライドを土台にアニメーションとペンタブを併用した「スライドショーの記録」による動画の配信とともに、PDFによる資料・ワークシートの配布、Google Formsによる取り組みチェックと課題回収、Google Classroomの限定公開コメントによる個々の質問への対応を行う。扱う内容は、漢字文化の形成など文字文化の歴史、漢文読解に必要な知識とその演習、文章の読解とそれをもとにした考察等。生徒には特に、読み方の説明スライド、質問に答えるコーナー、文化や歴史とつながる話が好評である。

**【英語】 Zoom による英語でのディスカッション**

英語のスピーキング授業(3年選択・11名)では、Zoomを用いて約90分間、英語でのディスカッションを楽しんでいる。グループディスカッションのテーマは生徒たちで決定。これまでのテーマは①「夢の卒業旅行プラン」コンペ ②オンライン授業に関する提言 Zoom 授業後の振り返りは Google Form で提出し、教師がまとめたものを PDF で後日共有する。毎週盛り上がり、授業の最後には「早く教室で会いたいね」の声が…。

**【数学】 2人の教員での掛け合いによる授業動画の配信**

数学科教員2名がそれぞれ教員役、生徒役に分かれて掛け合いによって授業を進める。YouTube に限定公開でアップし、Google Classroom で課題配信。生徒は動画視聴後、限定公開コメントで授業内容に関連した感想、質問を記入。担当教員はすべてのコメントに対して返答する。生徒役の教員は、寄せられたコメントをとりあげ、次の授業内で質問したりしている。「掛け合いがあるので実際に参加しているつもりで受けられる」の声もあり、概ね好評か(?)

(文責 矢田理世)



## 附属駒場中・高等学校 新型コロナウイルス拡大影響下の取組み

### 1. 中華民国台中市立台中第一高級中学との研究交流会

#### (1) 研究交流会概要

本校では、2009年よりSSH事業のひとつとして、台中市立台中第一高級中等学校（以下、台中一中）との交流事業を行っている。今年度はその12年目にあたり、この間、各教科における課題研究の指導やプレゼンスキルの向上などが図られてきた。応募生徒の数も多く、本校の国際交流の代名詞ともいえるプログラムである。交流は主に、隔年5月に台中一中の生徒約60名を本校に迎えるプログラムと、毎年12月に本校生徒が台中一中を訪問して行うプログラムによって構成されている。本稿では、今年度のコロナ禍における12月の台中一中との研究交流会プログラムのオンライン実施を取り上げ、遠隔拠点との映像・音声のやり取り、資料の共有などについての工夫を述べる。

#### (2) 2020年度のオンライン研究交流会

本年度の研究交流会は、現況を鑑みてオンラインで実施することを7月に判断し、生徒に夏休みを有効に活用して課題研究を進めてもらうことを図った。交流会は、12月11日に高校1年生3名、高校2年生9名でGoogle Meetを使用して台中一中とオンラインでの研究交流会とした。研究発表は双方4報に加え、文化交流として学校紹介などを行った。

例年、出発前の特別講座として、英語プレゼンテーションの専門家を迎え、英語スライド資料の指導に加えて顔の向きや声の強弱、速度、ジェスチャーを交えた表現など、実践的な指導を受けて生徒のプレゼンテーションスキルの向上を図っているが、今年度はオンラインでのプレゼンであることに留意した専門的な指導をもいただいた。今後ますます必要になるであろう、オンラインコミュニケーションに活用できる姿勢や能力が育成できたと考える。

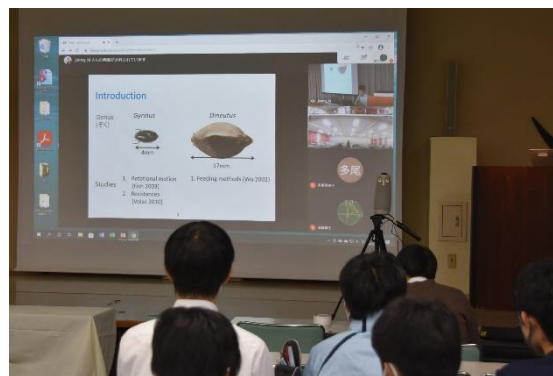


図1 資料共有による研究発表

#### (3) Google Meet を通じた海外校との研究交流会



図2 姉妹校協定調印式

研究交流に向け、生徒については発表要旨や双方の参加生徒のメールアドレスを交換し、交流日以前から情報交換が行えるようにし、学校としてはオンラインでの音声のやり取り、発表スライドの画面上での共有などについて打合せとリハーサルを入念に行った。互いに異なる機材や、日本側の脆弱なネットワークインフラからリハーサルの度に新たな課題が生まれはしたが、基本的ICT技術しか持たない教職員でもなんとか乗り越えられた。

本年は台中一中との5年間の姉妹校協定更新の年度で、その調印式もオンラインで実施した。双方の学校長による協定書調印後、記念撮影を対面式で行っているかのように行った。

生徒の研究発表においては、画面でスライド資料を共有し、スクリーン前で発表している様子を映し出し、臨場感あふれる交流が可能となった。

今回のオンライン研究発表で得た成果と課題を基にすれば、移動を伴わずして海外校との研究交流事業の発展の可能性が大いに期待できる。生徒についても、オンラインならではの発話や発表における留意点など、対面式の交流では得難い経験をすることができた。

## 2. SSH 数学科教員オンライン研修会

### (1) 研修会概要

本校数学科では、SSH 事業の取り組みの根幹を教材開発ととらえ、教科で開発した教材・カリキュラムを公開・発信するため、これまでも隔年で全国 SSH 数学科教員研修会を主催してきた。近年では 200 名をこえる数学科教員・数学教育参加者が集まる研修会に成長し、前回(2018年)は初めて本校ではなく大学の大講義室(筑波大学東京キャンパス)を利用した。今年はちょうどその実施年度にあたり、今までどおり資料冊子の作成、発表者・助言者の手配を中心に、SSH の企画として準備を進めてきたが、これだけ大規模な会となったこともあり、昨今の情勢に鑑みて対面実施を見送ることにし、オンラインでの開催に切り替えることとした。

### (2) オンラインでの実施形態

本研修会では、前述のとおり参加者が 200 名規模であること(オンラインではさらなる増加もありえるとの見通し)から、通常の ZOOM や Google Meet を用いた手作りの研修会では、受講者へのサポートが本校数学科教員だけで賄えないと判断し、外部業者への実施委託を試みた。しかし、SSH 事業での経費支援にオンライン研修会の外部委託経費は認められず、SSH 事業としての経費支援は、配信用 PC と関連周辺機器の購入に限られることになった。一方、教師教育に関する事業として大学より予算を取り付け、研修会自体は 300 拠点接続規模の外部業者委託運営にて、Web セミナーとして実施することができた。



図3 オンライン研修会 設営の様子



図4 オンライン研修会実施の様子

登壇者に関しても、従前は全国の SSH 校に依頼していたが、今回は登壇者のみ本校に来校してもらう形態を選択し、東京近郊の SSH 校に依頼することとした。結果、東京都立日比谷高等学校、豊島岡女子学園中学高等学校、市川中学高等学校、芝浦工業大学柏中学高等学校の4校の協力を得た。本校からの2報とあわせて、研修会では計6報の教材実践報告を行った。また助言者には、芝浦工業大学の牧下英世教授、

筑波大学の Scott Carnahan 准教授を迎えた。

申込は本校公式 Web サイトより受け付け、参加申込者全員に本校数学科 SSH 教材集（公式 Web サイトにて 2017 年より限定公開中）へのアクセスパスワードを送付した。限定公開サイトでは、当日の発表資料が、これまでに本校が開発した教材の PDF ファイルとともに見られるようにした。

### （3）オンライン研修会の成果と課題

事前に全国 30 都道府県から 174 名の申込があり、当日は延べ 303 件の視聴接続があった。今回の Web セミナーシステムは、PC だけでなくスマートフォンのブラウザから参加することも可能で、参加者へのアンケート結果には、地方からでも参加できる、育児休業中でも参加できる等のオンライン研修会特有のメリットが寄せられた。また、回線不具合による接続不良も何件かあったが、業者との連携により余裕をもって対応できたことも、本実施形態のメリットと言えるだろう。質疑は付属のテキストチャットシステムから受け付け、それらを配信会場の本校で登壇者をまじえて協議する形式をとったが、これについても「一般的なオンラインミーティングのように声が入る心配もなく、個人的にも質問が気軽に送りやすい」という感想があった。一方、参加者同士はそれぞれのテキストチャットの内容が見られない形態を選択したため、フロアにあたる他校参加者の生の意見も知りたかったという感想もあった。

オンライン研修会、対面による研修会、それぞれに長所・短所はあろうことが考えられるが、ちょうど本研修会が実践の仕掛けよりも教材の内容にこだわって連綿と続いているように、研修会についても内容の充実を第一に考え、それをもとによりよい実施形態を模索していきたい。

（文責 研究部 須藤雄生）

# 附属坂戸高等学校 コロナ禍での国際交流の実践

## 1. はじめに

今年度はコロナ禍のため海外フィールドワークが全く実施できない状況であった。そのため、国内においてもグローバル課題に対する課題探究が可能な場所を探していたところ、卒業生から那須町にあるアジア学院を紹介された。

アジア学院は、1973年に創立され、アジア、アフリカ、太平洋諸国の農村地域から、その土地に根を張り、その土地の人々と共に働く“草の根”の農村指導者（Rural Leader）を学生として招き、栃木県西那須野のキャンパスにて、国籍、宗教、民族、習慣、価値観等の違いを認めつつ、公正で平和な社会実現のために、実践的な学びを行っている学校である。9ヶ月間の農村指導者養成の研修は、いのちを支える「たべもの」作りにこだわり、有機農業による自給自足を基本としています。学生たちは座学、ディスカッション、見学研修、グループ単位での農場運営を通して、自国のコミュニティの自立を導くリーダーシップを養っている。

コロナ禍においても、国内で海外の人たちと共に学べる場所を模索していたところ、本校の卒業生とのつながりの中で、このアジア学院において国際フィールドワークを試行することができた。2020年11月21日から23日の2泊3日に11名という人数で、コロナ対策に常に配慮しながらの活動であった。学院では、人々が最も大切にしていかなければならない、「食」「いのち」をベースに、持続可能で平和な世界を創っていく、まさにSDGsに通底する学びを実現することができた。来年度以降も、継続的に連携を依頼しているところである。

## 2. 国内フィールドワーク@那須（アジア学院）の概要

### （1）目的

- ① コロナ禍における「国内フィールドワーク」あり方を検討し、今後、生徒の学びをできる限り確保するための試行を行う。
- ② 持続可能な社会づくりに関して、現場での農業体験と自己のライフスタイルとを比較する中で、自らはどのように将来的に関わっていくか考える機会を提供する。
- ③ 日本で研修中の海外の農村リーダーとの交流の中で、日本における国際交流の在り方を検討する。

### （2）活動日程

【11月21日（土）】

9:00 駐車場集合 検温(コロナ対策がなされた貸し切りバスで出発) →

→ 9:30 出発 → 12:00 到着・昼食 → 14:00 オリエンテーション（農場の解説）

→ 18:30 夕食 → 19:30 研修生徒の学習会① → 20:30 終了

【11月22日(日)】

8:00 朝食 → 9:30 ファームワーク → 12:00 到着・昼食

→ 14:00 フードライフに関する研修(アジア学院職員による講義)

→ 18:30 夕食 → 19:30 研修生徒の学習会② → 20:30 終了

【11月23日(月)】

8:00 朝食・清掃 → 09:30 アジア学院職員のファシリテーションによる振り返り

→ 12:00 昼食 → 13:00 アジア学院出発 → 17:00 学校到着



アジア学院における国内版国際フィールドワークの様子(2020年11月21日-23日)

## 附属視覚特別支援学校 コロナ禍における取組み

### 1. はじめに

全国的な新型コロナウイルス感染拡大の影響に伴い、本校は4月、5月を臨時休校とし、6月1日に授業を再開した。再開後も幼児・児童・生徒の健康と安全を第一に考え、感染症対策を講じながら教育活動を継続している。本校は幼稚部、小学部、中学部、高等部および高等部専攻科を擁しており、ここでは、各部科でコロナ禍において創意工夫をしながら取り組んできた実践を報告する。

### 2. 幼稚部・小学部における取組み

#### (1) 幼稚部 —臨時休校中の家庭でのあそびの支援—

##### ア. DVD「つくつくビデオ」の作成

在宅期間が長期化する中、家庭で保護者と一緒に楽しめること、幼児が幼稚部の活動を感じられることを目的として、幼稚部保育室の様子の紹介、幼稚部で活動しているリズム体操やふれあい遊び、絵本の読み聞かせ等の動画DVDを作成し、在籍幼児の各家庭に配布した。

##### イ. 「つくつくブック」の配布

感染症予防対策により幼稚部全員が一堂に会する機会が少ないため、保護者の協力を得て、在籍幼児それぞれの様子が分かる「つくつくブック」を作成し、学校再開時に各家庭に配布した。

ウ. 「幼稚部だより」を通してあそびの紹介、テレビやインターネットなどの情報提供休校期間中、家庭での過ごし方の情報提供として「幼稚部だより」を配布し、家庭の中で特別に準備しなくても楽しめるような身体を動かす遊び等の紹介、立体コピーを用いたシール貼り用紙の配布、幼児向けのテレビ番組や動画サイトの情報等の提供を行った。

#### (2) 小学部 —臨時休校中の視覚障害児童へのICTを活用した家庭学習支援—

##### ア. オンライン会議システムを用いた各種活動

【取組内容】学年での「朝の会」や「算数科」「学級活動」などの教科の授業、特別学級集団の「自立活動」など

【視覚障害等への配慮】色などの視覚的情報は、教員や弱視児童が説明して、全盲児童にも状況が分かるようにした。

##### イ. 動画配信

【取組内容】家庭で取り組める活動などを、全体、学年向けなどの対象別に、教科・領域の内容について紹介し、合計18本の動画を配信した。

【視覚障害等への配慮】

- ①ナレーションを付け、聴覚情報のみでも動画を理解できるようにした。
- ②文字と背景の色遣いを工夫してコントラストを高くするなど、弱視児童にも見やすいようにした。
- ③年齢段階を考慮し、保護者もいっしょに取り組めるようにした。
- ④児童の集中力が持続する長さの動画を作成した。



配信動画の例

### 3. 中学部・高等部における取り組み

#### (1) 4月・5月臨時休校期間中の取り組み

4月、5月は休校となったが、すべての学年の生徒に対し、教科書や課題を郵送し、自宅で学習を進められるように配慮した。また可能な範囲で、オンライン会議システムを利用した授業を行い、また動画配信サービスを利用して授業動画を提供した。授業以外では新1年生以外のクラスにおいて、オンライン会議システムで生徒同士を繋ぎホームルームを実施した。オンラインを活用した取り組みとともに、担任が定期的に電話連絡をするなど、心理面でもケアをしてきた。

#### (2) 学校再開後の取り組み

##### ア. 日常の学校生活

- ・6月から学校は再開されたが、本校の学校感染予防対策・健康管理マニュアルに従い、マスクの着用・手洗い・手指消毒・換気・三密を避ける等の「新しい生活様式」を指導し、毎時間の授業終了後及び放課後には、生徒が使用した机や椅子、ドアノブ、ロッカーなどの消毒作業を教員により実施している。
- ・物理的な消毒作業だけでなく、感染を恐れる保護者や生徒に配慮し、通学や寄宿舎での生活を自粛した生徒に対しては、可能な範囲でオンライン会議システムを利用し授業に参加させた。
- ・また、新しい学校生活によるストレスの軽減を図る目的で、スクールカウンセラーの話を聞く機会を設定した。

##### イ. 生徒会・クラブ活動

- ・中学部では、6月中旬から段階的に生徒会活動を再開し、執行委員会をはじめ係活動ごとに、内容の見直しやオンライン会議システムを活用するなど、方法を工夫しながら各種企画を実施した。
- ・高等部では、日々の生徒会活動、新入生歓迎会、東京学芸大学附属高等学校および筑波大学附属高等学校との交歓会はオンライン会議システムを利用して実施した。

##### ウ. 文化祭

- ・今年度は例年のように体育館に一同が集い開催することができなかったため、中学部と高等部が、それぞれに創意工夫をした企画を実施した。
- ・中学部では、生徒・教員のみ参加とし、実行委員会企画のゲーム、各学年の劇の発表を中心に半日程度で実施した。制限も多かったが、「32人 32色 それぞれの色に光り輝け」をテーマに掲げ、クラスカラーでTシャツを作る等の新しい取り組みもあった。
- ・高等部では、朗読劇発表会を行った。各学年がそれぞれ2チームに分かれ、朗読劇を発表した。朝日新聞社の「声の力プロジェクト」に11名の生徒が参加し、声優の方から直接声による表現の指導を受けた。
- ・また、筑波大学附属高等学校が企画したオンライン文化祭では、視覚に障害のある人が利用している道具の紹介をする動画を出品した。

##### エ. 宿泊行事

- ・例年、夏季学校（林間学校）や修学旅行を実施しているが、今年度の夏季学校は中止し、修学旅行は中学部では1泊2日、高等部では日帰りにそれぞれ期間を短縮し、感染予防を最優先にしながら実施した。

#### 4. 高等部専攻科における取り組み

##### (1) 授業実践について

- ・講義科目については、5月から各学年オンライン授業を開始したが、実技科目はオンラインでは不可能なため、講義科目との入れ替えを行い、登校再開後に行うこととした。
- ・鍼灸手技療法科の臨床実習は9月の下旬から再開した。通常では生徒一人当たり1日に2名の外来患者さんを施術していたが、感染予防の観点から、1週間に一人につき1~2名とした。また治療時間も75分の施術時間の厳守を徹底し、患者さん同士が受付や治療室内ですれ違わないよう、患者さんの出入りに時間差を設けた。備品や消耗品についても感染防止対策のため患者さん同士が共有するような物品は撤去し、シーツなどは使い捨てのものを使用し、バスタオルを持参してもらうなど、患者さんへも協力をしていただいている。
- ・理学療法科の臨床実習は総合実習として、病院や介護老人保健施設等の臨床実践の環境の中で実施される、大変貴重な学びの場ではあるが、緊急事態宣言が解除されても受け入れが不可能な病院・施設が多くみられた。そのため例年では2回の総合実習を1回にし、1回は校内での実習に切り替えた。病院・施設との連携を取りながら、マスク・フェイスシールド・グローブ・防護服など感染防止対策に必要な消耗品を準備し行われた総合実習も、行動制限などさまざまな制約のある中での実施となった。
- ・音楽科では声楽の授業や中学部・高等部での教科音楽のクラスでの授業が広い部屋で出来るように、部屋割を見直した。また、ピアノなどの楽器に消毒液を散布することは楽器管理の面から不可能なので、楽器を共用する際には、手洗いを徹底するよう意識付けを行った。
- ・行事について、音楽科の定期演奏会は音楽ホールでの実施を断念した。生徒が発表する機会の創出を求めて、高等部で行われた「朗読劇発表会」で生徒演奏のコーナーを設けたほか、本校の体育館において縮小した形でミニ定期演奏会を実施した。

##### (2) 研究活動について

- ・鍼灸手技療法科では、理療教育研究セミナーを10月にオンラインで開催した。本校から「理療関係職種就労に関する調査研究」について発表をし、3名の卒業生による「理療関係職種の現場で求められるスキルおよびコロナ禍での対応と今後の備え」についてトークセッションを行った。参加者は例年の倍以上の人数となり、各学校からの質問や情報共有も活発に行われ、充実した会となった。
- ・理学療法科では、毎年8月に行われている自立教科等担当教員講習会（理学療法）は中止となった。しかし、12月に行われている全国盲学校理学療法教育研究協議会は、本年4月より理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の改正によるカリキュラムの変更、臨床実習指導者の要件の変更等があり、情報共有・連携、盲学校理学療法教育の変革・発展のため、事前の体調管理や感染防止対策を万全に行いながら対面で実施した。
- ・音楽科では、11月7日に第2回音楽科研究演奏会「音楽を職業とするために一視覚障害のある生徒への指導をめぐって」をオンライン形式で実施し、72名の参加があった。また、全国盲学校音楽科設置校研究協議会を11月19日にオンライン形式で開催し、7名の参加があった。

(文責 附属視覚特別支援学校 研究・研修部)



## 附属聴覚特別支援学校 コロナ禍での「櫨祭（けやき さい）」の開催

### 1. はじめに ～櫨祭とは～

今年で43回目を迎えた櫨祭。例年2日間開催し、1日目は校内のみの開催で、2日目は一般に公開して実施している。幼稚部から高等部まで、幅広い年代の幼児児童生徒が学校全体の櫨祭のテーマに沿って創意工夫し、日頃の学習や活動の成果を発表している。発表内容は授業で制作したものや櫨祭のテーマに合わせた展示や映像、舞台発表などである。また、ファッションショーや寄宿舎の展示、同窓会の展示や講演会などの催し物もあり、毎年大変盛り上がる学校行事となっている。

### 2. コロナ禍での新たな挑戦

#### ◇待ちに待った学校行事

今年には新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、一般公開は行わず、2日間とも非公開での実施となった。体育祭を中止し、学校全体の行事が文化祭のみとなり、幼児児童生徒はこの日のために一生懸命に準備をした。例年中庭で行われる模擬店やバザー、ゲームコーナーも中止となり、寂しい文化祭ではあったが、少しでも盛り上げるために、様々な工夫を凝らしながら意欲的に作業を進めてきた。当日は、三密を避けるために建物の移動はしないこととし、他の学部の展示発表は校内閲覧サイトからパソコンやタブレットを用いて閲覧できるよう工夫した。



#### ◇「当たり前」の大切さを見つめて



櫨祭全体のテーマを設定し、オープニングセレモニーや後夜祭、企画を進めるのは、中学部、高等部普通科・専攻科の文化祭委員会。例年であれば1学期から準備を進めるが、今年度は1学期の休校の影響で、2学期からの準備となった。文化祭委員会が話し合いを重ね、櫨祭のテーマは「PRESENT～かけがえのない時間～」に決定。休校期間中は、例年のような学校生活を送れず、様々な行事がなくなってしまう、当たり前にあったことが当たり前ではなくなり、幼児児童生徒は様々なことを感じた。当たり前のように感じていたかけがえのない時間について、再度見つめ直してほしいとの願いからこのテーマが設定された。

り前のように感じていたかけがえのない時間について、再度見つめ直してほしいとの願いからこのテーマが設定された。

#### ◇前を向き工夫に満ちた表現

櫨祭のテーマ発表後、各部ではテーマに沿った展示発表の準備を行い、各部の教室に展示するとともに、撮影した画像や動画を閲覧サイトにアップロードした。例年とは違った形となったが、各部とも工夫を凝らし、すばらしい展示発表、閲覧サイトになった。

幼稚部は浦島太郎をテーマに、教室の中に竜宮城の世界を表現した。壁一面青色で塗った紙を貼り、クラゲやタコ、色とりどりの魚を描いて貼り、まるで海の中にあるような空間となった。

小学部は図工や家庭科の授業で作った作品を展示した。図工の作品はそれぞれの学年で決めたテーマを基に、絵を描いたり身近な材料を使ってペットボトルタワーや張り子のお面を作ったりした。家庭科の授業では、生活に役立つ布製品をテーマに、ティッシュボックスカバーやマスクを作った。そして、見ているだけで楽しくなるような色とりどりのティッシュボックスカバーとなった。



中学部や高等部普通科では、学校全体のテーマに合わせて調べたり話し合ったりしたことを展示にまとめた。中学部は戦争やオリンピック・パラリンピック、様々なイベントに見られる贈り物について調べ、展示を行うとともに展示内容を説明した動画も用意した。高等部普通科は自分の生活を見つめ直したり、時間について調べたりしたものを展示した。高等部1年生は映画製作を行い、閲覧サイトで他学部も見られるようにするとともに、高等部普通科の生徒を対象に体育館で上映会を行った。新型コロナウイルス感染症対策として休校となった約2カ月の間に、どのように過ごして、どのようなことを考えたのかを映画で表現することができた。

高等部美術部は、一般社団法人芳心会から助成を受け、指文字の石膏像を制作。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、美術部が例年作品を出品している展覧会が中止となってしまった。そのような中、諦めずに前を向きたいという気持ちを多くの人たちに伝えたいと思い、高等部普通科の生徒だけではなく、専攻科や小学部の児童会にも協力してもらい、指文字の石膏像をつくった。91体の石膏像をつくり、テーマを決めた3つの造形物に組み上げ、学校の内外に発信することができた。

高等部専攻科は、それぞれの学科で特色のある展示を発表した。造形芸術科は日頃の授業で制作した絵画やデッサン、ポップアップカードなどの作品を展示するとともに、事前予約の似顔絵コーナーも設置した。ビジネス情報科は日頃の学習活動についてまとめたものを展示するとともに、クロマキー体験コーナーを設置し、背景を合成できる写真を撮影できるようにした。歯科技工科は日頃の授業で作り上げた歯科技工物を展示するとともに、文化祭のための企画展示も行った。専攻科の展示発表は高い専門性を生かしたものとなった。



### ◇社会に出るための力を培う

櫛祭は、その準備もとても重要な活動である。何を伝えたいのか、どのように伝えるのか、誰に伝えるのかなど、限られた時間の中での自主的な話し合いが欠かせない。それは、日頃感じていることや疑問に思っていること、自分の障害や将来について考え、社会に出るから必要になる力を身に付ける機会でもある。

### 3. コロナ禍での櫛祭を振り返って～戸惑いを乗り越えて成長を～



本校は、「進んで自分の能力を開発し、広い視野に立って文化的生産的活動の発展に寄与できる人間の育成」を目標に、日々学習活動を行っている。特に、全校行事である文化祭は、幼児児童生徒の主体性を重んじ、高等部生を中心に運営している。どんなテーマにしようか、どんな作品展示にしようかと聴覚障害を有する幼児児童生徒がそれぞれの発達段階で話し合い、文化祭を形作っていく。今年度は校内閲覧サイトによる開催となった。画像や動画をいかに楽しく見せるかという課題があったが、本校の教職員は分かりやすい視覚情報については日頃から配慮している。文化祭の画像や動画でも誰が見ても理解しやすい画像や字幕の配置になるように生徒にアドバイスをしてきた。例年とは異なる方法に子どもたちも教職員も戸惑いがあったが、開催できたことの達成感が子どもたちをまた一回り大きく成長させたと思う。

(文責：久川浩太郎，眞田進夫)

## 附属大塚特別支援学校 オンライン実践例

### ◇ 実践例 1 : 『歯医者さんと歯科健診をしよう』 保健給食部 スマイル (健康教育)

#### 1. 対象・実態

対象:全幼児児童生徒

健康診断全体としては前向きに取り組める。歯科健診において、怖いと感じたり感覚過敏があったりする場合は、言葉掛けや歯ブラシ導入などの方法で受診できている。歯と口の健康に課題が見られる子どももおり、歯科健診は重要な位置づけとなっている。

#### 2. 実践の概要

##### <学習内容>

例年と異なる健康診断のやり方について学び、落ち着いて受診できるようになる。

○コロナウイルスに気を付けて歯科健診をしよう ○ルールとマークを守って行動しよう

##### <事前準備・留意点>

- ・全校で共有できるよう Zoom での合同朝会で行うことにした。司会や機器操作は朝会委員の高等部生徒や教師が行うため、Zoom を接続し健診会場で待機した。司会系の生徒から紹介されたタイミングで、養護教諭が指導する形式とした。子どもたちとは各クラスからつながる。
- ・『簡単にできて意味のあること』を目標に、学校歯科医と電話やメールで検討を重ねた。歯科医師との動きの練習は当日の朝になってしまいが、リアルタイムでの顔合わせにこだわった。
- ・PC は説明や手本の動きに合わせて移動できるようキャスター台に乗せ、全体撮影用のカメラは別に固定で設置した。
- ・マークを作成し掲示した。色使いは色彩心理を意識し、黄色で前向きな気持ちで順番を待ち、青色でクールダウンし教室に戻れるよう工夫した。
- ・十分な広さの部屋で換気を行い、消毒液、手袋、フェイスシールド、清潔な器具類を準備した。



手本の先生 (写真上) と同じようにできたかな (下)

##### <オンライン事後>

- ・耳鼻科健診も同じルールとマークで学習を繰り返した。
- ・指導の様子を編集して YouTube にあげ、保護者用ホームページで配信した。

#### 3. 学習効果・今後の課題

- ・子どもたちはルールを覚え、落ち着いて行動できた。表情にゆとりも見られたことから、会場での説明時間の短縮や歯科医師との顔合わせの効果を感じた。2 回目の耳鼻科健診もスムーズだった。
- ・YouTube 配信は、コロナ禍での健康診断に不安を感じ心配する保護者への安心材料となるのが目的でもあった。再生回数からその役割は果たせたと考える。
- ・今年度、保健給食部スマイルでは毎月 2~3 本の動画教材を作成し、オンデマンド指導も試みた。健康教育においても対応が可能で学習しやすい方法であった。より魅力あるものにできるとよい。

文責 土田裕美

◇ 実践例 2 : 『汁ものスタートで食べるぞスイッチオン！  
～ゆっくり味わうために～』 保健給食部 スマイル（健康教育）

1. 対象・実態
<p>対象：中学部生徒 18 名，高等部生徒 23 名</p> <p>食べることが大好きで，学校生活の中でも給食を楽しみに登校する生徒が多く，言葉や指さしで自分の食べたいものや味の感想などを伝えることができる。また「よく噛んで食べよう」は本校の保健給食重点目標のひとつであり，給食室における調理上の配慮に教師による言葉掛けを加えて実践を続けている。</p>
2. 実践の概要
<p>&lt;学習内容&gt;</p> <p>汁ものスタートで食べるぞスイッチオン！</p> <p>○給食時間に試してみよう      ○汁ものから食べはじめよう</p> <p>○お口を湿らせたならこれで安心，おいしく食べよう</p> <p>&lt;事前準備と留意点&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・はじめに栄養教諭が給食時間に巡回し，一口目は何かから食べているのか実態調査を行った。本校の給食には毎日汁もの，汁のあるおかず，牛乳がついているため，本学習の取り組みやすさにつながった。</li> <li>・動画教材を作成した。今年度のスマイルで作成回数を重ねたことで，編集技術を向上させていった。</li> <li>・一時停止をしたり繰り返し再生したりする指導を想定して要点を絞った。スライドや教師による実演，給食の写真などを織り交ぜ，わかりやすくテンポ良く編集し，1 分半に収まるよう工夫した。</li> <li>・保護者限定公開の YouTube チャンネルに配信した。</li> <li>・URL から QR コードを作成し周知した。以前からやりたいと思っていた QR コードの活用を試してみた。</li> </ul> <p>&lt;動画教材の内容&gt;</p> <div data-bbox="199 1294 1398 1601"> </div> <p style="text-align: right;">汁には野菜の栄養がたっぷり</p>
3. 学習効果・今後の課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・汁ものスタートを意識して給食を食べはじめる生徒がみられた。本校の献立構成を念頭に今後も本学習を継続していきたい。</li> <li>・動画編集作業は不慣れであったが，字幕，音楽，ナレーション等を入れる工夫ができるようになった。</li> <li>・動画の説明が長くなると集中が続かない生徒もいた。伝えたいことをすべて動画に入れこまず，簡潔にまとめることが重要だと感じた。</li> <li>・保護者からの反響も大きく，動画教材への興味関心の高さがうかがえた。</li> <li>・オンラインを活用した食育の取組は有効であると感じた。引き続き実践方法を検討していきたい。</li> </ul> <p style="text-align: right;">文責 廣原愛美</p>

# 附属桐が丘特別支援学校 コロナ禍での取組み

令和2年度に本校で実践された教育活動について、3つの研究報告をする。

## 提案テーマ 「オンライン研修の成果と課題」 ～自立活動実践セミナー2020を通じて～

筑波大学附属桐が丘特別支援学校  
教諭 佐々木高一 有井香織 岡崎志乃 高橋佳菜子

### 【目的】

- ・特別支援学校をはじめ、特別支援学級、通級による指導においても、自立活動の指導の充実が求められており、自立活動に関する研修ニーズが高い
- ・そこで本校では、自立活動の指導充実に向けた教員の研修ニーズに応えるため、毎年「自立活動実践セミナー」を開催（今年度で13回目）

今年度は…  
○新型コロナウイルス感染症対策として  
「集合型研修」⇒「オンライン型研修」

☆本報告では、  
・開催者側として検討・配慮したこと  
・セミナーでの参加者の様子やアンケート結果 等から  
自立活動の専門性向上のための「オンライン型研修」の可能性や課題について考察する。

### 【オンライン開催に向けての準備】

- (1) 内容の検討
- 過去の参加者アンケートと今回の参加申込時のアンケートから参加者の困りや研修ニーズを把握。  
〔申込・アンケートはクラウドサービスを使用〕
  - 「演習」や「実技」はオンラインでは難しいと考え、講義中心でも理解を深められる内容を検討。

### (2) 開催方法の検討

- 「Zoom」の「ビデオウェビナー機能」を使用  
〈参加者側〉  
・参加者側の操作が少ない  
・プライバシーが守られる（顔や名前を出さずに視聴可能）  
⇒研修に参加しやすくなる  
〈開催者側〉  
・参加者の誤操作や、悪戯等のトラブルが起きづらい  
⇒当日の研修をよりスムーズに進行することができる

○個人だけでなく2名以上での申込も受け付け、校内研修としても活用できるようにした

### (3) 参加者への資料の提供

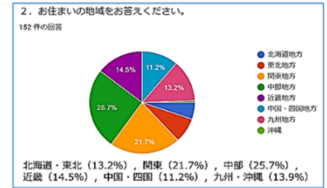
- ①クラウド上に、参加者に向けた情報を順次保存  
〈具体的な内容〉  
・「Zoom」への接続手順  
・「ビデオウェビナー機能」の使い方、諸注意  
・当日の講義・講座のライド 等
- ②事前に各参加者がクラウドにアクセスし、ダウンロード
- ③当日、セミナーに参加

### ◆参加者への情報保障のために◆

- 確実なネットワーク環境の整備**  
⇒情報部と協力し、配信場所（本校）のネットワーク環境を安定させセミナー配信トラブルが起きづらいよう準備した。
- 「見逃し配信」の実施**  
⇒参加者側のネットワーク環境の不具合等の場合に見直しができるよう、セミナー終了後2週間は参加者が自由に視聴できるようにした。
- 聴覚障害のある参加者への対応**  
⇒事前資料に発表者が話す内容をメモしたものを添えて送付

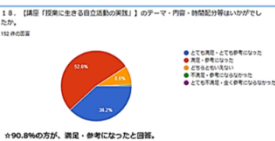
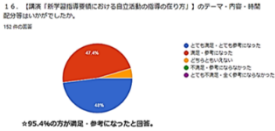
### 【当日の様子～参加者アンケートの結果より～】

- ・総参加申込件数：188件  
（個人：139件、2名以上：49件）
- ・アンケート回答者数：152件  
（2名以上で参加の場合、代表者が回答）
- ・当日の総視聴者数：477名



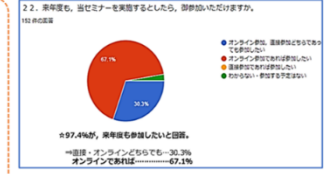
○日本全国から多くの方の参加があった。  
⇒「オンライン型研修」になったことによる参加しやすくなったという回答は**99.3%**

### 〈研修内容について〉



○各講義いずれも**90%を超える満足度**が得られた。

- ★参加者の声★
- ・文部科学省の最新のデータに基づき講演頂いたもので、現在の状況が捉えやすく、課題意識も持ちやすかった
  - ・日頃疑問に思っていたことに具体例を交え明確な説明をいただいた（自立活動と教科の目標設定・内容の違い、関連性など。）
  - ・動画があり、オンラインであっても児童の変化がわかりやすい。
  - ・子どもを見る目を養い、みんなで考える、みんなで指導することが子どもの成長につながるという実践で大変参考になった。
  - ・「できない」「やらない」という見方から「何に困っているのか」「どうしたらできるか」という子供に寄り添った自立活動の視点が学べた。



⇒そのうち「オンライン型研修」であれば参加したいという回答が**67.1%**

### 【考察】

- 〈「オンライン型研修」を充実させるためのポイント〉
- ①**内容の精査**
    - ・参加者のニーズの把握
    - ・オンラインで可能かつ参加者の理解が深まる内容の検討
  - ②**配信者側の確実なインターネット環境の整備**
  - ③**参加者への事前事後の情報提供**
  - ④**参加者への情報保障**（見逃し配信、合理的配慮等）

○「オンライン型研修」は、**移動費用、時間の負担がない**  
⇒ネット環境があれば参加可能。  
☆全国各地の教員・学校同士の情報交換、学び合いの場としての可能性も大

### 【今後の課題】

- 「実技」や「演習」、「グループディスカッション」等を効果的に行うための工夫
- 「集合型」と「オンライン型」を併用した研修形態の検討

## 「オンライン研修の成果と課題」 ～自立活動実践セミナー2020 を通じて～

学校名 筑波大学附属桐が丘特別支援学校

教諭 佐々木高一 有井香織 岡崎志乃 高橋佳菜子

### 【目的】

現在、共生社会に向けたインクルーシブ教育システム構築に不可欠な特別支援教育の推進が強く求められており、特別支援学校だけでなく、特別支援学級、通級による指導においても、自立活動の指導の充実が求められている。その研修ニーズに応えるべく、当校では、毎夏、自立活動実践セミナーを開催し、教員研修の場を設けてきた。今年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、従来の集合研修ではなく、オンライン研修として実施した。本稿では、その概要の報告と、自立活動の専門性向上におけるオンライン研修の可能性について言及する。

### 【オンライン開催に向けての準備】

#### (1) 内容の検討

オンライン形式では、演習や実技を行うことが難しく、講義中心でも理解を深められる内容を検討する必要があった。過去のアンケートから参加者の研修ニーズを把握し、「授業に生きる自立活動～指導の根拠を明確にした自立活動の指導を目指して～」をテーマとした。学習指導要領の改訂において各教科等で育む資質・能力を明確にした教育活動の充実が示されたことを踏まえ、自立活動の指導が各教科等において育まれる資質・能力を支える役割を担っているという意義を確認し、自立活動でどのような力を育むのかを明確にした指導の重要性を学べるよう構成を考えた。

#### (2) 開催方法の検討

視聴者のプライバシーに配慮できたり、故意ないたずらを防いだりできるよう、「Zoom」のビデオウェビナー機能を使用することにした。主催者側からの一方向の配信を長時間視聴することによって生じる疲れに対しては、写真や映像（掲載同意を得ているもの）を適宜取り入れる、質疑応答の時間を設ける（希望者には音声での質問ができるようにする）等により、集中力を継続できる工夫を行った。参加形態は、個人での参加だけでなく、2名以上での参加（1件の申込からプロジェクター等を使用して、グループ・校内研修として活用も可）ということも設定した。

#### (3) 参加者への資料の提供

Google ドライブ上に保存した資料へアクセスできる URL を参加者に送信して、各自でダウンロードしてもらった。また、Zoom への接続手順やビ

デオウェビナー機能の使い方を配信し、参加者が安心して接続・参加できるように準備した。なお、配信・ダウンロードした資料を参加者以外へ共有、主催者から配信される映像や音声の録音・録画は固く禁止することを事前に周知した。

### 【当日の様子】

校内のネットワーク環境が乱れると配信が途切れてしまうため、情報部の教員が、安定したネットワーク接続ができる環境を準備した。また、急用により当日視聴できなくなった場合、見逃した場面があった場合等に備えて、セミナー終了後に、見逃し配信を行った。

### 【参加者からのアンケート結果】

総参加申込件数 188 件のうち、Web 上で 152 件のアンケート回答を得た。2 名以上で参加の場合は代表者に記入してもらった。152 件の回答から分かった当日の総視聴者数は 477 名だった。参加者の地域は、北海道・東北地方 13.2%、関東地方 21.7%、中部地方 25.7%、近畿地方 14.5%、中国・四国地方 11.2%、九州・沖縄地方 13.9%で、オンライン開催によって、「参加しやすくなった」が 99.3%だった。内容に関しては、各講義で 90%を超える満足度を得た。来年度もセミナーを実施する場合、「オンライン参加、直接参加どちらであっても参加したい」が 30.3%、「オンライン参加であれば参加したい」が 67.1%だった。

### 【考察】

オンライン形式により、移動にかかる費用と時間の負担がなく、インターネット環境があればどこからでも参加できる点は、全国各地の先生方と自立活動をともに学び合う上で大きな可能性があり、今後もニーズが高いことがうかがえる。オンライン研修を充実させるためには、①参加者の研修ニーズを踏まえた上で研修方法の制約がある中でも自立活動の理解促進につながる内容を精査すること、②主催者側からの配信が途切れないようインターネット環境を整備すること、③参加者へ事前に資料提供を行うこと、④受信側のトラブルが生じることを前提として見逃し配信を実施すること、がポイントとして挙げられる。

今後の課題は、オンライン形式の中で演習やグループディスカッション等を行うための工夫や、集合形式を基本としつつもオンラインでの参加も可とする工夫を検討することが挙げられる。

# 提案テーマ 臨時休業でも学びを止めない！

～桐が丘オンライン学校による家庭学習支援への挑戦～

学校名 筑波大学附属桐が丘特別支援学校 役職 教諭 氏名 小山 信博

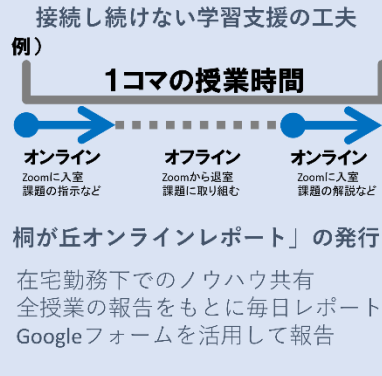
## 挑戦の概要

桐が丘オンライン学校  
 期間：2020年5月7日(木)～29日(金)  
 目的：児童生徒の学習保障  
 生活リズムづくり  
 方法：Web会議システムZoom使用

我が国の学校教育は、今、未曾有の危機の中にあります。学校を再開しようとするれば子供の命を脅かすという危機、終息が見通せない中で学校の存在意義である学習が保障できないという危機。ここにどう立ち向かうかが問われています。  
 (4/24(金)校長より全教職員へのメール)

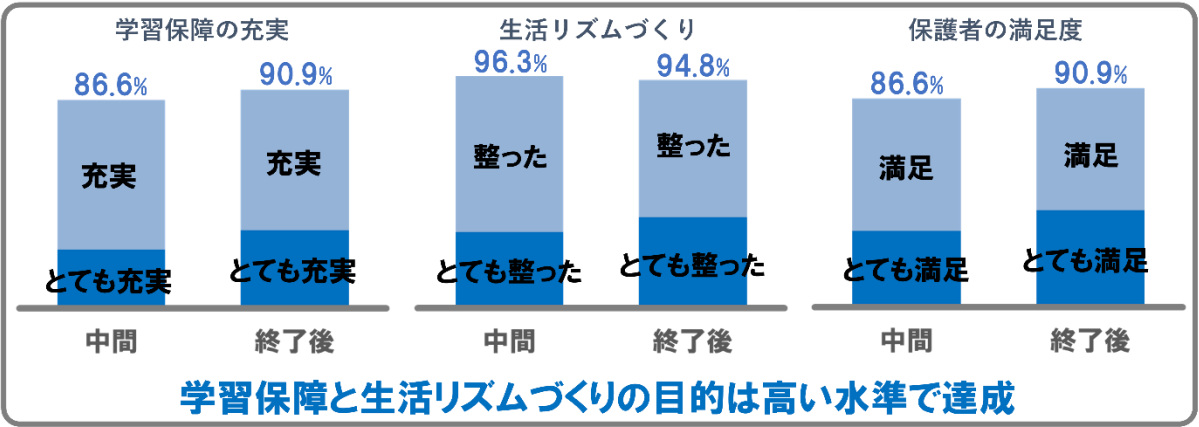
時間割通りを目指した段階的实施

つながる	整える	学ぶ	深める
第1週 7日-8日	第2週 11日-15日	第3週 18日-22日	第4週 25日-29日
1 1校時 2 2校時 3 3校時 4 4校時 5 5校時 6 6校時	1 1校時 2 2校時 3 3校時 4 4校時 5 5校時 6 6校時	1 1校時 2 2校時 3 3校時 4 4校時 5 5校時 6 6校時	1 1校時 2 2校時 3 3校時 4 4校時 5 5校時 6 6校時



## セールスポイント

保護者を対象に、中間・終了後にアンケート実施



## 成果と課題

終了後アンケート(保護者・児童生徒・教員)から

学習の進み具合と内容

年間指導計画で予定されていた5割程度の進み具合。1週目は「ガイダンス」という語が特徴的だった学習内容の報告が、2週目にはオンラインでの学習の進め方、3、4週目には本格的に教科等の内容に移行。

児童生徒アンケートから

たのしかったか  
 わかりやすかったか

教員アンケートから

自身の取組への満足度  
 校内のサポートへの満足度

やればやるほど課題も見え、取組に満足できない面があった。負担はあったが、校内のサポート体制は手厚かった。

家庭学習支援の充実のために  
 保護者アンケート  
 「今後の桐が丘オンライン学校の充実のために必要なこと」

児童生徒の情報活用能力の向上が一貫して高水準。保護者の負担軽減に直結するばかりでなく、卒業後の自立と社会参加に重要な力と考えられている。



## 臨時休業でも学びを止めない！

～桐が丘オンライン学校による家庭学習支援への挑戦～

学校名 筑波大学附属桐が丘特別支援学校

職名 教諭 氏名 小山 信博

### 【目的】

2020年3月2日より始まった全国一斉の臨時休業が長期化すると、当校では、児童生徒の学習保障とともに、生活リズムの乱れが懸念された。

そこで、学習保障と生活リズムを整えることを目的に、5月7日から「桐が丘オンライン学校」を実施した。これは、6月1日の学校再開までの間、学級担任や授業担当者と家庭をインターネットでつないだ家庭学習支援の取組である。

### 【内容・方法】

#### 1. 時間割通りを目指した段階的实施

家庭学習支援は、最終的に時間割通りに学習活動が展開されることを目指し、各学部の実情に応じた短縮時間割から始め、4週間かけて時間割通りの実施を目指した。

段階的に実施したのは、各家庭での使用機器の準備、家族の生活との調整、オンライン学習による児童生徒の心身の負担、家庭の経済的負担などの課題を踏まえると、時間割通りの実施のためには準備に時間を要すると考えられたからである。

家庭の準備が進むことや、児童生徒が新しい学習環境に慣れる期間を考慮するとともに、希望する家庭にタブレット端末の貸出しを行う等、学習活動と通信環境の両側面から段階的に実施した。

#### 2. 接続し続けられない家庭学習支援の工夫

児童生徒の実態や各家庭の通信環境に配慮し、1時間の全時間をZoomで接続し続けるのではなく、接続しない時間と切り替えながら行った。

また、Google Classroomを活用した課題のやり取りや動画視聴等を複合的に活用した。

#### 3. 障害の重度な児童生徒に対する学習支援

当校の施設併設学級には、心身障害児総合医療療育センターに入所する障害の重度な児童生徒が在籍している。この児童生徒に対し、1学級1回10～20分程度、教員とZoomを繋いだ。

2ヵ月ぶりに教員の声が聞こえると、満面の笑顔で画面を注視したり、落ち着いた様子で絵本の読み聞かせに耳を傾けたり、教員の歌声に合わせて声を上げたり等、今後に繋がる実践となった。

#### 4. 「桐が丘オンラインレポート」の発行

各教員にGoogleフォームを活用した学習支援1回ごとの報告を依頼したところ、全期間で計1679件の報告が蓄積された。質問項目は、教科・科目名、使用した学習手段、指導内容の概要、う

まくいった／いかなかった点、要望などだった。この情報を毎日、教職員のメーリングリストで共有することで、普段であれば職員室で気軽に話せる気付きやノウハウなどが蓄積され、在宅勤務においても、知恵を共有する仕組みにできた。

### 【結果と考察】

中間評価（2週後）のため保護者に対して、最終評価（終了後）のため保護者・児童生徒・教員に対してアンケートを実施した。

#### 1. 学習保障の充実と生活リズムづくり

学習保障について、保護者の90.9%（最終）が充実・とても充実と回答した。生活リズムづくりについては、94.8%（最終）が整った・とても整ったと回答しており、学習保障と生活リズムづくりの目的は高い水準で達成できたと考えられる。

#### 2. 4週間の指導の展開

年間指導計画の予定されていた5割程度の進み具合だった。また、桐が丘オンラインレポートの報告を分析すると、1週目は「ガイダンス」という語が特徴的だが、2週目にはオンラインでの学び方の指導に変化し、3～4週目に入ると具体的な指導内容が細かく描かれた。段階的に本格的な各教科等の指導が行われたことが看取できる。

#### 3. 児童生徒による評価

88.1%の児童生徒が、たのしかった・とてもたのしかったと回答した一方で、8.3%がわかりにくかったと回答した。オンラインでたのしく学ぶことができた反面、わかりにくさもあったことが明らかになった。さらに、もし今後、また臨時休業になったら、オンライン学校をやって欲しいと思う反面、不満や不安もあることも明らかとなった。

#### 4. 教員による評価

65.5%の教員が自身の取組へ満足感を感じているが、やればやるほど課題も見えるなど、34.5%は満足感を感じていなかった。学校のサポート体制については、94.8%がサポートを受けられた、必要なかったと回答し、充実していたと考えられる。

#### 5. 今後のオンライン学習支援の充実のために

中間、終了後の各アンケートで一貫して、児童生徒の情報活用能力の向上を求める保護者が多かった。これは、保護者の負担軽減に直結するばかりでなく、卒業後の自立と社会参加に重要な力と考えられているからであり、日頃の授業からいっそう充実させていく必要がある。

# コロナ禍における 学習発表会・文化祭の工夫

～桐が丘(本校)での取り組み～

筑波大学附属桐が丘特別支援学校

教諭 池田 仁



## 桐が丘における学習発表会・文化祭

〔本校〕

- 小学部: 学習発表会
  - 中・高等部: 文化祭
- } 桐が丘祭

〔施設併設学級〕

- 小学部, 中・高等部: 学習発表会

### 昨年度までの桐が丘祭 〔例: 平成31年度桐が丘祭〕



小学部	中学部	高等部	PTA	全学
学習発表会	学年発表	文化祭	PTA	発表
学年発表	学年発表	学年発表	学年発表	学年発表
学年発表	学年発表	学年発表	学年発表	学年発表
9:00	9:00	9:00	9:00	9:00
9:30	9:30	9:30	9:30	9:30
10:00	10:00	10:00	10:00	10:00
10:30	10:30	10:30	10:30	10:30
11:00	11:00	11:00	11:00	11:00
11:30	11:30	11:30	11:30	11:30
12:00	12:00	12:00	12:00	12:00
12:30	12:30	12:30	12:30	12:30
13:00	13:00	13:00	13:00	13:00
13:30	13:30	13:30	13:30	13:30
14:00	14:00	14:00	14:00	14:00
14:30	14:30	14:30	14:30	14:30
15:00	15:00	15:00	15:00	15:00
15:30	15:30	15:30	15:30	15:30
16:00	16:00	16:00	16:00	16:00

## 2学期開始～桐が丘祭までの教育活動について

第2学期授業開始:8月25日(火)～

(小)・(中)・(高)運動会:9月30日(水)～10月2日(金)

→分散登校(小・中・高それぞれを2グループに分け,  
「隔日登校+オンライン+1日全員登校」)

10月5日(月)～

→全員登校

10月31日(土):桐が丘祭

4

## 学校行事における確認事項

[文部科学省「教育活動の実施等に関するQ&A」]

学習指導に関すること>Q&A(学校設置者・学校関係者の皆様へ)

問6 感染症対策を講じつつ学校行事を実施するためには、具体的にはどういった工夫が考えられるのか

◆文化的行事(文化祭、学習発表会、音楽会、クラブ発表会、芸術鑑賞会など)

- ・小グループやパートごとの練習を基本とし、全員で集まって練習する機会はリハーサルのみとする
- ・学年ごとの発表を映像や音声にとり、校内放送で流す など

5

## 桐が丘祭実施における確認事項①

### 1. 全体の前提

外部の方(PTA, 卒業生など含む)は入校しない。そのため、PTAのバザー, 進路先による販売, 卒業生対応はなし。

⇒確認事項:PTAは入校しないが、オンデマンド配信の企画として参加する。

6

## 桐が丘祭実施における確認事項②

### 2. 実施方法について

1案:ライブ配信とオンデマンド配信, 2案:オンデマンド配信のみを検討  
→オンデマンド配信のみで行う。  
ただし, 開閉会式はライブ配信で行う。

### 3. 映像(鑑賞)の時間について

1案:全学部を一日で見る, 2案:当日は学部限定し, 他学部の映像は自宅で見ると見る  
→当日は自学部の鑑賞のみに限定し, 他学部の映像は自宅で見ると見る。  
残った時間は各学部で使い方を検討する。

## 特別時程

### ●早朝登校, 居残りはなし

月日	小学部	中学部・高等部
10月16日(金)	通常授業	(中) 1・2準備
10月23日(金)	通常授業	3～6準備
10月29日(木)	映像撮影(午前)	通常授業
10月30日(金)	午前授業	5・6準備
10月31日(土)	桐が丘祭	

8

## 各企画の進め方

### 〔小学部〕

- ・通常授業:小1・2年「合同生活」, 「合同音楽」他  
小3・4年「総合的な学習の時間」他  
小5・6年「総合的な学習の時間」他

### 〔中学部・高等部〕

- ・特別時程 + 必要に応じてGoogle Classroom等を利用

〔例:中3〕連絡(教員⇄生徒),  
話し合い(テーマ, 写真決め等),  
手話の動画(練習), 撮影した映像の共有



# 桐が丘祭のスケジュール



小学部		中学部・高等部	
9:10~9:20	開会式（各教室からzoom） 進行：小学部児童会 内容：高等部生徒会長挨拶，校長先生の話		
9:20~9:40	企画説明 [PRタイム]（各教室から代表者がzoom） 時間：各学部5分間×3 +予備5分 内容：自学年のPR（ネタバレしないように）		
9:50~11:50	・企画の映像鑑賞 ・教科展示の鑑賞	9:50~11:50	・企画の映像鑑賞 ・教科展示の鑑賞
11:50~12:05	閉会式（各教室からzoom）	内容：中学部生徒会長挨拶	
12:10~	学級指導・下校	12:10~13:10	昼食・休憩
		13:10~14:20	反省・他学年へのコメント等
		15:00	完全下校
			10

## 著作権について



1. 職員会議で関連する著作権の概要について説明
2. 著作権にかかわる可能性のある企画(動画・作品)の調査
3. 著作権担当教員:必要に応じて著作権の申請を行う。
4. 校長が、開会式の「校長先生の話」の中で、著作権について説明を行った。

11

## 企画の映像・教科展示の鑑賞

- 桐が丘祭特設HP(YouTubeリンク)から、各教室で企画動画の鑑賞+教科展示の鑑賞(自肅の児童生徒,保護者も同様)



連絡網を使い限定配信(URL等)を周知

12

## プログラム①

●第51回桐が丘祭テーマ

「あつまれ！桐っ子の祭 in リモートステージ」

〔小学部〕

・小1・2年「音でかたろう！」（メロディとリズム）」

→いろいろな音（メロディ・リズム）を通して気持ちを表現する

・小3・4年「こんなこと やってみたい！ あんなこと 調べてみたい！」

→総合的な学習の時間で学んできたこと（枝豆について、五感を使って調べたこと、疑問に思ったこと、予想したこと、調べてみたいこと）を発表 BGM：和太鼓（音楽の時間）

・小5・6年「KBSニュース」

→今起きていること今感じていることをニュース形式で伝える

（新型コロナウイルスに関する情報を、自宅・学校・社会の3グループごとに調査し発表）<sup>3</sup>



## プログラム②

〔中学部〕

・中1「文化会館」

→劇、好きなもの紹介

・中2「あつまれ！桐っ子の祭inリモートステージ」

→クイズ

・中3「みんなで作り上げた音楽！音楽の素晴らしさを知り、最高に楽しく盛り上がろう！」

→手話と合唱



14

## プログラム③

〔高等部〕

・高1「演劇会（天狗裁き, The selfish Giant）」

→演劇

・高2「オンラインGo to トラベル in 函館」

→函館の食と観光地について紹介

・高3「白柳 徹子の部屋」

→演劇



15

# 反省（教員）

## 1. 日程について(10/31土 オンライン上での開催)

### 概ね適切

- オンライン上での開催でも、コロナ禍で校内のみの公開であったので適切だった。
  - ・ 割と自由度があってよかった（複数）。
  - ・ 運動会（9/30水～10/2金）が終わって、学習発表会に子どもの気持ちに向くという点では良かった。
  - ・ 肢体不自由の世界での独自性といった点でも、今後このような形での開催を普通にしていくことも考えて良いと思う。
  - ・ 時期、方法（オンライン）ともに良かったのでは。
- ▲ 教員が動画を準備する期間（子どもたちの練習などの準備期間）を考えると、もう少し遅くても良いかも。
  - ・ 中間試験とピークが重なっていた（中・複数） ※例年はもう1週早い

16

## 2. 準備について(画像・映像準備)

### 概ね適切 来年度も継続を希望 計画的な準備をする必要性

- 情報部の先生を中心に映像の編集等うまくいったのでは。
  - ・ 事前準備を早めに行う必要があるが、当日は動画鑑賞に専念できるため、次年度も継続して欲しい。
  - ・ 動画での公開と、リアルな発表の場を選択できるようにすると良いと思う。
  - ・ 限られた時間の中であったが、子供たちが生き生きしていた。
  - ・ 事前準備の時間帯が分散して確保されていたので、準備の段取りがしやすかったと思う。
- ▲ 締め切りに合わせた準備をしなければ・・・

17

## 3. 当日について(zoom開閉会式、特設HPからの動画鑑賞等)

### 概ね適切 特設HP良かった 開催方法について

- Zoom開閉会式なるものが初めてで新鮮で、小中高の連帯感も感じられた。
  - ・ トラブルもなくとても良かった／密を避ける点で、とても優れたやり方であった。
  - ・ 自由に視聴でき良かった。
  - ・ 当日はゆっくり自分たちのペースで作品鑑賞できたので、生徒たちにも余裕があったように感じられた。また、各学年でコメントし合えるクラスルームもあって、感想を共有することができていた。
  - ・ それぞれ個性あふれる動画だった。生徒にとっても普段とは違う学びがあったと思う。
  - ・ 小学部の児童は緊張したとは思いますが堂々としていて指導の成果が表れていたと感じた。
  - ・ 他学部の企画も見ることができてよかった。
  - ・ 例年のように発表等をライブで見えるさもあるが、動画で日にちも複数日設けられて見ることができたため、当日以外の日も使ったすべての学年の発表を見られるようになったのは良かったと思う。
- ▲ 小と中中で分けてもよかったと思う→一体感を感じられるようにするために実施。
  - ・ 桐が丘祭の事前指導をした際に、「当日やることないじゃないか」「当日学校に来る意味があるのか」というようなことを子どもが言っていた。当日みんなで映像を見る意味もこちらから伝えたが、当日PRタイムで紹介を小学部高学年の児童が言うのではなく、全学年の児童が言う機会を作るなど、当日子どもたちが主体的に取り組める活動を設定しても良かったのではないかと。

18

## 4. 作品・教科展示について（実物と特設HPでの展示）

概ね適切 来年度以降も継続を希望

一部の教員への負担の偏り 教員の指導・介入の度合いに

- ・担任・教科担そして子どもたちが頑張っていて、大人でも興味を惹くようなものも見受けられた。
- ・一部の学年でしたが、実物も見ることができてよかった。
- ・当日に時間がとれたためか、中高学年は丁寧に作品を見ていた。感想を書くカードもよかったと思う。
- ・実物を見ることもできたが、HPの映像も素晴らしかった。
- ・自分の所属している作品は実物も見ることができたので、どちらも展示があって良かった。
- ・特設HPがあってよかった。HPが充実していて楽しく見られた。
- ・教科展示を来年度以降もHP上に挙げられるとうれしいです。
- ・通常の企画になっても見逃し配信などがあると保護者はうれしいと思います。
- ・本物ではないが、かえって近くでじっくり見ることができたのではないかなと思う。

- ▲・生徒の主体性と、教員の指導・介入とのバランス（中・高）
- ・動画鑑賞時間に割く割合が高く、実物を見られなかった生徒がいそう。

19

## 5. 教員の役割について

- ・連携すれば、負担を軽減できそう

- ▲・各学部にてHP作成者（編集権限がある人）がいると、役割が集中しないのではないかな。
- ・担任の先生方の負担が大きかったのではないかな。
- ・一部の先生が、大変ご苦労されていたように思いました。
- ・裏方（webへのupなど）の労力が過多になったかなと思う。“得意な人”にかたよらないアイデアが必要。

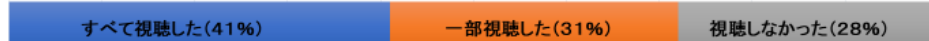
## 6. 来年度以降の桐が丘祭について

- ・来校に加えて配信でも見られると、いつもであれば時間がかぶって全部を見ることができないとの不満も解消されると思う。でも両方は負担が大きい。
- ・学年での活動の際、生徒の実態を担任が中心に見られてよかった。
- ・現状が続くようであれば、今回のような形式になるのではないかなと思う。
- ・実物とネットを使い分けながら文化祭をするのもありなのではないかな（複数）。
- ・オンラインの方が準備片付けの時間がなくなるのは良かった。
- ・先輩が後輩を引っ張って行って欲しいので、来年は縦割りを実施したい。（高）

20

## 保護者へのアンケート結果①

### ● 小学部の動画について



### ● 中学部の動画について



### ● 高等部の動画について



### ● 教科展示について



21



## 保護者へのアンケート結果②

- 桐が丘祭および桐が丘祭の配信について（自由記述：要約）
  - 2回目（再配信）は配信期間が長く、ゆっくり観られて良かった。（多数）
  - 実際の舞台を観られなかったことは残念だったが、オンライン文化祭も悪くないと思いました。
  - 次年度もHPでの公開をお願いしたい。
  - 時間を気にせず観られたこと、表情や手元まで観られたこと、繰り返し観られたことが良かった。
  - 教科展示がわかりにくかった（見逃してしまった）。
  - 教員（が作成したソフト）と同じレベルの動画ソフトであれば、もう少しわかりやすい内容のものができたのに・・・

22

## 質疑応答

**質問** 当校では後日配信しようと考えていたが、結局できないとあきらめた。オンデマンドの配信にあたり、顔や名前等の個人情報について保護者から同意は得られたのか？

**回答** 桐が丘では登校自粛児童生徒及び保護者のみの限定配信とし、URL等が外部に漏れないよう保護者にも注意喚起をお願いした。また動画及び展示作品等については個人情報が特定されないよう配慮した。

**質問** 文化祭を見終わった後の子どもたちの交流はどうだったか？

**回答** 新型コロナ感染予防のため桐が丘祭当日は他学級・他学部との交流は極力行わない実施形態をとったが、2学年合同で発表していた小学部では多くの交流がみられた。

**質問** 当校では著作権に関し色々難しいことがわかり解決策が出ずあきらめた。桐が丘では？

**回答** 桐が丘では著作権に関して教員間でも説明会を行うなど共通理解を図り、事前に可能性がある企画については担当教員が確認し、必要が生じた1件については実際に必要な手続きを行った。また、著作権を単なる手続きと考えるのではなく、今後情報化社会で必要な教育として捉え、開会式の時に校長から簡単に著作権について説明をもらった。

**感想** 小学部と中高等部を2つに分けて見学の時間を短くしたのはよい考えだと思った。

23

# 附属久里浜特別支援学校 オンラインを活用した取組

## 1. はじめに

今年度（令和2年度）は、新型コロナウイルス感染症（以下、新型感染症とする）により、教育の在り方が大きく見直された1年であった。子供たちが登校し、教師や友達と「対面」で学習するという当たり前の教育ができなくなった。学校が再開された6月以降、運動会やのびのびまつり（地域住民や外部団体の協力を得て開催）など、多くの学校行事が中止となった。また、学部全体で行う集団活動や、複数の学年が集って行う学習など、これまで本校で大切にしてきた様々な集団活動も実施が難しい状況となった。

しかし、本校では、こうした新型感染症の影響により、直接見て、聞いて、関わって学ぶことが難しい状況でも、これまでのように子供たちの学習の機会を保障するために、オンラインを活用した新たな取組を試み、実践を積み重ねてきた。

（「令和2年度 実践研究集録」PP.58-83）

## 2. 一斉休業中の学校全体の取組

### （1）取組の方針

全国一律の臨時休業というこれまで誰も経験したことの無い事態の中、私たちは、子供の発達を保障し、保護者とつながっていくために、学校は何ができるのかを考え、一斉休業中の指導や保護者への支援について以下のようなねらいを考えた（表1）。

表1 学校全体の取組の方針

対象	指導及び支援のねらい
幼児児童	・幼児児童が、様々な手段を通して、担任と関係づくりをするとともに、現状を理解したり、学校生活が始まることに期待感をもったりすることができる。
保護者	・保護者が、現在の生活の中で感じている子育ての悩みや、感染症等への不安、思いなどについて担任に話したり、一緒に対処策を考えたりすることを通して、前向きに生活を営むことができるようにする。

### （2）取組の内容と結果

ねらいを実現するために、図1・2に示すような内容・方法を考え、教職員が協力して実施した。

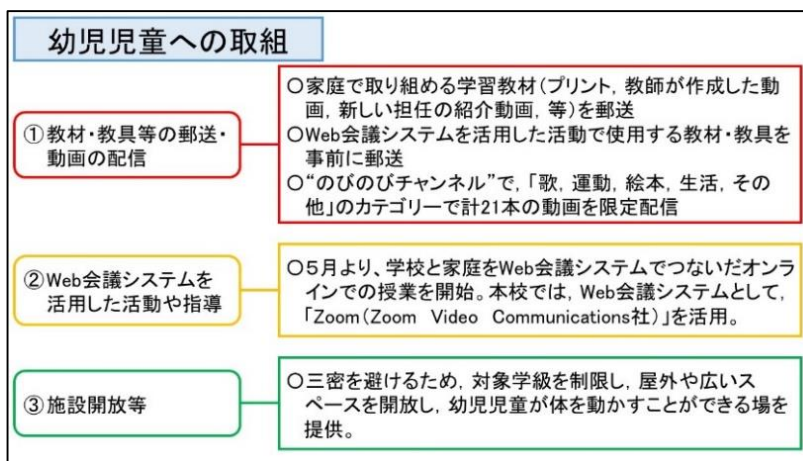


図1 幼児児童への取組の詳細



図2 保護者への取組の詳細

こうした取組を通して、子供が少しずつ生活リズムを整え、落ち着いて過ごすようになったり、子供が画面越しに新たな担任の名前を呼び掛けたりするようになった。また、教師が、保護者と子供が関わる方法を伝えたり、保護者の悩みを聴き取ったりするなど、家庭生活支援を進めることにつながった。

### 3. オンラインでの行事について

#### (1) 新しい学習形態の模索

一斉休業が明け、新しい生活様式が求められる中、子供たちが季節の行事を楽しみ、他学級の友達や教師とも関わりを深め、共に学ぶとともに、集団の中で自分の役割を果たし、達成感を味わい、自信を育むために、新しい学習形態を模索することとした。具体的には、Web 会議室システム Zoom を活用した学習や行事（以下、オンライン授業と表記）を計画、実施した。

#### (2) オンラインの学習や行事について

新型感染症禍の中、実施が困難だと考えられた特別活動「小学部集会」や「横須賀市 A 小学校との交流及び共同学習」、全校行事「きらきらコンサート（プロの音楽家によるコンサート）」をオンライン授業として実施することとした。以下、「小学部集会」のオンライン授業について具体的に述べる。

#### (3) 授業の実際と子供の様子

小学部集会をオンライン授業で実施する際、子供たちに、これまでの対面の授業ではないことを伝えるために、授業の名称を「小学部チャンネル」とした（図 3）。

小学部チャンネル(小学部集会)							
○年7回実施。(7/16, 9/14, 10/2, 11/18, 12/17, 1/22, 2/10)							
○活動内容は、「始めの挨拶」、「集まりの歌(オリジナル曲)」、「手遊びやダンスなどの活動」、「教師の話や読み聞かせ」、「終わりの挨拶」を含め、4～5つ程度で構成。							
○ホストとなる担当学級を決め、児童もしくは教師が司会進行を務める。							
今年度の活動内容							
	1回目 (7/16)	2回目 (9/14)	3回目 (10/2)	4回目 (11/18)	5回目 (12/17)	6回目 (1/22)	7回目 (2/10)
担当	6年生	6年生	5年生	4年生	6年生	3年生	6年生
活動	1 始めの挨拶 2 集まりの歌 3 新入生と1年生の紹介 4 終わりの挨拶	1 始めの挨拶 2 集まりの歌 3 ダンス「パプリカ」(6年生映像) 4 発表(交流校) 5 終わりの挨拶 (A小学校6年生との交流及び共同学習として実施)	1 始めの挨拶 2 集まりの歌 3 ダンス「パプリカ」(6年生映像) 4 発表「きらきらぼし」(5年生) 5 終わりの挨拶	1 始めの挨拶 2 集まりの歌 3 ダンス「パプリカ」(3年生映像) 4 研修生の紹介 絵本読み「おおきなかぶ」(教師) 5 終わりの挨拶	1 始めの挨拶 2 集まりの歌 3 手遊び「やきいもグーチャーパー」(教師作成映像) 4 研修生の紹介 発表「修学旅行」(6年生) 5 終わりの挨拶	1 始めの挨拶 2 集まりの歌 3 体操「くりはま体操」 4 マラソン大会のお知らせ 5 終わりの挨拶	1 始めの挨拶 2 集まりの歌 3 マラソン大会の振り返り 4 卒業・進級の話 歌「みんなとみだち」 5 終わりの挨拶
【指導の工夫】							
・活動にメリハリをつけるために、動的な活動と静的な活動を交互に実施する。							
・画面越しでも応答的なやり取りが少しでもできるように、「スポットライト機能」を使い、特定の子供や学級が画面の全面に映し出されるようにする。							

図 3 小学部チャンネルの取組の詳細

オンライン授業を重ねる中で、子供たちは、少しずつ画面の向こう側にいる教師や友達に声を掛けたり、手を振ったりするなど、積極的に働き掛けるようになってきた。また、他学級の友達が体操やダンスをする映像を見ながら、同じ場にいる友達や教師と一緒に体を動かす等、画面越しではあるが、すべての子供が共通の活動に取り組む経験を積ませることができた。

一方で、画面越しの友達や教師に自分の身振りや言葉が伝わっているのかが分かりにくく、話すことを止めてしまったり、その場から離れてしまったりする子供も多かった。対面とは異なり、画面越しでは、どうしても相手の息遣いや表情の変化など、微細な変化を感じることができず、相手とつながっている感覚を得ることが難しい。オンライン授業ゆえの難しさ、課題も浮き彫りになった。

#### 4. まとめ

オンライン授業では、子供たちの評価の視点が、画面に視線を向けていたか、画面に映る友達の動き等をまねていたかなど、「参加ができた/できなかった」という二分的な評価に終始していた。今後は、子供が何を学び、どのような力を身に付けることができたのかを考え、オンラインのよさと課題を踏まえた上で、授業づくりを行っていきたい。

(文責 五反田明日見)

## Ⅱ 附属学校群・附属学校教育局

### としての取組み

- |                       |         |      |
|-----------------------|---------|------|
| 1. 共生社会を目指す芸術・文化交流の集い | ・ ・ ・ ・ | 42 頁 |
| 2. 朝永振一郎記念「科学の芽」賞     | ・ ・ ・ ・ | 44 頁 |
| 3. WWL コンソーシアム構築支援事業  | ・ ・ ・ ・ | 46 頁 |
| 4. 附属学校教育局プロジェクト研究概要  | ・ ・ ・ ・ | 51 頁 |

## 共生社会を目指す芸術・文化交流の集い

### 1. はじめに

12月13日、附属学校教育局主催の「共生社会を目指す芸術・文化交流の集い」をオンラインで開催し、各附属学校の児童生徒および保護者約300人が参加して熱心に視聴した。

第1部は、筑波大学附属視覚特別支援学校の音楽科を卒業したプロのヴァイオリン奏者で作曲家の穴澤雄介氏を迎え、「過去は変えられる、マイナスをプラスに」と題した講演を実施した。穴澤氏は、御自身で作曲された曲の演奏をはじめ、口笛やパーカッションを交えた演奏や、同視覚特別支援学校音楽科の永山教諭のピアノとの共演などで視聴者を魅了。また、自身の生い立ちとともに過去をプラスに変えた生き方について小学生にも分かりやすく語ってくれた。

第2部は、本学に11校ある附属学校の児童生徒がリレー形式で発表する「プレゼンテーションリレー」。「共生」をテーマに、ダンスや芸術作品、附属学校間の交流の様子を紹介した動画などを発表した。附属高等学校2年生が第2部の司会を務め、各学校のリレー発表を笑顔でつないだ。

発表後は穴澤氏と附属学校教育局の茂呂教育長のあたたかい感想で閉会となり、視聴した参加者からは、各学校間で交流を持つことの素晴らしさが称賛されるなど、「共に生きる」ことの大切さと喜びが感じられた。普通附属学校6校と多様な特別支援学校5校を有する筑波大学独自の取組みとして、芸術・文化面での交流を継続して行うことへ大きな可能性を見出した企画となった。

### 2. 実施要項

◇目的 筑波大学の附属学校群 11校の幼児児童生徒、保護者、教職員を対象として、芸術・文化活動を通じた交流により、共生社会に向けた意識の涵養を図る。

◇日時 令和2年12月13日(日) 13:00～15:30

◇形態 Zoomによる開催

◇発信 筑波大学附属視覚特別支援学校

◇参加 附属学校所属の幼児児童生徒、保護者、教職員等

#### ◇プログラム

13:00 Zoom開始

13:03 教育長挨拶、事業の説明等

13:10～14:20 【第1部】講演『過去は変えられる、マイナスをプラスに』  
穴澤雄介氏（附属視覚特別支援学校卒、ヴァイオリン・ヴィオラ奏者、  
作編曲家）

14:20～15:20 【第2部】プレゼンテーションリレー  
『交流・共生』をテーマにした各附属学校児童生徒による発表

15:20～15:30 講師感想・教育長感想

### 3. 内容紹介

#### (1) 【第1部】講演『過去は変えられる，マイナスをプラスに』

穴澤さんの演奏3曲『いちご畑と青い空（自作）』『うちのわんこ（自作）』『さくらさくら』で始まり，その後オンラインでのトークショーへ。ヴァイオリンを習ううちに作曲家を目指したこと，人生はトラック競技ではなく個性を活かすこと，ラーメンの個性的な味を題材にAIと人間が違うことなどを語り，引き続いて附属学校の児童へ以下の貴重なメッセージをいただいた。



「みんなと違うことはマイナスではなくプラスにできる」

「そのためには好奇心を持ってチャレンジを楽しみ，昨日の自分を超えよう」

「みんなの個性が活かされるバラエティーに富んだ，おもしろい日本を一緒に作ろう」

そして，附属視覚特別支援学校永山先生のピアノ伴奏による『情熱大陸のテーマ』の演奏で幕を閉じた。（画像参照）

#### (2) 【第2部】プレゼンテーションリレー ～『交流・共生』をテーマにした発表～

黒姫高原および三浦海岸共同生活で実行委員として活躍した附属高等学校2年の生徒による司会進行で，「交流」「共生」をテーマにしたプレゼンテーションを全附属学校のリレー形式で実施した。その発表内容は以下のとおりである。（発表順）

- ◇駒場中高 “ともレク” ～ともにレクリエーション～
- ◇大塚特別 カラフルピース ～一人ひとりの個性やよさをダンスで表現しよう～
- ◇小学校 こんな未来がいいな ～わたしたちが考える共生とは～
- ◇桐が丘特別 三浦海岸共同生活で感じたこと+桐が丘特別支援学校の紹介
- ◇坂戸高校 コロナ禍にできるインクルーシブ交流
- ◇久里浜特別 箱根に行こう ～修学旅行の歌～
- ◇中学校 附属の絆+皆の良さが活きる社会へ
- ◇聴覚特別 聴覚障害のある私たちがコロナ禍において感じたことや取り組んだこと
- ◇高等学校 人と人のつながりを大切にしていこう
- ◇視覚特別 盲学校の学校生活紹介



総合司会の高校生と挨拶する教育長



高校「人と人のつながりを大切にしていこう」の動画

## 朝永振一郎記念「科学の芽」賞

### 1. はじめに

本事業は、2006年に朝永振一郎博士（筑波大学の前身の東京教育大学の学長でノーベル物理学賞を受賞）の生誕100年を記念し、その功績を称え後続の若い世代に伝えていくために、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールで、毎年開催している。なお、「科学の芽」という言葉は、1974年に国立京都国際会館において、湯川秀樹・朝永振一郎・江崎玲於奈の3人の博士による座談会が開催された際に、「子どもたちに向けた言葉を」との要請に応じて、朝永博士が色紙（京都市青少年科学センター所蔵）に書かれた言葉から引用している。

今年度は、COVID-19感染拡大防止のために、表彰式並びに発表会を初の試みとしてオンラインで実施した。

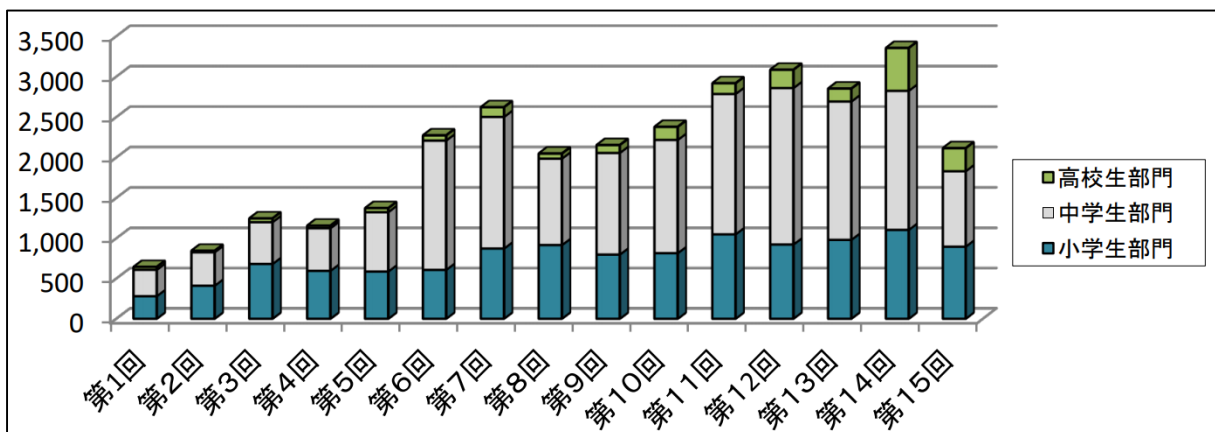


### 2. 本年度の取組み

#### (1) 応募、審査、受賞の状況について

2020年度は、国内の学校（220校）及び海外の日本人学校やインターナショナルスクール（3カ国、4校）から、全部門合計2,116件（個人1,925件、団体191件）の応募があった。COVID-19感染拡大の影響で、昨年度に比べ1,239件の減少となった。審査は、審査委員として大学教員（12名）及び附属学校教員（23名）に、学外審査員（2名）を加え、本学の大学院生（18名）が審査協力者として、審査・選考を行った。その結果、小学生部門11件、中学生部門7件、高校生部門2件について、優秀と認め「科学の芽」賞を授与することとした。その他、奨励賞24件（小12、中5、高7）、努力賞125件（小70、中33、高22）を授与した。

なお、募集状況の推移は以下の表のように、発足時は645件であったが、年々増加し3,000件を超え、今年はCOVID-19の影響で2,000件代に留まった。





## (2) 受賞作品

### ①小学生部門（小3～6年） ※（ ）内は学年

- 「テントウムシのひみつパート3～なぜナナホシテントウはピタッと動きを止めるの？～」(3)
- 「糞虫研究 ルリセンチコガネ 奈良公園の鹿の糞をきれいにしているのは、だあれ？」(3)
- 「自由に形が変えられる水」(4)
- 「影磁石・光磁石」(4)
- 「コロナ VS マスク」(4)
- 「ハンミョウは最速の虫か②～足のひみつにせまる～」(4)
- 「はい水こうにあらわれるダイヤモンドをさがせ！」(4)
- 「ザリガニの脱皮の研究 5 満月が脱皮を引き起こすメカニズムの探索とふ化直後からの脱皮の観察」(5)
- 「フラフープの謎にせまれ！ ～謎解きと成功の秘訣～」(5)
- 「湯葉のひみつ」(5)
- 「水辺のくらしに適応した謎のカメムシの研究」(5)

### ②中学生部門 ※（ ）内は学年

- 「よく飛ぶ紙飛行機Ⅶ～飛ぶ力と尾翼の形～」(1)
- 「植物の発根の観察実験 PART5 シロツメクサの茎と発根の関係」(1)
- 「ニホンヤモリの体色変化パート3～ストレスと模様の変化～」(1)
- 「シングルリード楽器における吹奏音の研究 2～管端形状による反射する振動の変化を解明する～」(3)
- 「火口・カルデラと隕石クレーターはなぜ似ているのか？ ～構造の分析と形成過程の共通点～」(3)
- 「しみこむヨウ素，逃げるヨウ素，捕まるヨウ素」(3)
- 「カタツムリの研究 パートⅧ ～殻をきれいに保つワケ～」(3)

### ③高校生部門 ※（ ）内は学年

- 「茶粕と太陽光を用いた水素製造」(2：団体)
- 「マグネシウム空気電池の高電圧化と長寿命化」(1～2：団体)

## (3) 表彰式並びに発表会

- ◇日時 令和2年12月19日(土) 14:00～16:00
- ◇参加 受賞者27名，学長，副学長3名，実行委員及び関係者約30名
- ◇方法 WEB 会議システム (ZOOM)
- ◇発信 東京キャンパス 337 会議室
- ◇式次第

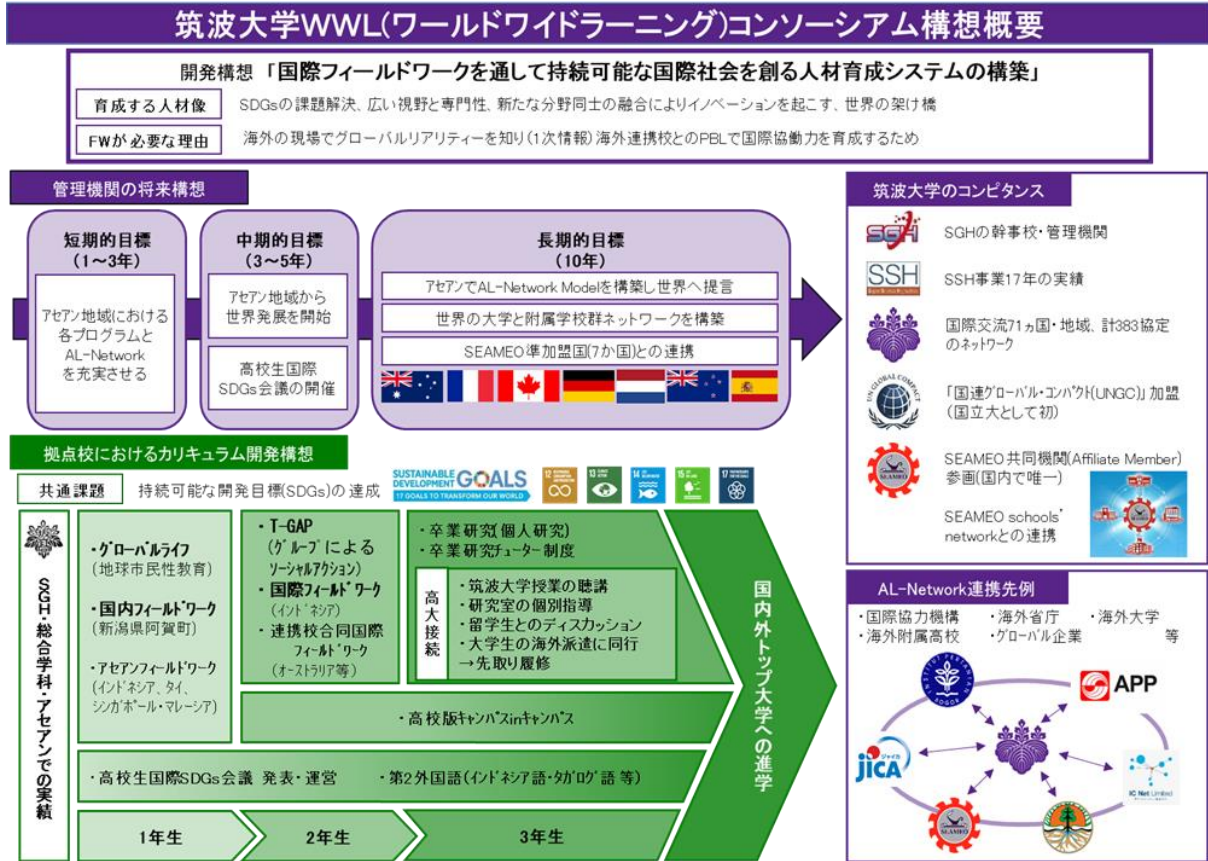
- ・開会（教育局次長）
- ・受賞者発表及び呼名表彰（学長）
- ・記念撮影（スクリーンショット）
- ・お祝いのことば（学長）
- ・発表会・講評（受賞者，実行委員）  
小学生部門／中学生部門／高校生部門
- ・全体講評（学長）
- ・閉会の言葉（実行委員長・副学長）



筑波大学 HP に掲載 <https://www.tsukuba.ac.jp/community/students-kagakunome/>

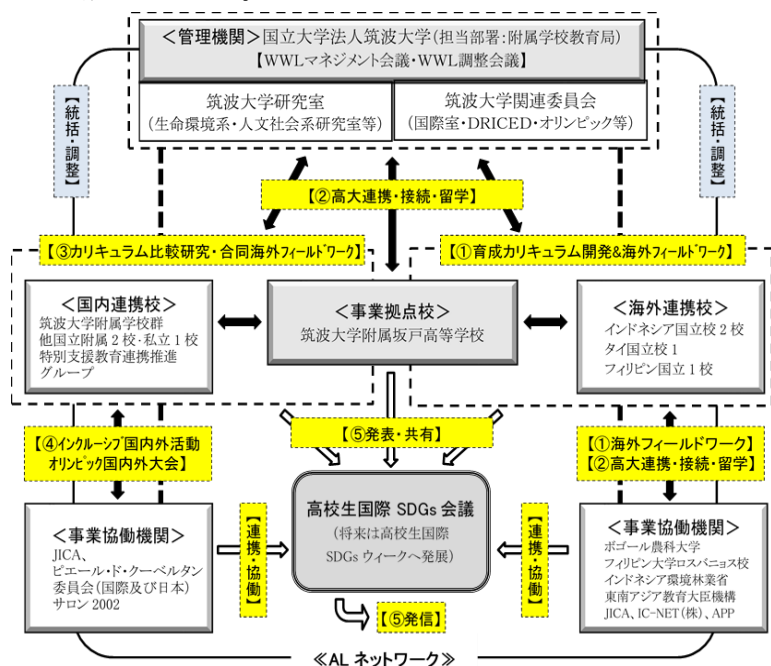
# WWL(ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業

## 1. 本事業の構想概要



上記の構想を達成するために、拠点校と連携校、筑波大学、共同機関がALネットワークを組織し、そのもとで柱となる5つのプロジェクトを推進していく。

- ① 附属坂戸高校での国内外フィールドワークを取入れた体系的な探究型カリキュラム開発
- ② 国内外の大学との高大連携による高度な学習を可能にする環境の構築
- ③ 事業連携校との合同海外フィールドワーク等による成果の検証
- ④ 筑波大学の特色である「オリ・パラ教育」と「インクルーシブ教育」の推進
- ⑤ 高校生SDGs国際会議の開催とその成果の共有と発信



## 2. 令和2年度の年間計画とコロナ禍での変更

COVID-19の感染拡大により、国内外のフィールドワークをはじめとする国際交流の活動は大きく制限されたが、オンライン等による創意工夫で本事業の5つのプロジェクトを以下のとおり実施することができた。

筑波大学(拠点校附属坂戸高校と連携校)の事業	
事業内容	事業全般
	①附属坂戸高校(拠点校)でのFWを取り入れたカリキュラム開発
	②附属坂戸高校(拠点校)での高度な学習を可能にする大学との連携
	③連携校での国際FWと教員研修
	④筑波オリジナル(オリパラ、特別支援)
	⑤高校生国際SDGs会議(現高校生国際ESDシンポジウム)
5月	5/19 第1回WWL調整会議 →メール会議で実施
6月	6/30 SGH・WWL合同連絡協議会 →延期
7月	7/月 国内フィールドワーク(新潟県阿賀町) →中止 附属坂戸高校1年生全員が新潟県阿賀町を訪問し、フィールドワーク(3泊4日の民泊)で実施を通して日本の将来の課題を発見し、日本の視点からその課題に取り組む。
	7~8月 国際フィールドワーク(インドネシア) →中止→「国内フィールドワーク@那須」へ 附属坂戸高校2~3年生の代表7名が、「インドネシア100年の森」をモットーに、インドネシア人の生徒と協力しながらグヌン・グデ・パンランゴ国立公園周辺地域の森林環境をより良くするための活動を考え実践する。
	7/29 SGH・WWL事務説明会(文部科学省主催) →オンラインで実施
8月	オリンピック・パラリンピック東京大会 →延期
9月	9/15 第2回WWL調整会議 →オンラインで実施
	10/29 SGH・WWL連絡協議会(筑波大学主催) →オンラインで実施
10月	10/31 第1回運営指導委員会検証委員会 →オンライン開催
	10/31前 高校生国際ESDシンポジウム(ホスト:坂戸高校) →オンライン開催 ・基調講演/分科会(6):「Ethical消費という観点」「Changes in Asia」「Fieldwork」 「オンライン口頭発表」「COVID-19×SDGs」/全体会(分科会報告)
11月	11/21~23国内フィールドワーク@那須(アジア学院) 現地で実施 海外の農村指導者を養成する期間を訪問し、農業実地体験等を通して世界の農村リーダーたちと交流する。
12月	12/20 全国高校生フォーラム(文部科学省・筑波大学共済) →オンラインで実施 ・オープニング(開会宣言、文科省挨拶等、全体説明:渋谷教育学園渋谷) ・分科会(SDGsで4大テーマ、7~8分科会) ・ポスタープレゼンテーション表彰&優秀校発表会、審査委員長挨拶、文部科学省挨拶)
	12/26・27 ケーベルタン・嘉納・ユースフォーラム(兼日本代表選考会) →オンラインで実施
	2/12~13 第2回WWL・第24回総合学科研究大会 →オンラインで実施
2月	2/19 第3回WWL調整会議 →オンラインで実施
	2/22 WWLコンソーシアム構築支援事業拠点校とのオンライン意見交換会(文部科学省と)
3月	3月 アセアン校外学習(インドネシア、タイ、シンガポール・マレーシア) →中止 附属坂戸高校1年生全員を対象にした海外派遣(国際フィールドワーク)で、インドネシア、シンガポール&マレーシア、タイ国の希望する国に海外派遣し、現地でのフィールドワーク。
	3月 国際合同フィールドワーク(オーストラリアタスマニア州) →中止 坂戸、高校、駒場、特別支援、学芸大学附属国際中等教育、お茶の水女子大学附属高校

3. 附属坂戸高等学校（拠点校）の主な取組みの紹介

「第9回高校生国際ESDシンポジウム」兼「The 2nd SDGs Global Engagement Conference」

◇ 大会メインテーマ “The great transformation for 2030 始めなければ、変わらない”

◇ 日時 令和2年10月31日（土）9時50分～12時30分

◇ 目的 国際シンポジウムを通じて、持続可能な社会の実現を目指してグローバル課題に主体的に取り組む姿勢を涵養するとともに、グローバル人材としての資質を高め、困難な状況にあっても、SDGsの達成に向けたアイデアを共有し、変革に向けた第一歩を踏み出す機会とする。

◇ 大会内容

<p><b>Program</b></p> <p>(Starts at 9:50)</p> <p>Opening Address</p> <p>Yuji MORO (Vice President, University of Tsukuba)</p> <p>Congratulatory Address</p> <p>Ir. Tri Heru Widarto. M, Sc (Pincipal. Labschool SMA Kornita, Bogor Agricultural University)</p> <p>*****</p> <p>Opening Session</p> <p>Daiki AYUHA, Sabita PRADIGDO (Senior High School at Sakado, University of Tsukuba)</p> <p>Keynote speech</p> <p>Masahisa SATO (Professor, Graduate School of Environmental and Information Studies, Tokyo City University)</p> <p>*****</p> <p>⊕ Section Meeting (10:45-12:00)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>Section Number</th> <th>Title</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Section 1</td> <td>Ethical Consumption</td> </tr> <tr> <td>Section 2</td> <td>Changes in Asia, offered in English</td> </tr> <tr> <td>Section 3</td> <td>Fieldwork facilitated by UTSS alumni</td> </tr> <tr> <td>Section 4-A</td> <td>Oral presentations in English</td> </tr> <tr> <td>Section 4-B</td> <td>Oral presentations in English</td> </tr> <tr> <td>Section 4-C</td> <td>Oral presentations in Japanese</td> </tr> <tr> <td>Section 4-D</td> <td>Special session (Agriculture and Sustainability)</td> </tr> <tr> <td>Section 4 E</td> <td>Special session (T-GAP)</td> </tr> <tr> <td>Section 5</td> <td>1D session facilitated by IC-NET limited.</td> </tr> </tbody> </table> <p>*****</p> <p>Review</p> <p>Nakao NOMURA (Associate Professor, University of Tsukuba)</p> <p>Closing Session</p> <p>Daiki AYUHA, Sabita PRADIGDO (Senior High School at Sakado, University of Tsukuba)</p> <p style="text-align: right;"><b>(Ends at 12:30)</b></p>		Section Number	Title	Section 1	Ethical Consumption	Section 2	Changes in Asia, offered in English	Section 3	Fieldwork facilitated by UTSS alumni	Section 4-A	Oral presentations in English	Section 4-B	Oral presentations in English	Section 4-C	Oral presentations in Japanese	Section 4-D	Special session (Agriculture and Sustainability)	Section 4 E	Special session (T-GAP)	Section 5	1D session facilitated by IC-NET limited.
Section Number	Title																				
Section 1	Ethical Consumption																				
Section 2	Changes in Asia, offered in English																				
Section 3	Fieldwork facilitated by UTSS alumni																				
Section 4-A	Oral presentations in English																				
Section 4-B	Oral presentations in English																				
Section 4-C	Oral presentations in Japanese																				
Section 4-D	Special session (Agriculture and Sustainability)																				
Section 4 E	Special session (T-GAP)																				
Section 5	1D session facilitated by IC-NET limited.																				

・分科会 1 : Ethical 消費という観点 (facilitated by APPJ, 日本エシカル推進協議会)

定員 : 約 20 名。エシカル消費に関するワークショップを WWL 連携企業・機関である株式会社アジアパルプアンドペーパー社・日本エシカル推進協議会のファシリテートにより実施した。紙製品に関する認証制度の学びとあわせ、各人の SDGs 達成度などを SDGs Survey を活用するなどしてすすめた。

・分科会 2 : Changes in Asia - アジアから世界へ 変革と課題 - (offered in English)

拠点校の海外連携校の高校生が、各国の COVID-19 の現状と、それにより変化したことについて発表した。発表を嚆矢として、アジア地域全体で求められる変化や課題について検討を行った。

・分科会 3 : Fieldwork - それでも現場に出るという視点-

拠点校では、現場での学びやアクションを重視している。しかしながら、COVID-19 の影響により、校外でのアクションに制限がかかった。この分科会では、海外でのフィールドワークを経験した本校卒業生たちによる「現場」での学び、そこから生まれた変化について発表をおこなったあと、参加者との語りを重視して行った。

・分科会 4 : オンライン口頭発表

コロナ禍であっても、調査研究を継続したり、ソーシャルアクションに取り組んだ高校生も多い。国内外の、高校生による研究・活動の成果発表を行い、課題研究を通じた交流を図った。英語 2 ルーム、日本語 3 ルーム設定した。WWL の拠点校である愛媛大学附属高等学校とは、総合学科および農場を有する国立大学附属高校同士であるという共通点を活かし、さらに JICA 青年海外協力隊に参加経験のある教員が所属する茨城県立水戸農業高等学校も参加し、国内における課題研究のネットワークも広げた。

・分科会 5 : IC-NET 株式会×1 年 D 組

拠点校では、SGH 指定期間中に SGH 事業に中心的に取り組む SG クラスを新設した。SG クラス (D 組) は、毎年全員が国際シンポジウムに参加している。本年度は COVID-19 の影響により直接交流の機会が減ったが、WWL 連携企業の IC-NET 株式会社の協力のもと、ネパールおよびオーストラリアの高校との交流プログラムを実施した。

◇ 国内外の参加校

1)Forestry Vocational High School Republic of Indonesia, 2)Bogor Agricultural University Kornita Senior High School, 3)University of the Philippines Rural High School, 4)Laboratory School of Indonesia University of Education, 5)Kasetsart University Laboratory School Bangkok Campus, 6)Melbourne High School, 7)Brihaspati Vidyasadan High School, Nepal, 8)JUNTEN Senior High School, 9)Ehime University Senior High School, 10)Ibaraki Prefectural Mito Agricultural High School, 11)Senior High School at Otsuka, University of Tsukuba, 12)Special Needs Education School for the Deaf, University of Tsukuba, 13)Senior High School at Sakado, University of Tsukuba



司会進行の坂戸高校生

#### 4. 附属学校教育局（幹事管理機関校）の主な取組み「全国高校生フォーラム」の紹介

令和2年12月20日に「2020年度スーパーグローバルハイスクールおよびWWLコンソーシアム構築支援事業全国高校生フォーラム」（文部科学省・筑波大学主催）が、初めてオンラインで開催され、平成28年度SGH指定校11校・SGHアソシエイト1校・令和元年度WWL拠点校・連携校31校・令和2年度WWL拠点校・連携校22校（連携校を含む）など、計65校などから関係者約500名が参加した。その概要は以下のとおりである。

◇ 開催日時 12月20日（日）13:00～15:30

◇ 開催方法 Zoom ミーティングによるオンライン開催（発信会場：筑波大学文京校舎）

##### ◇ 全体プログラム

13:00～13:05 開会（オープニング動画、開会宣言、文部科学省ビデオ挨拶、全体説明

13:08～14:25 分科会セッション（4テーマ「格差のない社会」「自然環境と生活」「社会環境と生活」「持続可能な開発」で8分科会）

14:30～15:30 総会セレモニー（司会生徒トーク、附属学校教育局挨拶）

表彰式（ポスタープレゼンテーション生徒投票賞4校・審査委員長特別賞1校・優秀校4校発表、優秀校4校の動画放映、最優秀校の発表）

閉会式（文部科学省ビデオメッセージ、司会生徒）

##### ◇ 分科会セッションの内容

【A：格差のない社会をめざして】 関連するSDGs：①②③⑤

A-1（9校・24アカウント）アドバイザー：東野 篤子（筑波大学人文社会系）

A-2（8校・24アカウント）アドバイザー：秋山 肇（筑波大学人文社会系）

【B：自然環境と生活】 関連するSDGs：⑥⑦⑬⑭⑮

B-1（7校・20アカウント）アドバイザー：吉田 正人（筑波大学芸術系）

B-2（6校・21アカウント）アドバイザー：辻村 真貴（筑波大学生命環境系）

【C：社会的環境と生活】 関連するSDGs：④⑧⑩⑯

C-1（8校・25アカウント）アドバイザー：渡部 宏樹（筑波大学人文社会系）

C-2（8校・24アカウント）アドバイザー：Sandoval Felipe（筑波大学医学医療系）

C-3（8校・25アカウント）アドバイザー：野村名可男（筑波大学生命環境系）

【D：持続可能な産業と開発】 関連するSDGs：⑨⑪⑫⑰

D-1（9校・29アカウント）アドバイザー：Jactat Bruno（人文社会系人文社会系）



司会進行の渋谷教育学園渋谷高校の生徒



分科会 A-1 の分科会セッションの様子

※ 詳細は筑波大学附属学校教育局 HP に掲載

☞ <http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/wp/wp->

[content/uploads/2020/03/2020\\_WWL\\_report\\_20210331.pdf](http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2020/03/2020_WWL_report_20210331.pdf)

## 附属学校教育局 プロジェクト研究 1

### 1. 研究テーマ

交流及び共同学習の実践と評価に関する心理学的研究

### 2. 研究代表者

小島道生・下山直人（附属学校教育局）

### 3. 研究構成員（以下、敬称略）

小松俊介，松本英樹（附属高校）

森嶋政晴（附属視覚特別支援）

石田周子（附属桐が丘特別支援）

### 4. 研究目的

交流及び共同学習の実践について検証し，効果的な交流及び共同学習の在り方について明らかにする。特に，今年度はオンラインでの交流及び共同学習の取り組みについて検証する。

### 5. 研究成果の概要

昨年度から継続して，交流及び共同学習の文献研究を進めた。また，本年度はコロナ禍における新たな取り組みとして実施されたオンラインでの交流及び共同学習に関する実践に対して，参加した生徒自身を対象として，その効果などについて検討した。その結果，生徒の評価から，オンラインの交流及び共同学習の成果と課題について一定程度明らかにすることができた。

### 6. 今年度の活動

今年度は，緊急事態宣言が途中で発令されるなど，年間を通して対面での交流及び共同学習の実践が困難であった。しかし，新たな取り組みとしてオンラインでの交流及び共同学習の取り組みが実施された。そして，主には参加した生徒の評価からその効果と限界が示され支援の在り方について検討した。

（文責；小島道生）

## 附属学校教育局 プロジェクト研究 2

### 1. 研究テーマ

『演劇的表現やパフォーマンスを通じた学習と学習環境の共創』

### 2. 研究代表者

茂呂雄二（附属学校教育局）

### 3. 研究構成員（以下、敬称略）

笠原壮史（附属小学校）、石黒 友一・関谷 文宏・中島真紀子（附属中学校）、  
岩田光弘・岡部玉枝・小松俊介（附属高校）、平田知之・森大徳（附属駒場中高）、  
福田美紀（前附属坂戸高校）、皆川あかり（附属視覚特別支援）、  
根岸由香・若井広太郎（附属大塚特別支援）、大川原恒・小菌慶子（附属桐が丘特別支援）

### 4. 研究目的

本研究プロジェクトは、現在、学習心理学・発達心理学の領域で注目されている、パフォーマンスアプローチに基づいて、①パフォーマンス・ベース・アプローチの整備、②附属における教育方法の革新／教員のマインドの改革／新しい危機管理研修方法の提案、③成果の出版と発信の3点を目指すものである。

### 5. 研究成果の概要

今年度は、上記研究目的のうち①パフォーマンス・ベース・アプローチの整備について検討した。コロナ禍の状況でもあり、リモートでの研究会を開催するにとどまった。また、3年間の成果出版をめざして、出版社への相談を行った。

### 6. 今年度の活動

- ・ Fred Newman and Lois Holzman の『Unscientific Psychology: A Cultural-Performatory Approach to Understanding Human Life』の研究会  
日時：8月8日（日）13時～ Zoom 開催
- ・ Kontopodis（2012）『Neoliberalism, Pedagogy and Human Development』を読む会  
日時：10月25日（日）13時～16時30分 Zoom 開催
- ・ オンライン研究会「パフォーマンス心理学のインパクト」の開催  
スピーカー 茂呂雄二（筑波大学）  
日時 2021年2月7日（日）16:00～18:00 Zoom によるオンライン開催
- ・ 『Revisiting Vygotsky for Social Change』読書会の開催  
日時：2021年4月24日（土）13時～ Zoom 開催

（文責；茂呂雄二）



## 附属学校教育局 プロジェクト研究3

### 1. 研究テーマ

インターネット嗜癖・ゲーム障害の援助要請に関する研究

### 2. 研究代表者

原田隆之

### 3. 研究構成員（以下、敬称略）

五味 喜久子・山形 智弘（附属中学校）・道幸 玲奈（附属中学校）

小林 寛美・佐藤 優子（附属視覚特別支援）

河野 文子（附属桐が丘特別支援）、白石 利夫（前附属桐が丘特別支援）

### 4. 研究目的

インターネットの過剰使用は社会的に大きな問題になっており、WHO は 2019 年にゲーム障害という疾患を新たに認めるに至った。インターネットやオンラインゲームの過剰な使用は、学力低下やさまざまな心身の問題の原因となる。本研究では、附属学校の児童生徒のインターネット使用の現状を把握し、問題のある使用に陥っている者がどれくらいいるのか、どのような支援ニーズがあるのかなどを明らかにし、今後の指導に役立つ知見を得ることを目的とする。

### 5. 研究成果の概要

坂戸高校および桐が丘特別支援において調査を実施した。その結果、インターネットの1日平均使用時間が、両校の生徒とも全国平均を超えていた。また、インターネット依存のスクリーニングの結果では、依存がうかがえる生徒の割合は、それぞれ 19.4%、14.8%と決して低くない割合であることがわかった。

### 6. 今年度の活動

上記調査を実施し、回答結果を解析した。さらに、検討結果をまとめて両校に「インターネットやゲームの使い方についてのアンケート結果のお知らせ」として、学校、保護者、生徒あての文書を配布した。

（文責；原田隆之）

## 附属学校教育局 プロジェクト研究 4

1. 研究テーマ ICT を活用した授業実践の共有と公開
2. 研究代表者 雷坂浩之（附属学校教育局）  
佐藤北斗（特別支援教育連携推進グループ，附属視覚特別支援学校）

3. 研究構成員（以下，敬称略，\*は実践発表者を示す）

岡部玉枝\*（附属高等学校），今和泉卓也（附属駒場中高），井上卓也\*（附属坂戸高校），内田智也\* 片山翔\* 小清水貴一\* 佐藤優子\* 丸山訓英\* 平野祐希子\*（附属視覚特別支援），山縣浅日（附属聴覚特別支援），厚谷秀宏 宇佐美太郎\* 佐藤知洋（附属大塚特別支援），杉林寛仁\* 竹田恵（附属桐が丘特別支援），八木郁朗\*（北海道新篠津高等支援学校，前特別支援教育連携推進グループ研修生），加藤隆芳（国際学院埼玉短期大学・前附属桐が丘特別支援），白石利夫（聖徳学園中学・高等学校・前附属桐が丘特別支援）

4. 研究目的

各附属学校の ICT を活用したオンライン授業（遠隔教育・配信）の実践を共有し，附属学校群の連携研究につなげる。

5. 研究成果の概要

COVID-19 の影響により対面での指導が難しい状況下において，各附属学校のオンラインでの実践を共有した。附属坂戸では Microsoft Teams，附属高校では Google Classroom を活用し，4月の休校期間中すぐにオンラインに切り替え，継続的な学びを進めていることが報告された。附属桐が丘からは Zoom を活用した授業の実際の様子が共有され，また北海道新篠津からは，生徒に1人1台渡している iPad と学内ネットワークをつなげての授業支援の取り組み，附属大塚からは集会や行事において密を避けるために Zoom を使い，各学年の教室をつなげたインタラクティブな活動を行っていることが発表された。また，附属視覚からは障害生徒へのオンライン指導の課題についても検証の必要があることが示唆された。各学校の発表から ICT を活用した授業実践の質の向上について追究できた。次年度は，普通附属と特別支援のオンライン授業実践の連携および協働の研究とし，検証を進めていく。また，学内のみならず学外に広く発信することも合わせて計画している。

6. 今年度の活動（Zoom で実施）

- ・各学校の臨時休校期間と休校期間後の ICT の活用実態調査（Google フォームにて）
- ・令和2年度の活動に向けての打ち合わせ（令和2年9月30日）
- ・各学校の実践発表①：連携推進グループ，附属坂戸（令和2年11月30日）
- ・各学校の実践発表②：北海道新篠津高等養護，附属視覚（令和2年12月22日）
- ・各学校の実践発表③：附属高校，附属大塚，附属桐が丘（令和3年1月29日）

（文責：佐藤北斗）

### Ⅲ 附属学校の研究概要

1. 小学校	・ ・ ・ ・ ・	56 頁
2. 中学校	・ ・ ・ ・ ・	58 頁
3. 高等学校	・ ・ ・ ・ ・	60 頁
4. 駒場中・高等学校	・ ・ ・	62 頁
5. 坂戸高等学校	・ ・ ・ ・ ・	64 頁
6. 視覚特別支援学校	・ ・ ・	66 頁
7. 聴覚特別支援学校	・ ・ ・	69 頁
8. 大塚特別支援学校	・ ・ ・	72 頁
9. 桐が丘特別支援学校	・ ・	74 頁
10. 久里浜特別支援学校	・ ・	78 頁

# 筑波大学附属小学校の研究概要

## 1. 先導的教育拠点

### (1) 研究テーマ 「『美意識』を育てる」

－第2年次－ 「美意識」を育てる授業と指導法

本研究第1年次の研究発表会は、当初6月に予定されていたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で8月9日に延期、2日間の予定を1日に短縮、学習公開は行わずに開催した。方法はオンライン（ZOOM）。招待者、講師のみの入室をお願いし、約150名の参加をもって実施した。

第1年次の研究成果は、小学校教育における、育てるべき「美意識」とはどのようなものか、その定義について明らかにしたこと、また「美意識」を育てる授業像とはどのようなものか、国語科、算数科、理科、音楽科、道徳科の研究授業からの実践例、それら実践の裏付けとなる理論について明らかにしたことなどであった。

9月からは、研究第2年次に入った。当初計画していた研究授業は8本であったが、コロナ禍の影響で、4本の実施にとどまった。第2年次のサブテーマは「『美意識』を育てる授業と指導法」である。各教科等において、児童の「美意識」を育てるための指導法について追究している。研究の成果は、6月12日にオンライン開催の研究発表会で披露する予定である。

また、例年2月に行っている初等教育研修会については2月13日に1日開催を行った。学習公開は行わず、各教科等の分科会のみを行った。一般参加も募り約1500名の参加者を得た。

別に、令和2年度より令和5年度までの4年間、文部科学省による「研究開発学校」の指定を受けている。第1年次を終えたところである。各教科等の編成原理などを明らかにしたところである。第2年次は、各教科等の本質をなす主要な概念の抽出、各教科等がもつ個別の知識などを明らかにすべく研究を進めている。

### (2) 今年度の校内研究会の計画

- 4月30日 研究開発にかかわる勉強会（奈須正裕先生講演会）
- ◆8月9日 研究発表会
- 9月23日 研究開発にかかわる勉強会（田中統治先生講演会）
- 10月6日 研究開発にかかわる勉強会（奈須正裕先生講演会）
- 12月10日 研究授業兼研究開発にかかわる勉強会（奈須正裕先生講演会）
- ◆2月12日、13日 初等教育研修会

今年度実施の校内研究会

10/22 国語科、11/26 道徳科、12/10 総合、3/2 社会科

### (3) ICT教育への積極的な取り組み

今般の新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、オンライン学習を進めるべくシステムの構築を図った。「まなびポケット」の採用。休校期間であった令和2年5月18日よりオンライン学習の実施、6月からリアル授業とオンライン学習の併用など、行ってきた。またGIGAスクール構想の準備も並行して行っているところである。

## 2. 教師教育拠点

- (1) 筑波大学の初等教育コースでの講義（オンライン）および教育実習（後期のみ実施）
- (2) 筑波大学免許更新講座の中止

## 3. 国際教育拠点

- (1) 筑波大学留学生との交流会（オンラインによって実施）
- (2) 日米教育交流，日韓授業交流，欧州での授業研究会，JICA 教員研修への協力→中止

（文責：高倉弘光）

# 筑波大学附属中学校の研究概要

## 1. はじめに

附属中学校では、大塚小中高と大学との連携に基づくカリキュラム開発と実践プログラムの作成を視野に入れ、教科ごとに教材や学習指導法の開発を中心に研究を行っている。

本年度は遠隔会議システムを利用して、大塚地区の3校と大学とからなる「四校研」や中高合同研究会を実施し、グローバルな素養を育てる小中高一貫カリキュラムを作成するための研究を各教科等でを行った。社会科では、小中高大連携の授業研究会を実施した。

## 2. 教員研究会の実施

### (1) 主旨と内容

教育活動の質の向上及びその成果の発表への準備を行う場として教員研究会を定期的に実施している（原則：各週月曜日）。内容は、恒常的に行うものとして各年度の研究課題、研究協議会開催に向けての準備（発表内容・運営方法の検討）、学校評価、校内授業研究会、救急救命訓練等である。その他には、学習支援を要する生徒の指導、いじめ問題に関する研修会、教育課程の編成や入試のあり方に関する検討会など、早急に対応しなければならない問題や中・長期的な課題などを扱っている。

### (2) 本年度実績（全15回）

回	日付	研究会の内容
1	4月13日	①授業支援クラウドの活用に関する研修 ②遠隔会議システムの利用に関する研修
2	4月20日	①授業支援クラウドを活用した指導法の研修
3	5月2日	①授業支援クラウドを活用した指導法の研修（非常勤講師）
*	5月25日	<b>四校研①（附属小）は中止</b>
4	6月22日	①今年度の研究課題（各部局より）②研究協議会について
5	7月6日	①教育課程研究－1「授業支援クラウドを活用した学習」のふり 返り（アンケート結果をふまえて）
6	7月20日	①教育課程研究－2「総合・HRH」「生徒会活動」
7	9月7日	①ICT（新黒板ツール）活用法 ②安全管理と防災計画、 ③生徒指導情報交換－1（指導上配慮を要する生徒）
8	9月28日	①研究協議会・全体会概要（教育課程研究－3）zoom会議
9	10月5日	①生徒指導情報交換－2（「中学校生活の調査」をふまえて）
10	10月26日	①研究協議会・細案
*	11月16日	<b>四校研②（附属中）各教科で日程を調整して実施</b>
11	11月30日	①研究協議会・ふり返り（教育課程研究－4）
*	1月18日	<b>四校研③（附属高校）</b>
12	2月1日	①学校評価

13	2月15日	①授業研究会（教育課程研究⑤）②ハラスメント研修会 ③HRHエゴグラムを活用した活動
14	3月8日	①他附属等の研究成果の共有
15	3月9日	①今年度の研究の課題のまとめ（各部局から）②新部局会合

3. 研究協議会の開催 令和2年11月14日（土）13:10～16:45（zoom開催）
- (1) 全体会 「学習支援クラウドを活用した学習指導・学習活動の成果と課題」
- (2) 研究発表と研究協議（各教科）

4. 校内の各部局での研究課題（全部局共通の課題：コロナ感染症対応）

- ① 教務部：入試，富浦寮運営，校内施設整備，情報発信，教育実習にかかわる検討
- ② 生徒部：生活指導，生徒会指導，クラブ活動に関する指導の検討
- ③ 研究部：学校全体の教育力を高めるための研究，新教育課程の編成  
第三期中期目標（四校研）達成へ向けての研究

5. 各教科の研究課題

教科	令和2年度の研究課題
国語科	新学習指導要領の施行を見据えた国語科授業実践の研究（3）
社会科	小中高一貫カリキュラムの作成（15）
数学科	小中校一貫における図形領域のカリキュラム研究（1）
理科	中学校理科における創造性の育成
音楽科	学校音楽の果たすべき役割と可能性（継続）
美術科	本校美術科カリキュラムの見直し（継続）
保健体育科	3年間を通じたカリキュラムの検討（継続）
技術科	情報モラルについて，技術に関わる倫理感や新しい発想を生み出し活用しようとする態度の育成－（3）
家庭科	食育：栄養バランスの整え方－10代からの食生活習慣について－（4）
英語科	新学習指導要領に対応した指導のあり方の研究（4）
学校保健	保健室の保健情報センター機能の充実（2）

6. 総合学習研究

- 1年 情報リテラシー学習，校外学習（社会）
- 2年 コース別学習，修学旅行事前学習
- 3年 コース別学習・特別選択学習，修学旅行事前／事後学習

7. 国際教育

- (1) イングリッシュ・ルーム開設（8年次）
- (2) アメリカ短期留学（8年次）＊今年度は中止。
- (3) シンガポール交換留学（13年次）＊今年度は中止。 （文責：関谷 文宏）

# 筑波大学附属高等学校の研究概要

筑波大学附属高等学校においては、「研究・教職部」が担当組織となってさまざまな研究活動を行っている。特に教科教育に関しては、専門性を活かしたカリキュラム研究や指導法の研究に積極的に取り組んでいる。また、文部科学省が開始した事業の一つであるスーパーグローバルハイスクール（SGH）の幹事校として2014年度から指定され、国際交流において多彩な教育活動を展開し、その成果を発信した。また、この期間中に課題解決学習と、そのための知識・技能を習得させる「SGHスタディ」のカリキュラムを開発し、その後も「筑附スタディ」として継続してきた。その他、教育局との連携による研究活動、筑波大学生を中心とした教育実習生の指導を行う中での教員養成も継続的にやっている。

## 1. 研究大会

第70回研究大会を、12月5日（土）に開催した。今年度はコロナウィルス感染拡大予防のため、Zoomを利用したオンラインの形式で実施した。午前中は、休校期間中の様々な取り組みを本校教員より報告し、その後妹尾昌俊氏による講演会を実施した。午後は教科別にテーマを設けて協議会を持った。教室で通常の授業を公開することができないかわりに、事前に撮影した授業動画の上映や教室からの授業ライブ中継等、各教科で工夫を凝らして本校の授業実践を報告した。また、休校中のオンライン授業についても、Zoom授業の録画や配信した動画を紹介するなどして様々な取り組みを紹介した。これらをふまえて各協議会で活発な議論がなされた。午前・午後の部を合わせると、全国からのべ500名の参加者があった。

今年度も教員免許状更新講習としての附属高校実践演習を同時に開催したが、受講者は講演と協議会にはオンラインで参加し、筆記試験は郵送する、という形態を取った。

研究大会の具体的な時程と内容は以下の通りである。

### 【休校期間中の本校の取り組み】（9:25～10:40）

- 1 全体説明
- 2 生徒実態調査から「朝体操」へ
- 3 オンライン授業の分析とこれからの課題

### 【講演】（10:50～12:00）

「学校はどこへ向かうのか -コロナ禍での学校の行動力を振り返る-」 講師：妹尾 昌俊氏

学校業務改善アドバイザー（文科省，埼玉県，横浜市等より委嘱），中央教育審議会「学校における働き方改革特別部会」委員等を歴任。合同会社ライフ&ワーク代表。

### 【教科別実践報告・公開授業】（13:00～15:15）

教科（科目）	発表担当者	テーマ
国語（現代文）	大内康宏	動画で学ぶパラグラフ・ライティング
地歴公民（日本史B）	大庭大輝	江戸時代の経済 ～休校期間の学びを活かし、歴史総合を見据えて～
数学（数学Ⅱ）	大堀健吾 他	対数の導入
理科（物理）	小澤啓	音声配信によるオンライン授業 の実践報告
理科（化学基礎）	柳澤秀樹	電気分解



保健体育（体育）	中塚義実 他	分散登校における体育実技 ～体づくり運動を中心に～
外国語（英語表現Ⅰ， コミュニケーション英語Ⅰ， Ⅱ，Ⅲ 他）	塩飽りさ 曾根典夫 高木哲也 物井真一 矢田理世	オンライン授業を経て我々が学んだこと
芸術（美術Ⅱ）	小松俊介	オンライン授業を経て，通常の対面授業を考 える

## 2. 四校研

大塚地区の附属小・中・高及び大学で四校研を実施し，教科教育を中心に研究している。今年度は，コロナウィルス感染拡大に伴う臨時休校等の対応に追われていたため 5月の会合は中止し，10月と1月に実施した。筑波大学の中期目標に即し 2016年度より「グローバルな素養を育てるカリキュラム研究」というテーマで活動してきたが，これに，今年度の ICT を利用した授業実践報告を加え，2022年1月に報告書としてまとめる予定である。

## 3. 校内研究会

会議と研究会を隔週で行っており，研究会では，校内で検討すべき諸問題を取り上げて討議している。また，3月末には防災体制や生徒指導に関わる諸問題，入試等のテーマを設け，半日をかけて検討している。令和2年度の研究会のテーマは以下の通りである。なお，今年度はコロナウィルスの感染拡大状況に応じて，適宜 Zoom と対面を使い分けて実施した。

- 6月22日 休校中のオンライン授業振り返り～休校明けも活用できる道の模索～【個人】
- 7月20日 総合的な探究の時間について【総合的な探究の時間準備委員会】
- 9月14日 帰国生入試について【帰国生入試委員会】 研究大会について【研究教職部】
- 11月2日 総合的な探究の時間について【総合的な探究の時間準備委員会】
- 2月8日 「筑波スタディ」2年生優秀研究選考会【筑波スタディ委員会】
- 3月19日 入学試験振り返り【入試広報部他】 生徒指導について【生徒部】  
総合的な探究の時間について【総合的な探究の時間準備委員会】

## 4. 研究紀要

研究紀要は，教科・委員会・個人等の研究成果をまとめて年一回発行している。昨年度は第61巻が2020年3月に発行された。今年度末に第62巻が発行予定である。

（61巻内容）

- ・社会の変化と保健体育科の使命Ⅲ —創作ダンス・クラス作品作りから見えること—  
保健体育科：征矢 範子，今西智津子，貴志 泉，鮫島 康太，中塚 義実
- ・作品制作を通じた美術鑑賞の授業実践 —ジュゼッペ・ペノーネ《川になる3》の鑑賞—  
美術科：小松 俊介
- ・将来の性教育に必要なものとは —知識と行動のギャップという視点から—  
保健体育科：貴志 泉

（文責 矢田理世）

# 筑波大学附属駒場中・高等学校の研究概要

## 1. 研究開発

### (1) 文部科学省研究開発「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」(第4期・第4年次)

過去15年間のSSH指定による研究開発の成果を評価され、平成29年度より令和3年度まで第4期目となる5年間の指定を受けた。今年度(2020年度)はその第4年次となる。

#### ① 研究開発課題

「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探求型学習システムの構築と教材開発」

#### ② 研究の概要

過去15年間のSSH指定による研究開発(第1期「先駆的な科学者・技術者を育成するための中高一貫カリキュラム研究と教材開発」、第2期「国際社会で活躍する科学者・技術者を育成する中高一貫カリキュラム研究と教材開発—中高大院の連携を生かしたサイエンスコミュニケーション能力育成の研究—」、第3期「グローバル・サイエンティストを育む中高大院連携プログラム開発」)による実績を踏まえ、第4期SSHでは、主体的・協働的な学びを通して、自ら設定した研究課題に対して探究する理数系人材の育成を目的とする。また、中高生の成長過程に即したカリキュラムと学習プログラムを開発・実践し、それらを有機的に連動させた学習システムの構築を目標とし、その成果を社会に積極的に発信し、他校との共有を図る。第4期では、以下の4つを研究開発の柱とした。

1. 国際社会に貢献する科学者・技術者を育成する探究型学習の教材開発と実践
2. 主体的な探究活動をするための基礎力育成カリキュラムの開発と実践
3. 探究型学習を実践するためのプログラム開発とサポート体制
4. 探究型学習システムの構築と他校への発信・共有・検証

#### ③ 第4年次の実践

5年計画の第4年次は、研究をさらに発展させ効果の検証をする。第3年次までに試行した内容について、再検討を行い本格的な実施に取り組む。また、継続的に実践している内容については、再検討・改良などを行い、成果の普及を進め、効果の検証を計る。

### (2) 社会貢献プロジェクト「筑駒アカデミア」

(若葉会(本校OB会)「筑駒人材バンク」を活かした地域貢献)

筑波大学社会貢献プロジェクトの一環として始まり、平成19年度からは、校内プロジェクト委員会(P3)を中心として、計画、立案、運営を行っている。今年度も近隣地域住民等を対象とした講演会をオンデマンドによる動画公開で開催した。また、2021年3月27日(土)には、地域住民、生徒、児童対象の公開講座を開催予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、規模を縮小し、オンラインでの公開ワークショップ「駒場将棋道場～将棋の世界を知ろう～」のみを開催した。

- ・公開講演会：2021年1月26日(火)～1月31日(日)

「遺伝統計学へようこそー疾患とゲノムを結びつけるー」オンライン公開

大阪大学大学院医学系研究科遺伝統計学教授 岡田随象氏(47期)

- ・公開ワークショップ：2020年3月27日(土)

「駒場将棋道場～将棋の世界を知ろう～」

日本将棋連盟プロ棋士 勝又 清和七段、本校将棋部

## 2. 研究会・研修会関係

### (1) 第47回教育研究会 2020年11月21日(土)

感染拡大防止の観点より、完全オンラインでの実施となった。SSH活動の実践と主体的な学びを重視した3教科の授業を録画公開し、それぞれの授業に関する研究協議をWebセミナー形式で行った。

- ・研究主題「(コロナに負けない)主体的で探究的な深い学びをめざして」
- ・公開授業(理科/英語/社会) 研究協議会(理科・英語・社会)

### (2) 校内研修会

第1回 2020年6月18日(水) 中止

第2回 2021年2月19日(水) 資料発表 テーマ「教育研究会オンライン実施報告」

### (3) SSH全国数学科教員研修会(数学)

2020年12月6日(日)本校にて、SSH校『数学』分野の実践事例報告や開発教材に関する研究協議をオンラインで実施、首都圏のSSH校からの報告及び、本校数学科のSSH事業実施事例報告を行った。

## 3. 校内研究プロジェクト関係

### (1) 教科・分掌ごとの研究プロジェクト：計8つの研究プロジェクト

(教科)国語, 社会, 数学, 理科, 保健体育, 技術・芸術, 英語, および生徒部

### (2) 校内プロジェクト委員会：全教員が以下の1つに属し、年8回の会合を持った。

プロジェクトI (P1「生徒の可能性の発掘」プロジェクト)

プロジェクトII (P2「学びとカリキュラムのデザイン」プロジェクト)

プロジェクトIII (P3「協働・コラボ推進」プロジェクト)

プロジェクトIV (P4「教育のグローバル化検討」プロジェクト)

### (3) 筑波大学・附属駒場中・高等学校連携小委員会：2020年7月9日(水) 中止

高校2年生の筑波大学研究室訪問に合わせて毎年行われているが、感染状況を鑑み、今年度は中止とした。

### (4) 個人研究

全教員が「個人研究」のテーマ等を論集で報告する予定である。(個人研究論文6本)

## 4. 研究報告書関係

### (1) 「第47回教育研究会報告書」 2021年2月発行

### (2) 「スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書・第四年次」 2021年3月発行

### (3) 「筑波大学附属駒場論集 第60集」 2021年3月発行

(文責：須藤雄生(教諭・研究部))

# 筑波大学附属坂戸高等学校の研究活動

## 1. WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

2019年度より、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール」事業の後継事業に位置づけられている、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の管理機関に筑波大学が指定され、本校はその拠点校となった。高等学校等の先進的なカリキュラム研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備をしながら、高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等を通じて、高校生へ高度な学びを提供する仕組み（AL ネットワーク）の形成を目指していく。

研究開発課題名：

### **国際フィールドワークを通して持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築**

次世代のグローバル人材育成を念頭に、社会課題の発生している現場での「国際フィールドワーク」を積極的に取り入れた体系的な探究型カリキュラムを開発し、国際社会において文化の異なる海外の人々と協働して社会的問題に取り組み、問題提起から解決に至る過程でリーダーシップ及びフォロアシップを発揮できる人材を育成するシステムを構築する。それらの成果を高校生が主体的に発表し、共有し、世界に発信する場として、国内外連携校・国内外の大学と研究機関・アセアンの国際機関や企業等とネットワークを形成し、国内外の高校生が一堂に会する「高校生国際 SDGs 会議」を開催する。更に 10 年後には、SGU として海外に 13 のオフィスを持つ筑波大学の世界展開力を附属学校として活用し、アジアから世界にネットワークの輪を広げ、世界の舞台で活躍できるグローバル人材の育成システムの構築を目指す。

## 2. 国際バカロレア日本語ディプロマプログラムについて

平成 29 年 2 月に、国際バカロレア機構（本部ジュネーブ）が提供する国際的な教育プログラム「国際バカロレア」の「日本語ディプロマプログラム」の認定校となった。平成 30 年 4 月から生徒が入学し、すでに 3 学年がそろった形で授業を実施している。

文部科学省は、グローバル人材育成の観点から、我が国における国際バカロレア（IB）の普及・拡大を推進している。埼玉県内では本校が初の認定校となった。在外の日本人学校への募集活動など、海外での募集活動や連携もすすめており、海外在留生特別選抜入試を開始した。2020 年度、本校 IBDP1 期生が最終試験を迎え、合格者を出すことができた。

## 3. 外部機関・大学等と連携した活動

### （1）「高校生国際 ESD シンポジウム@東京」「高校生国際 SDGs 会議」

アセアン各国の高校生と教員を招待し本校の生徒・教員とともに持続発展可能な社会づくりに向けたシンポジウムの開催を通して、参加者とその在籍校生徒・教員が持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的に実施している。2015 年度からは全国の SGH 校、SGH アソシエイト校にも参加を呼びかけ、各学校の SGH 活動の成果の共有も行い、海外の高校との交流も促進している。2019 年度からは WWL 事業の一環として実施し、本校の国際教育を推進する核となる活動となっている。2020 年度は 10 月 30 日

(土)には、海外から7校が参加し、オンラインで開催した。

## (2) 国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム

平成20年度より附属学校教育局からの支援をもとに、生徒が海外を対象にした卒業研究を行う際の調査に関する支援をしている。本年度は、Covid-19の影響で中止した。

## (3) 地域連携「つくさか地域食育支援プロジェクト」

平成22年度より本校農場を活用し、近隣小中学校への食育支援活動を開始した。23年度からは、筑波大学社会貢献プロジェクトに採択され、本校における農業教育の実績とノウハウを原資として、近隣の小中学校における食育活動を支援しようとするものである。具体的には、①中学校への給食食材の提供、②小学校における農業体験学習の支援を実施している。

## (4) 筑波大学との連携

### ①大学教員による特別講義

1年次科目「産業社会と人間」において、出前授業として体育系、生命環境系、人文社会系、人間系、システム情報系等の先生方による特別講義が行われている。2020年度はオンラインで実施した。

### ②「ASEAN 横断型グローバル課題挑戦的教育プログラム」との連携

AIMS プログラム (ASEAN International Mobility for Students Programme) で筑波大学に留学をしているアセアン各国の学生が坂戸高校を訪問し、課題研究や文化交流に関するプログラムを行っている。

### ③総合地球科学入門

地学的な事物・現象が、生物や人間の生存に適した地球環境の形成に密接に関連していることを野外実習により経験的に学んでいる。教育研究科の院生も参加しているが、2020年度はCovid-19の影響で中止となった。

### ④SEAMEO (東南アジア教育大臣機構) との連携について

SEAMEO 共同機関 (Affiliate Member) である筑波大学 CRICED および国際室と連携して、アセアンの大学生の教育実習を受け入れるなど、グローバル教育に関するパイロット事業を実施している。Covid-19の影響で2020年度は中止となったが、オンライン実施を含めて検討している。

### ⑤つくば機能植物イノベーション研究センター (T-PIRC) での生徒実習

毎年夏季休業中の恒例行事となっている実習である。7月下旬に、センターの協力のもと、2年次「農場実践」を選択した生徒たちが充実した実習を体験している。2017年度、農林技術センターが遺伝子実験センターに統合され、「つくば機能植物イノベーション研究センター (T-PIRC)」となり、T-PIRC での実習を行っている。なお、2020年度夏季の実習はCovid-19の影響で中止となった。

### ⑥オリンピック・パラリンピック教育

筑波大学は、平成22年12月嘉納治五郎生誕150周年を記念して、新たに「オリンピック教育プラットフォーム (CORE : Centre for Olympic Research and Education)」を設立した。これを機会に本校でも22年からオリンピック・パラリンピック教育に関する理論的研究と教育実践を推進し、筑波大学と連携をはかっている。

(文責：建元 喜寿)

# 筑波大学附属視覚特別支援学校の研究概要

## 1. はじめに

附属視覚特別支援学校は、幼稚部から職業課程の高等部専攻科まで幅広い教育課程を有し、視覚に障害のある幼児・児童・生徒に対して個々の発達段階に応じた教育・支援を実践している。また本校教員は、最早期（0歳児から2歳児まで）の乳幼児の育児相談や支援、通常学校に在籍する児童・生徒とその指導者への支援、大学課程や各種学校に進学した生徒の在籍校からの様々な相談への対応や支援、さらには卒業後の就労に関する支援など、視覚障害教育・支援におけるセンター的な役割を担っている。

現在、他の盲学校（視覚特別支援学校）の多くが、少人数化や重度重複化に加え定期的な人事異動等により、視覚障害教育における教科および領域の専門性の維持、継承ならびに発展が困難な状況となっている。このような現状からも、附属視覚特別支援学校は、各種研究活動や情報発信などの重要なミッションを継続していくことが重要である。

本年度も昨年度に続き、これまで取り組んできた視覚障害教育の実践に加え、その専門性の継承と発展に取り組んでいる。また、本校特有の幅広い階層教育間での連携を強化するために、校内での情報共有化と専門性の向上を目指した校内研修会の定期的な開催、各種研修会・研究会の開催など、教員の積極的な参加の促進に努めている。

さらに、視覚障害教育の国際教育拠点として、特にアジア諸国への情報発信および共同研究を継続している。平成28年度からインド共和国における視覚障害者の職業自立支援の一環として、令和元年度からはタイ王国・タイ視覚障害者支援クリスチャン財団と国際交流協定を結んでいる。今年度は、タイ盲学校とオンラインによる交流を実施するなど、国際交流事業を継続している。

連携教育の推進においては、教育局や特別支援教育連携推進グループ等を通して、大学や他の附属学校との連携研究・研修会にも積極的に参加し、更なる専門領域の拡充を目指している。

## 2. 研修会及び研究会

### 【主に校内対象の研修会】

- ・「学校におけるネット配信上の危機管理について」 12月8日（火）  
講師：星野 豊氏（筑波大学）（30名参加）
- ・「インクルーシブ教育時代における盲学校の役割 ―アメリカの盲学校視察調査から見てきたもの―」 12月16日（水） 講師：宮内 久絵氏（筑波大学）
- ・「インクルーシブ教育における外部支援の現状と課題～塙保己一学園での実践を通して伝えたいこと～」 令和3年2月5日（金） 講師：波田野圭子氏（埼玉県立特別支援学校 塙保己一学園 特別支援教育コーディネーター）
- ・ミニ研修会（年間11回） 校内のニーズに応じた研修テーマを設定し、校内の教員を講師として実施した。

### 【校外向け研修会・研究会】

- ・全国盲学校音楽科設置校研究協議会 11月19日（木） オンラインによる開催（7名参加）
- ・視覚障害教科教育研究会 7月27日（月）～28日（火） 中止
- ・歩行指導者研修会 7月22日（月）～26日（金） 中止
- ・視覚障害に配慮した算数・数学教育に関する研修会 中止
- ・寄宿舎研究・実践交流会 7月29日（月） 中止
- ・日本視覚障害理科教育研究会（JASEB）研究大会 令和2年12月26日（土）オンライン形式による開催（42名参加）
- ・日本視覚障害社会科教育研究会 中止
- ・視覚障害者スポーツ研修会 7月29日（月）～31日（水） 中止
- ・盲学校理学療法科担当教員講習会 中止
- ・楽譜点訳研究会 中止
- ・点字指導者研修会 中止
- ・理療教育研究セミナー 10月17日（土） オンラインによる開催
- ・音楽科研究演奏会 11月7日（土） オンラインによる開催（72名参加）
- ・視覚障害算数・数学教育研究会 11月28日（土） オンラインによる開催（22名参加）
- ・全国視覚障害早期教育研究会 令和3年2月6日（土） オンラインによる開催

### 3. センターの役割に関する内容

- (1) 各部科毎の教育相談・就学相談の実施と支援
- (2) 家族支援・育児支援・発達支援・保育支援ならびに教材・教具の紹介や提供
- (3) 通級による指導，巡回指導
- (4) 在籍校支援と進学就労支援・点訳支援
- (5) 「科学へジャンプ」全国版及び「地域版」における講座講師及び主催 中止
- (6) 視覚障害教育ノウハウの発信としての公開講座等
  - ①免許法認定公開講座 中止
  - ②免許状更新講習講座 一部の内容に縮小して実施
  - ③公開講座「視覚障害教育基礎講座」（8月） 中止
  - ④筑波大学人間系障害科学域授業「視覚障害指導法」  
11月14日・15日に対面で実施
  - ⑤公開講座「盲・弱視児童生徒理科実験指導研修講座」 中止
- (7) 第18回学校公開 中止
- (8) 第17回視覚障害教育研究協議会 2月20日（土） オンラインによる開催（120名参加）
  - ① 講演 「新学習指導要領とこれからの盲学校の役割」  
講師：森田 浩司氏（文部科学省初等中等教育局 特別支援教育課 特別支援教育調査官）

② 本校の研究発表（3件）

- ・「オンラインを利用した盲学校交流」（小学部）
- ・「高等部卒業後の進路を見据えた指導 ～高等部普通科の取り組みを中心に～」  
（高等部）
- ・「職業課程における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業実践」  
（専攻科）

#### 4. 出版物を通じた研究活動

(1) 視覚障害教育ブックレットの発刊（年3回）

(2) 研究紀要 第52巻発行

以下のテーマについて研究成果をまとめた。

- テーマ1 運動あそびの取り組みについて（幼稚部）
- テーマ2 視覚障害のある児童が主体的に学ぶために その3（小学部）
- テーマ3 障害の重複化、多様化に対応した指導の在り方  
～発達段階を踏まえた実態把握に基づく課題設定～（小学部）
- テーマ4 手書きの実践 その1 ～文章を書く力～（国語科）
- テーマ5 新学習指導要領を見据えた社会科の教材と指導法を考える（社会科）
- テーマ6 単元の導入段階に必要な算数・数学的イメージ  
～文字式の計算（中1）～（数学科）
- テーマ7 感光器を用いた観察と実験（理科）
- テーマ8 豊かな感性を育むために（音楽科）
- テーマ9 立体表現（粘土）（美術科）
- テーマ10 陸上競技の指導（保健体育科）
- テーマ11 ものづくり（家庭科編）（技術家庭科）
- テーマ12 読書バリアフリー法制定の意義と今後の課題（英語科）
- テーマ13 中高生を中心とした点字指導について その3  
～読み教材の作成と工夫～（自立活動）
- テーマ14 あん摩・鍼灸臨床実習前施術実技試験の在り方について  
～認定規則改正にともなう追加カリキュラムの実施に当たって～  
（鍼灸手技療法科、理療教育研究セミナーとして10月に実施）
- テーマ15 自分でできる浴衣の着付け（寄宿舎）

#### 5. 各種事務局を通じた研究活動

日本理療科教員連盟，全国盲学校普通教育連絡協議会，関東地区理療科研究会，全国盲学校音楽科設置校連絡協議会，全国視覚障害早期教育研究会，全国盲学校理学療法教育研究会，日本視覚障害社会科教育研究会，視覚障害算数・数学教育研究会，全国盲学校体育連盟，東京都弱視教育研究会，日本視覚障害理科教育研究会（JASEB），全国高等学校長協会入試点訳事業部 等

（文責 丸山 訓英）



# 筑波大学附属聴覚特別支援学校の研究概要

## 1. はじめに

本校は、両耳の聴力レベルが概ね 60 デシベル以上で、補聴器等の使用によっても話声の理解が不可能か著しく困難な障害がある幼児・児童・生徒（学校教育法施行令 22 条の 3）に、その障害による困難を克服するために必要な知識・技能を授け、幼稚園・小学校・中学校・高等学校に準ずる「対応の教育」を行うことを基本方針とする。この方針のもと、一定規模の学習集団を確保し、一貫した教育に基づき、確かな日本語力・学年対応の学力・年齢相応の社会性を育み、自立した社会人の育成を教育目標とする。本校は、聴覚障害児教育の可能性の追究、実践的な研究の推進による教科指導法の専門性にかかわる事項の追究、教育実習と介護等体験実習、現職教員研修、国内外からの聴覚障害教育関係者等の参観の受入れを通して、この教育の発展に貢献することを使命とし、その成果を全国に発信することをもって啓蒙・啓発を行う。

3 歳未満の乳幼児教育相談も担当する幼稚部は日本語の基礎力の育成、小学部は日本語力の育成をめざして児童の実態に応じた教材・教具を工夫した授業展開の実践、中学部は基礎学力の向上と生徒の学ぶ意欲を伸ばすための個に応じたきめ細かな指導、高等部普通科は習熟度別学習グループによる教科指導と大学や専攻科への進学や就職への準備など個々の生徒の進路に応じた類型編成による教育課程による指導を行い、高等部専攻科（造形芸術科・ビジネス情報科・歯科技工科）は各専門分野の学習を通じて生徒の個性を十分に伸ばさせ、社会自立できる人間の育成をめざしている。また、遠方の生徒のために寄宿舎を併設し、寄宿舎指導員と舎監による生活指導を行っている。各学部は、通常学校との交流や対外試合、公募展への応募などにも積極的に取り組んでいる。また国立パリ聾学校や国立ソウル聾学校と国際交流協定を締結し、生徒の相互訪問を通してグローバル化に対応できる教育にも力を注いでいる。

## 2. 研究活動

令和 2 年度の研究課題は次のとおりである。

幼稚部は「聴覚を活用した言語指導についての実践的研究」、小学部は「確かな学力と豊かな言語力を育む指導実践に関する研究—これまでの指導実践と新たな実践や取り組みとの融合」、中学部は「基礎学力向上に向け、個に配慮した読み・書き・計算に関する取り組み」、高等部普通科は「確かな学力を身につけるための指導方法の研究」、高等部専攻科は「確かな知識と技能を身につけるための指導方法の研究」、寄宿舎は「集団生活を通して年齢に応じた自立する力を身につける」である。この他、各教員が研究テーマを定め、自己研鑽に努めている。

## 3. 研究と成果の発表

今年度の各学部の研究と個人研究の成果は、以下の場で発表、発信された。

### (1) 「筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要」（第 43 巻：2021 年 3 月 8 日発行）への執筆 21 件

研究：「絵日記指導における言語発達に関する一考察～発達段階に沿った検討～」(小柳達朗・土手信・櫻庭悠希)、「聴覚障害児の読解力及び言語運用力の向上を目指した取組～

PISA 型読解力及び「B 問題」の実践を通して～（佐藤文昭）、「フィールドワークが聴覚障害生徒の視覚と精神面に与える影響 ～視覚的な疲労感，精神的な負荷，参加者の満足度に焦点を当てて～」（内野智仁・武林靖浩）

**報告：**「乳幼児教育相談における保護者支援（2）～感染症拡大防止による休校期間中の支援および学校再開後の取り組みを通して～」（山中健二・森敬子・土手信・佐藤幸子・桑原美和子）「発音・発語学習における教材と練習方法に関する一考察（太田康子）」、「聾学校の児童同士のコミュニケーションの変容から言語運用を考える」（佐藤文昭），中学部の国語指導における ICT を活用した家庭学習支援～双方向型 ICT 教材の開発～（佐坂佳晃）「理科の授業における効果的な ICT 活用の実践」（久川浩太郎），令和 2 年度高大連携プログラムの取組（久川浩太郎），「ICT を活用した主体的・対話的で深い学びを実現する英語の授業実践～文部科学省特別支援教育に関する実践研究充実事業（新学習指導要領に向けた実践研究）報告～」（松本邦子・田万幸子・澤口真弓・大平真奈美）「令和 2 年度フランス国立パリ聾学校（INJS）とのオンライン交流」（澤口真弓・田万幸子・久川浩太郎），「米国オハイオ州のインクルーシブ教育の現状～米国オハイオ州聴覚障害教育の研究報告～」（田万幸子・眞田進夫・鄭仁豪），「リモートの小論文指導～時間差のある双方向性授業の実践～」（田中優子），「美術部の文化祭企画～助成金事業報告～」（田中優子・青柳泰生），「新型コロナウイルス感染症対策における寄宿舎の対応について ～令和 2 年 2 月から 12 月までの記録～」（寄宿舎），「筑波大学公開講座「聴覚障害・発音指導研修講座」の取組を振り返る ～受講者の事後アンケートの分析を通して～」（鎌田ルリ子・山縣浅日），「令和 2 年度 幼児児童生徒聴力の実態及び聴覚活用委員会の取組～良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者数・感染症拡大防止に向けた取組～」（桑原美和子・山中健二・土手信・太田康子・石津勝基・長島素子・中坂聖・石井清一）

**(2) 「第 54 回全日本聾教育研究大会」（埼玉県大宮市：2020 年 10 月 8 日～9 日）でのオンライン発表 4 件**

「英語の授業における ICT を活用した主体的・対話的で深い学びを実現する授業実践～文部科学省特別支援教育に関する実践研究充実事業（新学習指導要領に向けた実践研究）報告～」（松本邦子・田万幸子・澤口真弓・大平真奈美），「資格試験対策のための e ラーニング教材の開発と実践」（西俣稔子），「筑波大学公開講座『聴覚障害・発音指導研修講座』5 年間の取組を振り返る」（鎌田ルリ子・山縣浅日），「高等部専攻科における赤城自然園の CM 動画制作を題材とした教育実践」（内野智仁・武林靖浩）

**(3) 季刊誌『聴覚障害』（2019 年度春，夏，秋，冬号）への執筆 13 件**

「子どもたちの瞳に魅せられて（全国聾学校合奏コンクール）」（山本カヨコ），「人工内耳装用児の学習等に関する全国調査」・幼稚部について（鎌田ルリ子）・小学部について（眞田進夫），中学部について（石井清一），高等部本科について（橋本時浩，久川浩太郎），高等部専攻科について（橋本時浩，久川浩太郎），難聴特別支援学級・難聴通級指導教室について（眞田進夫，橋本時浩），筑波大学附属聴覚特別支援学校幼稚部における実践研究（吉野賢吾，桑原美和子，鎌田ルリ子），まとめ（伊藤僚幸）「教育実践経験に学ぶ」（馬杉翠，林徳子，横山知弘，深江健司）

**(4) 学会などの発表 3 件**

「オノマトペの使用における健聴生徒と聴覚障害生徒の比較」 早稲田大学日本語学会記念論集 2021 年 11 月末刊行予定（田中優子）

「聴覚障害生徒のための英語家庭学習用動画教材の試作個人差に配慮した入門期の家庭学習用動画教材および学習プログラムの検討」日本特殊教育学会第58回大会（web・紙上開催）ポスター発表（紙上。聴覚障害 P2-35）（廣瀬由美）

「聾学校教師の推論に基づく教授過程の事例研究－熟練教師による個別形態の文章読解授業場面の検討－」聴覚言語障害，第49巻1号，43-55頁，2020年（深江健司・渡邊明志・鄭仁豪），

**(5) 産学連携研究 1件**

「ワイヤレス補聴システムの効果に関する研究」（ソノヴァ・ジャパン株式会社）

**(6) 科研費（奨励研究）1件**

「聴覚障害生徒に対する3DCGと映像を活用した実技指導の効果」（福島恵美子）

**(7) 助成金 2件**

「聾学校中学部生徒へのICT活用による家庭学習支援」第20回ちゅうでん教育振興助成対象（佐坂佳晃，荒川郁朗，石黒裕也，石津勝基，稲坂匡将，敷馬梨恵子，関圭子，奈良歩，西田奈保美，半沢康至，廣瀬由美，前川久樹，目黒拓洋）

「指文字の石膏像で全国の聾学校へメッセージを伝える」令和2年度一般社団法人芳心会助成金（田中優子・青柳泰生）

**(8) 受賞 2件**

「心の輪を広げる体験作文」内閣府 令和2年度一般の部 千葉県知事最優秀賞受賞（久川浩太郎）

「理科を中心とした高大連携の意義と効果」-公開講座への参加と研究者招へい講座における10年間の実践-

聴覚障害教育振興奨励会 令和2年度聴覚障書教育振興奨励賞受賞（久川浩太郎）

**(9) 文部科学省へ事業申請を行い採択された研究 2件**

委託事業

・文部科学省令和2年度特別支援教育に関する実践研究充実事業

「聴覚障害教育におけるICTを活用した主体的・対話的で深い学びの授業づくりに関する実践研究」

・文部科学省2020年度特別支援教育に関する実践研究充実事業（新学習指導要領に向けた実践研究）

「新学習指導要領に示される聴覚障害の状態等に応じた言語活動の充実～人工内耳装用児に対する全国調査と実践研究に基づいて～」

**4. 研修会等の取組**

開催を予定していた「聴覚障害教育担当教員講習会（文部科学省・筑波大学主催）（11月）」と「聴覚障害早期教育公開研修会（本校幼稚部主催）（2月）」は実施しなかった。

**5. 国際教育拠点事業の取組**

国際交流協定を締結しているフランスの国立パリ聾学校高等部生徒と本校の高等部生徒がオンライン交流を行った。

（文責：橋本時浩）

# 筑波大学附属大塚特別支援学校の研究概要

## 1. はじめに

本校では、附属学校教育局の掲げる三つの教育拠点構想「先導的教育拠点」「国際教育拠点」「教師教育拠点」を学校運営方針の柱として取り組んでいる。「先導的教育拠点」として今年度は、学校研究、インクルーシブ教育、ICT教育に取り組んだ。「国際教育拠点」としては、国際理解教育の推進、オリンピック・パラリンピック教育の推進に、「教師教育拠点」としては教育実習・介護等体験の受け入れ、公開講座・免許状更新講習、校内職員研修に取り組んだ。これらの学校研究活動を幼児児童生徒・保護者・教員が大学等の研究者と「連携」し、それぞれの研究課題や授業づくりの「向上」を目指す。そしてそこから得られた成果や知見を地域や国内に「発信」といったスローガンで学校力を高め、知的障害教育の拠点としての自覚と使命を持って教育・研究を進めてきた。また、本校は今年度60周年を迎えた。この節目の年をスタートとして、新学習指導要領への対応、新たな研究活動や教育課程の編成、学校の在り方を検討してきた。本項では、学校研究で取り扱った研究授業に焦点を当てて報告する。

## 2. 本校の現状

本校のカリキュラムの特色は、「教育内容を子どもの生活に即して整理し、経験学習に直接結びつけ、日常の生活行動の形式と系統を身につける」ことであり、現在まで変わっていない。それを踏まえて本校では、幼児・児童・生徒に身に付けさせたい内容を7領域（人間関係・生活・認知・身体運動・情操・コミュニケーション・社会生活進路）で構成している「学習内容表」と系統的・発展的な指導を行うために幼稚部から高等部までを通した指導形態のねらい、ねらいの系統性・発展性、扱う学習内容表の領域・授業集団、指導内容について検討し整理した「指導計画集」と「個別教育計画」の3つのツールを使って、「学習内容表の領域を合わせた指導」を行ってきた。しかし改訂された学習指導要領では、「教科等を合わせた指導について各教科、道徳科、特別活動のそれぞれの目標及び内容を基にして、それらの目標の系統性や内容の関連性に十分配慮しながら、指導目標、指導内容、指導の順序、指導の時間配当を十分明らかにした上で適切に年間指導計画を作成する必要がある。その際個々の児童生徒に必要な自立活動の指導目標及び指導内容との関連性にも十分留意が必要である」ことが示されている。そこで本校の「学習内容表の領域を合わせた指導」を学習指導要領に基づき説明できるようにする必要性が生じている。

## 3. 研究経過

これまでの本校で取り扱ってきた【学習内容表の領域を合わせた指導】が改訂された学習指導要領を踏まえて説明できるようにすることを目的に研究授業で取り組んだ（令和2年度10月幼稚部・小学部、11月中学部・高等部）。

今年度の校内授業研究会は、COVID-19の状況を踏まえてZoomを用いて実施した。



Fig.1 zoom を用いた授業研究会の様子

令和2年度の小学部から高等部までの授業研究会を通して【学習内容表の領域を合わせた指導】は、学習指導要領の教科等を合わせていることで説明できることを確認した。さらに個の教育的ニーズに応じることが指導形態に関わらず、活動題材の工夫で補うことができることを再確認した。しかし個々の実態を鑑みた上で子どもにとって必要だから合わせているという説明は十分ではないことが確認された。

#### 4. まとめ

##### (1) zoom による授業研究会実施の成果と課題

社会情勢を踏まえながら、ICT 機器を活用して授業実践の共有を行えたことは一つの成果である。課題としてブレイクアウトルーム等を活用した授業ごとの分科会では、分科会ごとに人数に偏りが生じ十分に議論が深まらない。密集を避けるため VTR を用いて実践の共有を図ったが、実際の授業を観察したいという意見があった。これらの意見を踏まえて次年度以降授業研究会実施計画立案を行う。

##### (2) 「学習内容表の領域を合わせた指導」の説明について

子どもにとって必要であるから合わせることを念頭に置く際に、指導内で扱っている知識技能に対する子どものレディネス、活用するという思考判断に関する子どものレディネス、意欲の喚起・自己効力感も含めての子どものレディネスなど学校や家庭での経験や課題も含めて単元設定の理由等に記載し説明する必要がある。しかしその全てを詳細に記載することは、計画の充実にはつながるが実践の形骸化につながりかねない。したがってまずは、教科等を合わせた指導を実施する際、合わせた指導が知的障害のある幼児児童生徒にとって、知識・技能を身に付ける（身に付けやすくする）ため必要なのか、思考判断表現を高める（高めやすくする）ために必要なのか、身に付けた知識技能や思考判断表現を生活に活かすために必要なのか、また3つの柱を総合的に関連させるために必要なのか、学校としての考え方を明確にする必要がある。教科等を合わせた指導で取り扱う内容（例：行事単元や学習内容単元）によっても位置付け・取扱い方は異なる可能性もある。教科等を合わせた指導の考え方を学校全体で共有するとともに、幼児・児童・生徒にとって分かりやすい形で指導することを前提に、教員がより明確な指導意図や課題をもち計画・指導するのかを確認・担任・学部間で共有することが重要である。

これらの成果と課題を踏まえて次年度以降、知的障害児者にとって理解しやすい・身に付けやすい指導形態を引き続き追求していく。

参考・引用文献：

筑波大学附属大塚特別支援学校(2021) 研究紀要 第65集.

(文責：森澤 亮介)

# 筑波大学附属桐が丘特別支援学校研究概要

## 1. はじめに

当校は国立大学法人附属唯一の肢体不自由校として、肢体不自由教育における教育と実践研究の先導的役割を担うことを責務としている。これを踏まえ、研究重点課題に「**先導的研究**」「**教師教育**」の2点を位置付け、「生き方探求」を支える児童生徒の「生きる力」の育成を目指し、社会の変化や関係者のニーズを踏まえ、本年度は全校研究として3つの重点研究を設定し、実践研究に取り組んだ。「よりよい授業づくりを目指した実践研究 ～遠隔授業をツールとして～」 「障害の重い子供の教科指導の在り方に関する実践研究」 「自立活動における指導すべき課題の明確化と指導例に関する実践研究」である。

## 2. 先導的研究について「第49回肢体不自由教育実践研究協議会」

テーマ：つながる学び—主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

本年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、従来の集合研修ではなく、オンライン研修として実施した。講演やシンポジウムなどではZOOMウェビナーを利用し、事例紹介や研究協議などでは双方向型コミュニケーションが可能なZOOMミーティングを活用して実施した。

### (1) よりよい授業づくりを目指した実践研究 ～遠隔授業をツールとして～

新学習指導要領で、資質・能力の育成、主体的・対話的で深い学び、授業改善が求められた。しかし、準ずる教育課程で学ぶ生徒数は減少傾向にある。実際、遠隔合同授業を行った学校では、準ずる課程で学ぶ生徒のほとんどは学年に1名程度の在籍で、話し合うような活動は難しいという状況である。一方、クラスに3～7名程度の児童生徒がいる当校でも、肢体不自由による経験の少なさ・認知特性の課題・人間関係の固定化などの要因により、児童生徒の多様な意見や考え方を交換し合う授業展開が難しく、視点の広がりにくさ・学びの深まらなさ・表現力の課題などがある。そこで、両者を遠隔でつなぐことで、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための学習集団・環境を確保し、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行うことで、準ずる教育課程における学びの充実をはかることが目的である。

本年度、本校では11校の肢体不自由特別支援学校と1校の特別支援学級と遠隔合同授業を実施した。協議会のシンポジウムでは接続校からの実践報告や学びの観点の設定・各教科等での実践・児童生徒及び教員へのアンケート調査を行い、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善へつなげる取組を紹介した。また、国語、算数、社会、体育、道徳、自立活動における実践事例を紹介し、研究協議を行った。

中学部2年社会の実践では、青森と愛知、と当校の3校で、学校（地域）ごとに「東京は住みやすいか」「住みにくいか」について分かれ、作成した発表資料をもとにディベートを行った。地域の違いを生かした合同授業で、授業者からは、「当校の生徒にとっては、東京での生活の当たり前のことが他の地域とどのように異なるのかを比較することで関東地方の特色をとらえることができた。」「『住みやすい』『住みにくい』と主張する根拠にはどんな要因があるのか、いつも以上に生徒たちは資料を読み解き、根拠をもった主張を相手に伝えようとする意欲をもって授業に臨めたことで、対話を深められた。」という

声があった。また、いつも1名、ないし2名で授業を受けている相手校の生徒らからは、「ディベートは一人ではできないので良い経験になった」「二人だけだと、意見が一方に偏ったり、あまり広がりがないが、今回は比べられる意見がたくさんあった」という声や、「自分は東京に住んでいないので、東京に住んでいる人の意見を知ることができた」という声があった。

## 実践例（中学部2年生 社会：地理）

**単元名**「日本の諸地域－関東地方－東京は住みやすい都市？住みにくい都市？（ディベートをしてみよう）」

### 学習のねらい

「住みやすい」「住みにくい」どちらかの観点から、地形や気候・交通の発達と関連付け、その上で両方の観点で東京をとらえ、特色として理解することができる。

### 遠隔合同授業でのねらい

- ・ 地域の特色を他の地域（相手校の地域）と比較・関連付けて考察させること
- ・ 学習活動を通じて、都市やその近隣県で暮らす人々の生活について興味を持たせること



遠隔合同授業の実践を通して、遠隔授業には、肢体不自由の子供たちにとって多くのよい効果をもたらすことが分かった一方で、肢体不自由の児童生徒の学びの課題として多くの教員が感じている「思考の深まり」や「新しい考えの形成」にはまだ十分に遠隔を活用できていない現状が見えてきた。今年度の取組から、遠隔合同授業を効果的に実施するには、障害をもつ肢体不自由児では特に、児童生徒の実態、課題、配慮事項、学習のねらいなど、教員同士が情報を共有することが必須である。また、遠隔合同授業は対面授業以上に、授業中のやりとりに時間がかかったり、授業時間の調整を図ったりする必要があり、実施において教員の負担も大きい。有効な遠隔でのねらいや活動を明確にするとともに、教員の情報機器についての知識や活用能力を向上させる必要がある。

さらに、この取組を推進するために、遠隔合同授業マッチングサイトを開設し、11月中旬より運営を開始した。学校同士、児童生徒同士がつながることで、肢体不自由教育の発展に寄与することができればと考える。

## (2) 障害の重い子供の教科指導の在り方に関する実践研究

今回の学習指導要領の改訂では各教科で育成を目指す資質・能力が明確化され、その確実な習得が求められている。資質・能力の確実な習得のためには、各教科の特質を踏まえ、各教科を学ぶ本質的な意義を追求した効果的な指導が必要である。本分科会では、各教科の特質を踏まえた上で、一人一人の児童生徒に応じた指導ができるように手続きを整理した「各教科の単元開発のプロセス」を提案するとともに、そのプロセスに沿って開発した各教科の単元を整理した。協議会において、国語、算数、体育の実践事例を報告し、研究協議を行った。

### 「各教科の単元開発のプロセス」

- ①各教科の特質の把握：各教科の見方・考え方や各教科で育成を目指す資質・能力などを整理し、各教科での指導を通して目指すものは何なのか捉える。
- ②対象の児童生徒の実態の把握：児童生徒の全般的な様子や、学校教育全体を通して目指す姿、課題等を把握すること、そして、観点別の学習状況の評価によって各教科のこれまでの学習状況を把握する。
- ③各教科における児童生徒の目指す姿の具体化：1と2で把握した各教科の特質と、児童生徒の実態を照らし合わせて、児童生徒一人一人の各教科における目指す姿を明確にする。
- ④単元の指導目標の設定：3つ目に設定した「目指す姿」に向かうために、どのような指導が必要なのか、学習のまとまりとしての単元を構想し、指導目標を設定する。
- ⑤教材の選定と指導の仕掛けの設定：児童生徒が主体的・対話的に学びを深めていくためには、どのような教材でどのように指導していくのか具体的に単元を設定する。
- ⑥児童生徒の学習状況の評価を踏まえた指導改善：実際に児童生徒に指導を行っていく中でも、常に学習状況の評価を行い、各教科の資質・能力の育成に向けた指導改善を行っていく

### 実践例（小学部4年生3名 小学部2段階 国語）

**単元名**「紙芝居を作ろうⅣ」  
（教材：「ケーキを育てよう」  
『はじめてのドラえもん』  
藤子・F・不二雄 小学館より）



#### 単元の指導目標

読み聞かせをもとに、絵の様子や話の筋を自分の言葉で表現することを通して、言葉で 周囲の人とつながることのよさを感じることができるようにする。



小学部4年生の国語の実践では、児童らは、話の筋を捉えてふさわしい言葉を考えるだけでなく、どんな風に言うか、ということも考えて表情を工夫して台詞を表現しようとする様子が見られた。また、単元が進むにつれて、児童同士で話に聞き入ったり、会話したりする等、児童同士でのやり取りが増えてきた。言葉から受け止める感覚が豊かになってきているとともに、人とつながるための言葉が育ってきたと評価できた。

本プロセスに沿って単元を開発したことで、授業者は「何のために何をどう指導するのか」ということを一つ一つ整理することができ、児童生徒の実態と照らし合わせながら創意工夫し、学習のまとまりとしての単元を開発することができた。一方で、より効果的な指導に向けては、各教科の特質や観点別の学習状況の評価に基づく主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善等について、さらに深めていく必要がある。また、知的障害を併せ有する児童生徒に対する各教科の指導においては、参考となる情報は十分とは言えない現状がある。今後は、さらに実践事例を増やし、データベースや書籍等によって全国の学校と情報を共有し、知的障害を併せ有する児童生徒の各教科の指導の充実を目指していきたい。

### 3. 教師教育について「自立活動実践セミナー2020」

「自立活動における指導すべき課題の明確化と指導例に関する実践研究」についての詳細は、「コロナ禍での取り組み」の「オンライン研修の成果と課題 ～自立活動実践セミナー2020を通じて～」に記載する。

### 4. 研究成果の発信

- ・第49回肢体不自由教育実践研究協議会の開催  
令和3年2月4日（木）・5日（金）オンラインにて開催
- ・第56巻研究紀要作成 令和3年3月
- ・全国肢体不自由教育研究協議会（オンライン開催）における分科会・ポスター発表  
令和2年12月11日（金）～12月25日（金）
- ・日本特殊教育学会（オンライン開催）における自主シンポジウムの開催・ポスター発表  
令和2年9月19日（土）～10月20日（火）

### 5. 外部資金・連携研究

- (1) 文部科学省 新時代の学びにおける先端技術導入実証研究事業（遠隔教育システムの効果的な活用に関する実証）
- (2) 文部科学省 若年者の消費者教育の推進に関する集中強化プランにおける若年者の消費者教育推進のための実証的調査研究「肢体不自由児の自立と社会参加への力を育む消費者教育に関する研究」
- (3) 前校長宇野彰先生（筑波大学システム情報系 鈴木健嗣先生共同研究）「肢体不自由特別支援学校の教職員や保護者等における腰部の負担軽減に関する研究」（JSPS 科研費 課題番号：18K02779）

（文責：村主光子）

# 筑波大学附属久里浜特別支援学校の研究概要

## 幼児児童一人一人の課題を踏まえた各教科等の授業づくり ～子供に育てたい力を育む各教科等の指導～

### 1. はじめに

附属久里浜特別支援学校は、幼稚部と小学部からなる特別支援学校であり、知的障害と自閉症を併せた幼児児童 50 名が学んでいる。寄宿舎が併設されており、遠方に居住している児童 5 名が平日、共に生活をしている。また、教員のうちおよそ 1/3 が各県からの交流人事であり、3 年程赴任している。

本校の教育目標は、「子供一人一人の思いや個性を大切にし、障害特性等に応じた指導を通して、豊かな心と丈夫な体を育み、主体的に考え、判断し、表現する力と態度を育成する」である。教師一人一人が、子供の実態を理解し、指導目標・内容を適切に設定し、子供に合わせた指導を追求している。

### 2. 過去の研究について

本校では、平成 16～22 年度まで自閉症の障害特性に応じた教育課程の研究開発を行ってきた。その後、平成 23～26 年度は、子供の思い、考え、行動する力、表現する力を育てる指導を追求した。平成 27～29 年度は、この二つの時期を踏まえて、子供たち一人一人が確かに育つ授業を追求するために、実態の理解や課題の設定等の根拠を明確にした授業づくりを追求した。平成 30 年度からは、これまでの実践研究の成果とともに、新学習指導要領を踏まえ、子供たち一人一人の指導課題（指導すべき課題）を明確にし、それを踏まえた自立活動及び各教科等の授業づくりを追求している。

本校の研究は、自閉症の障害特性という共通性に注目することから、子供たち一人一人の思いや考え等の個別性を大切にされた教育の在り方を追求することへと発展してきている。

### 3. 今年度の研究について

#### (1) 研究テーマ設定の理由

研究テーマ設定の理由は、これまでの研究成果を生かすとともに、「①子供たち一人一人の『今』の実態を理解すること」、「②安定した学級経営を行い、子供の指導課題を踏まえた授業を着実に進めること」という 2 点である。具体的には、①は、新型感染症拡大を防ぐための長期にわたる臨時休業を経て登校してきた子供たちの実態を理解し、「今」の指導課題を明確にすることである。②は、新たに赴任した教師とともに、子供の指導課題を踏まえた授業づくりを追求できる学級経営を行うことである。

そこで、研究テーマを「一人一人の指導課題を踏まえた各教科等の授業づくり～子供に育てたい力を育むための各教科等の指導～」とした。

## (2) 研究の目的について

- 1 幼児児童の学習上・生活上の困難さ（以下、困難さと表記）から指導課題を導き出し、幼児児童の実態を捉えた授業づくりをする。
- 2 各教科等の授業において幼児児童の変容から、目標設定や指導計画、指導内容や指導方法などにおいて効果的であった指導についてまとめる。

## (3) 研究方法について

まず、子供の指導課題を導き出すために、以下の方法で研究に取り組むこととした。学級担任全員で自立活動の「流れ図」（平成30年度の研究で整理、作成した本校独自の図）を活用して、子供の困難さを明確にした上で、その理由や原因を探ることで、指導課題を明らかにすることとした。その上で、各教師が一人の事例児を決め、指導の経過や子供の变容を記録し、指導の効果を検証することとした。

次に、各教科等の授業において効果的であった指導をまとめるために、以下の方法で研究に取り組むこととした。始めに各学級で子供にどんな力を育てたいか、何を大切に授業づくりを行うかを明確にし、学級ごとに研究テーマを設定することとした。その上で、研究テーマに沿った授業を計画、実施し、授業を通して子供が何を学んだかといった子供の学習評価を基に、授業や指導計画を見直すとともに、効果的であった指導について整理することとした。

## (4) 研究の経過・結果

### ①自立活動の授業づくりについて（研究の目的1）

学級担任全員で、子供の困難さを把握し、その困難さが生じている理由や原因を考えるために、「流れ図」を活用して、フォーマルなアセスメントの結果や子供と関わりながら得られた情報を整理した。その上で、指導課題を考え、指導目標を設定し、その目標を達成するために、何を、どの指導場面で、誰が、どのように指導していくかを計画した。次に、授業実践を行い、子供の評価を基に、授業や指導計画を見直していくことを続けてきた。

こうした授業実践を通して、子供の困難さにはいくつかの共通する特徴があること、それらの特徴に対して共通する指導のポイントがあることが明らかになった。例えば、「相手からの関わりに気付かない」という困難さがある子供への指導のポイントとしては、「子供の好きな遊びや好きなことに合わせて十分に関わること」、「子供の正面から、言葉掛けをしたり、身振りで表現したりして関わること」、「子供の様子に合わせて、共感的な言葉を掛けること」の3点であった。この他にも子供たちに共通する四つの困難さに対する指導のポイントが導き出された。（「令和2年度 実践研究集録」PP.33-36）

### ②各学級の授業づくりについて（研究の目的2）

各学級で子供たち一人一人の指導課題を導き出した上で、子供にどんな力を育てたいのか、何を大切に授業を行いたいかなどを考え、研究テーマや対象授業を決め、授業実践を行った。子供の育ちや指導の効果を検証するために、Web会議システムを活用した授業研究会を、各学級が1回実施した。

授業実践及び、授業研究会を通して、子供に「育てたい力」を育むために効果的な指導

のポイントがあることが明らかになった。例えば、小学部3年生では、「自分の気持ちを伝えたり、相手の働き掛けに応じたりする力～支え合い、学び合える仲間を目指して～」という研究テーマのもと、いきいきタイム（生活単元学習）を対象授業として、実践研究に取り組んだ。具体的には、季節や子供たちの実体験と関連した絵本を教材にし、子供たちが自分の経験したことや、絵本の場面を教師や友達と一緒に再現することを通して、子供同士が関わり合うことができるようにした。授業を通して、明瞭な話し言葉がなく、特定の教師と関わるが多かった子供が、友達が絵本の一場面を再現して腕立て姿勢をする様子を見て、隣で同じような姿勢をしてほほ笑むようになる等、子供たちが互いの存在に関心に向け、積極的に交流するようになっていった。この授業における指導のポイントは、絵本の場面をより思い浮かべることができるように、具体物の教具を用意したり、子供たちが好きな場面に繰り返し取り組む等、授業の展開を工夫したりすることであった。

（「令和2年度 実践研究集録」PP.37-53）

このように、教材・教具の工夫や授業展開、教師の関わり方など、いくつかの指導のポイントを整理し、明らかにすることができた。

#### **(5) 今後の課題**

一つ目は、知的障害を伴う自閉症児一人一人が学び、育つことができるように、自立活動の指導を確実にを行い、それを軸にした実践研究を推進することである。二つ目は、日々の授業づくりに真摯に取り組み、子供が育つ根拠を明確にした授業づくりを提案することである。

（文責 間山響子）

## IV 附属学校教育局・附属学校について

- 1. 附属学校教育局 . . . . 82 頁
- 2. 附属学校の主要な沿革 . . . . 83 頁

# 筑波大学附属学校教育局・附属学校について

## 1 附属学校教育局（教育長 茂呂雄二）

### ◇ 主要沿革

- 平成 53 年 4 月 国立学校設置法施行規則の一部改正により学校教育部設置  
教育開発研究、心身障害教育研究、教育相談研究及び教職教育研究の各分野と教育資料部門により発足
- 平成 元年 4 月 学校教育部の研究分野は学校教育研究分野に統合。夜間修士課程設置に伴い、学校教育部は教育研究科カウンセリング専攻と連携し、心理・心身障害教育相談を実施
- 平成 16 年 4 月 国立大学法人筑波大学が附属学校教育局設置
- 平成 19 年 4 月 特別支援教育の実施により附属学校の名称を一部変更

### ◇ 設置目的

附属学校教育局は、幼児・児童又は生徒の教育並びに保育に関する実際的研究を行うとともに、学長の監督の下に、附属学校（11 校）の運営に関する校務について統括及び調整を行う。

### ◇ 機能

- ① 附属学校を研究の場とし、学校教育に関する実際的なグループ研究を行う（研究センター的機能）
- ② 附属学校の運営に関する校務について統括及び調整を行う（統括・調整機能）
- ③ 教育相談を実施する（相談室機能）
- ④ 研究成果を広く社会に公開する（広報機能）
- ⑤ 教育実習の調整及び支援を行う（教育実習機能）
- ⑥ 附属学校教員のための研修の企画・実施（研修機能）

### ◇ 研究プロジェクト（令和 2 年度実施）

- ① プロジェクト 1：交流及び共同学習の実践と評価に関する心理学的研究
- ② プロジェクト 2：演劇的表現やパフォーマンスを通じた学習と学習環境の共創
- ③ プロジェクト 3：インターネット嗜癖・ゲーム障害の援助要請に関する研究
- ④ プロジェクト 4：ICT を活用した授業実践の共有と公開

## 2 附属学校の主要な沿革

### (1) 附属小学校 (校長：甲斐 雄一郎)

◇ 児童総定員：768名 (24学級)

◇ 沿革

明治 6年 1月 師範学校練習小学校として創設  
明治 35年 3月 東京高等師範学校附属小学校と改称  
昭和 24年 5月 東京教育大学附属小学校と改称  
昭和 53年 4月 筑波大学附属小学校となる  
平成 16年 4月 国立大学法人筑波大学附属小学校となる

### (2) 附属中学校 (校長：佐野 淳)

◇ 生徒総定員：600名 (15学級)

◇ 沿革

明治 21年 9月 高等師範学校の尋常中学校として創設  
明治 35年 3月 東京高等師範学校附属中学校と改称  
昭和 24年 5月 東京教育大学附属中学校と改称  
昭和 53年 4月 筑波大学附属中学校となる  
平成 16年 4月 国立大学法人筑波大学附属中学校となる

### (3) 附属高等学校 (校長：藤生 英行)

◇ 生徒総定員：720名 (18学級)

◇ 沿革

明治 21年 9月 高等師範学校の尋常中学校として創設  
明治 35年 3月 東京高等師範学校附属中学校と改称  
昭和 24年 5月 東京教育大学附属高等学校と改称  
昭和 53年 4月 筑波大学附属高等学校となる  
平成 16年 4月 国立大学法人筑波大学附属高等学校となる  
平成 26年 4月 **SGH** (スーパー・グローバル・ハイスクール) 幹事校に指定

### (4) 附属駒場中学校・附属駒場高等学校 (校長：北村 豊)

◇ 生徒総定員：中学 360名 (9学級), 高等学校 480名 (12学級)

◇ 沿革

昭和 22年 5月 東京農業教育専門学校附属中学校として創設  
昭和 24年 5月 東京教育大学東京農業教育専門学校附属中学校と改称  
昭和 25年 4月 同附属高等学校開校 農業科・普通科各1学級  
昭和 27年 4月 東京教育大学附属駒場中学校、同附属駒場高等学校と改称  
昭和 37年 4月 高等学校の農業科を普通科に転換  
昭和 53年 4月 筑波大学附属駒場中学校、同附属駒場高等学校となる  
平成 14年 4月 **SSH** (スーパー・サイエンス・ハイスクール) 研究開発校に指定  
平成 16年 4月 国立大学法人筑波大学駒場中学校、同附属駒場高等学校となる

(5) 附属坂戸高等学校 (校長：田村 憲司)

◇ 生徒総定員：480名 (12学級)

◇ 沿革

昭和 21年 4月 組合立坂戸実務学校・坂戸実修女学校として創設  
昭和 23年 6月 組合立坂戸高等学校と改称  
昭和 28年 8月 東京教育大学附属坂戸高等学校と改称  
昭和 53年 4月 筑波大学附属坂戸高等学校となる  
平成 06年 4月 総合学科としての「総合科学科」に改編  
平成 16年 4月 国立大学法人筑波大学附属坂戸高等学校となる  
平成 26年 4月 SGH (スーパー・グローバル・ハイスクール) に指定  
平成 29年 2月 国際バカロレア校に認定される  
令和 元年 4月 WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援  
事業実施拠点校となる

(6) 附属視覚特別支援学校 (校長：茂呂 雄二)

◇ 幼児・児童・生徒総定員：252名 (37学級)

◇ 沿革

明治 8年 5月 楽善会が発足  
明治 13年 1月 楽善会訓盲院が事業開始  
明治 17年 5月 楽善会訓盲啞院と改称  
明治 18年 1月 文部省直轄学校となる  
明治 20年 10月 東京盲啞学校と改称  
明治 42年 4月 東京盲学校と改称  
昭和 24年 5月 国立盲教育学校附属盲学校と改称  
昭和 25年 4月 東京教育大学国立盲教育学校附属盲学校と改称  
昭和 48年 4月 東京教育大学附属盲学校となる  
昭和 53年 4月 筑波大学附属盲学校となる  
平成 16年 4月 国立大学法人筑波大学附属盲学校となる  
平成 19年 4月 国立大学法人筑波大学附属視覚特別支援学校となる

(7) 附属聴覚特別支援学校 (校長：伊藤 僚幸)

◇ 幼児・児童・生徒総定員：272名 (40学級)

◇ 沿革

明治 8年 5月 楽善会が発足  
明治 9年 3月 楽善会が訓盲所設立の許可を得る  
明治 13年 1月 訓盲所を楽善会訓盲院と改称し、開校事業を開始  
明治 17年 5月 校名を楽善会訓盲啞院と改称  
明治 18年 11月 文部省直轄学校となる  
明治 20年 10月 東京盲啞学校と改称  
明治 43年 4月 東京聾啞学校と改称  
昭和 21年 東京聾啞学校が千葉県市川市国府台に移転  
昭和 22年 東京聾啞学校を東京聾学校と改称  
昭和 24年 5月 国立聾教育学校附属聾学校と改称



- 昭和 25 年 4 月 東京教育大学国立ろう教育学校附属ろう学校と改称
- 昭和 48 年 4 月 東京教育大学附属聾学校と改称
- 昭和 53 年 4 月 筑波大学附属聾学校となる
- 平成 16 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属聾学校となる
- 平成 19 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属聴覚特別支援学校となる

(8) 附属大塚特別支援学校 (校長：川間 健之介)

◇ 幼児・児童・生徒総定員：76 名 (13 学級)

◇ 沿革

- 明治 41 年 10 月 東京高等師範学校附属小学校に補助学級設置
- 昭和 19 年 太平洋戦争の激化に伴い、一時閉級
- 昭和 27 年 9 月 東京教育大学附属小学校特殊学級として再開
- 昭和 35 年 4 月 附属小学校第五部 (2 学級) 及び附属中学校特殊学級 (2 学級) を母体として養護学校が許可される
- 昭和 37 年 4 月 高等部新設
- 昭和 38 年 4 月 幼稚部新設
- 昭和 48 年 4 月 東京教育大学附属大塚養護学校と改称
- 昭和 53 年 4 月 筑波大学附属大塚養護学校となる
- 平成 16 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属大塚養護学校となる
- 平成 19 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属大塚特別支援学校となる

(9) 附属桐が丘特別支援学校 (校長：下山 直人)

◇ 児童・生徒総定員：141 名 (31 学級)

◇ 沿革

- 昭和 27 年 9 月 整枝療護園からの要請で、東京教育大学附属小学校から 2 名の講師を派遣し園児の教育を開始
- 昭和 29 年 4 月 東京教育大学附属小学校に肢体不自由児学級を新設
- 昭和 33 年 4 月 東京教育大学教育学部附属養護学校として開校
- 昭和 35 年 4 月 東京教育大学教育学部附属桐が丘養護学校と改称
- 昭和 48 年 4 月 東京教育大学附属桐が丘養護学校と改称
- 昭和 53 年 4 月 筑波大学附属桐が丘養護学校となる
- 平成 16 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属桐が丘養護学校となる
- 平成 19 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属桐が丘特別支援学校となる

(10) 附属久里浜特別支援学校 (校長：西垣 昌欣)

◇ 幼児・児童総定員：54 名 (18 学級)

◇ 沿革

- 昭和 48 年 9 月 国立学校設置法の一部を改正する法律が公布され、国立久里浜養護学校設置
- 平成 16 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属久里浜養護学校となる
- 平成 19 年 4 月 国立大学法人筑波大学附属久里浜特別支援学校となる